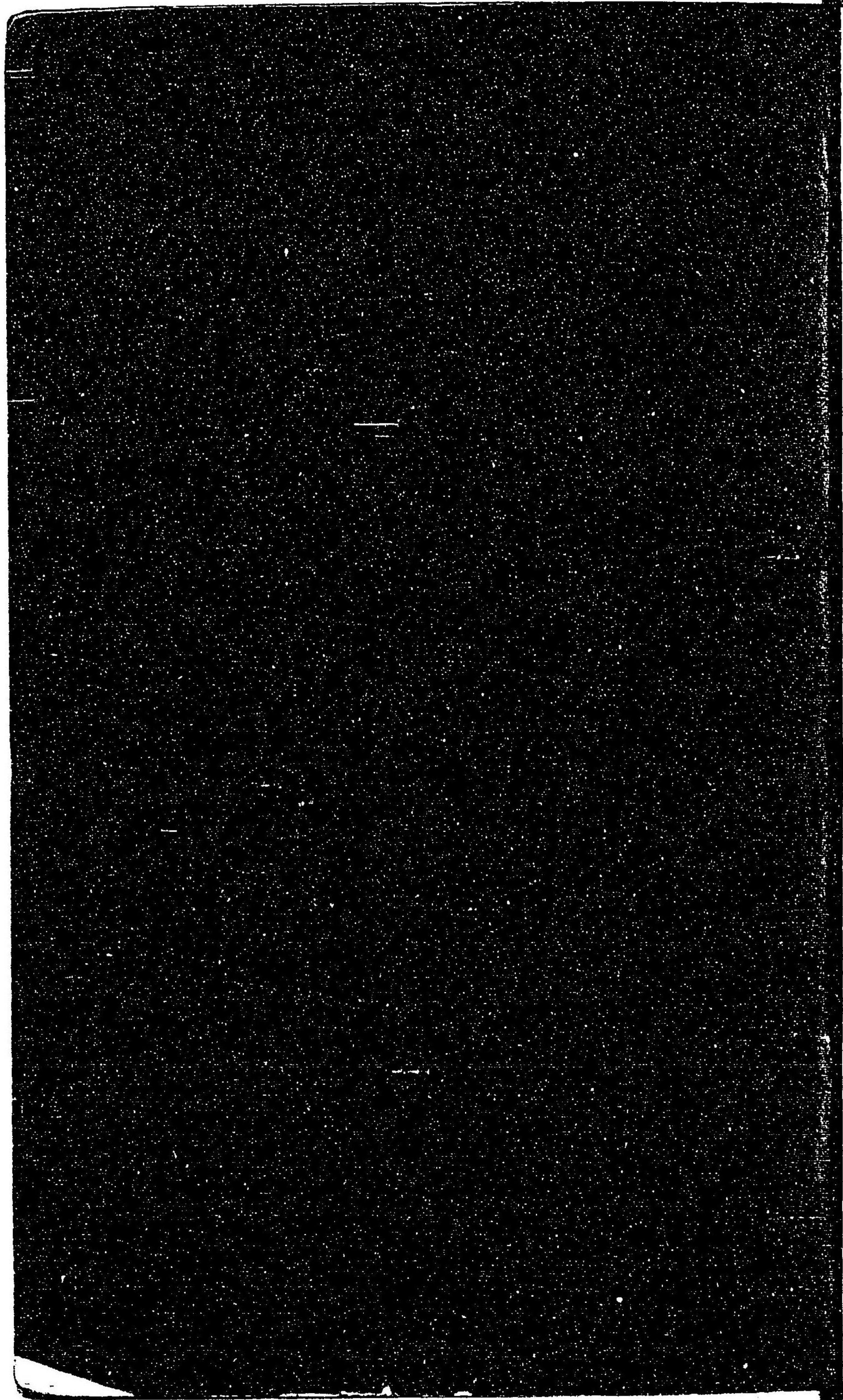


86
160

玲瓏隨筆
不動智神妙錄



The right page of the book is mostly blank, with some faint, illegible markings and a small, dark smudge near the bottom right corner. The paper appears aged and slightly yellowed. There are some very faint, scattered marks that could be remnants of text or drawings, but they are not legible.

序

明惠上人の北條泰時に於けるが如く夢窓國師の

尊氏に於けるが如く澤庵和尚は實に徳川三代將軍家

光の精寶なり當時徳川の天下尙ほ未だ鞏固ならず家

光沐世出の器を以て一大鐵案を下し家門三百年の基

礎を固むぬ是れ實に家光の資性英邁なるに依ると雖

も抑も澤庵和尚が幾多の名臣と俱に天下の機密に與

り尤は參詣抹植する所あらずんはあらず黒衣宰相の

名以て其の實を窺ふに足るべし和尚の禪要に深きは

勿論本領以外に儒を説き道を論じ易に深く醫に通じ



詩歌茶湯等の末技に至るまで殆ど其蘊奥を窮めざる
 はなし實に偉人と云ふべし弊店先きに澤庵和尚全集
 を出版して江湖の喝采を獲たりしか今又更に澤庵和
 尚の玲瓏隨筆及不動智神妙錄を併せて一部とあし出
 版發賣す希くは江湖の諸彦一讀の榮を玉わらんこと
 を聊か記して以て序に代ふ

上田屋書店編纂部に於て

編者識

玲瓏隨筆卷之一

一佛は即ち佛也、佛は覺也、覺に至るを佛になると云ふ也、されば覺を聞く
 は一の覺也、佛生念無稱名すれば、覺稱の人これを笑ふ、更にいわれなし、覺を聞くほどの
 者なれば佛生念無稱也、十どす、念日々に稱は具すべし、其惡障を重ぬるは惡業を斷せは、いつ
 及、聞く世の、さうか、念無稱名は覺の種の種なるべし、種を時かすして果は實るべからず。
 一業とは善の人のなすべし也、其業は善惡あり、善をば善業と云ひ、惡をば惡業と云ふ、其元身口意
 の二業より其の業も出づるなり、身三口四意三の名也、殺生、偷盜、邪淫、これは身になす三の業
 なり、妄語、綺語、惡口、兩舌、是は口になす業あり、貪欲、嗔恚、愚痴、これは意のなす業なり
 上の身口意の二業身になすを身業、口になすを口業、意になすを意業と云ふなり、身口の二
 業は離れてわざとならば、つまる處は意業なり、故に貪嗔痴の三障とて、意業を一切の惡
 業の本とす、貪欲より起つて是佛人殺とし、人の物を取りて我私にせんとするより、千般萬端の惡

詩歌茶湯等の末技に至るまで殆ど其蘊奥を窮めざる
はなし實に偉人と云ふべし弊店先きに澤庵和尚全集
を出版して江湖の喝采を獲たりしか今又更に澤庵和
尚の玲瓏隨筆及不動智神妙錄を併せて一部とあし出
版發賣す希くは江湖の諸彦一讀の榮を玉わらんこと
を聊か記して以て序に代ふ

上田屋書店編纂部に於て

編者 識

玲瓏隨筆 卷之一

一佛と成るとは、いかなるの事と云ふぞ、佛は覺也、覺に至ると佛になると云ふ也、されば覺を開く
ほどの智慧もなき衆生の念佛稱名すれば、覺爾の人これを笑ふ、更にいわれなし、覺を開くほどの
智慧なき衆生の念佛も行せずば、愈日々に惡は長すへし、其惡事を重ぬるはと惡業を感せば、5つ
覺を開く世のへきとや、念佛稱名は覺の樹の種なるべし、種を蒔かずして菓はなるへからず。
一業とは萬の人のなすわざ也、其業は善惡あり、善をば善業と云ひ、惡をば惡業と云ふ、其元身口意
の三業より萬の業も出づるなり、身三口四意三の名也、殺生、偷盜、邪淫、これは身になす三の業
なり、妄語、綺語、惡口、兩舌、是は口になす業あり、貪欲、嗔恚、愚痴、これは意のなす業なり
上の身口意の三業身になすをば身業、口になすをば口業、意になすをば意業と云ふなり、身口の二
も意を離れてわざとなさぬれば、つまる處は意業なり、故に貪嗔痴の三毒とて、意業を一切の惡
業の本とす、貪欲より起つて屋燒人殺をし、人の物を取りて我私にせんとするより、千般萬端の惡

事もいづるなり、嗔恚の怒より發りて、親子の間にては不禮不義をなし、兄弟朋友の間にては争をなし、切りつ切られつ、討ち討れんとするより、さまじくのと出づる也、又愚痴は暗鈍なる故に理をしらす、万事につきてひが事を以て理をなす也、人は理をもちてはひか事に隨はず、隨はんを隨へんとすれば、喧嘩をよぶ、此等は世間にありて人我相争ふ上の義なり、此外愚痴の罪數ふへからず、此世は夢なり久しかるへからず、財寶多くあつめ持ちて悦ぶ、雖も、枕の夢に金を得て實の金と思ひ、悦ぶこと限りなければ、覺める時金にあらざるか如し、夢の中にこれは夢なりと知らぬもの也、覺めて後こそ夢とは知れ、然れば此世も夢なれば、夢の中なれば、夢ともしらす、財寶を多くもちては實の財寶なりと思ひ、屋宅を結構にしては是屢樓化城なるをしらす、實の結構也と悦び、人と争ふも夢なればさめて相手なし、然るを實の人と我れ也と思ひ、勝つときは則ち悦ぶ勝つことを悦ぶ故に、専ら人我勝負を務む、願くは勝つことを悦ばず、負ることを怒らぬ心になりて、夢の勝負を勤めずして勝ちも負けもせぬ人たらんは如何そや、専ら勝負を勤めて勝ちの負けつする人とならんや、又勝負の修羅を止めて、勝ちもせず負もせず、心平穩ある人とならんか、勝負の修羅を勤むる人、負るときは則ち嗔恚の縮をもやし、身を焦し、胸をやく、これ身の損に非ずや、又勝つときは則ち悦ぶ、此悦も、何程我身を潤色することありや、只笑ふ聲空に聞ゆるのみなり、人よ

き衣若れば負けじと我も是れをとり求む、人よき家を營めば負けトと我も是れをとり營む、只我に相應の心もたんに如かし、人と智を輝かせば我も負けトと争ふ、莊生も云ひ一ことく、智也者争之器也、人高きに處れば、我争て卑きに處らんと勤む、水は卑きに下る、争ふことなしとて、老子も道德に譬へたり、此世の事を書かば盡さじ、言ふとも窮りなけん、都て愚痴のなす處なり、貪嗔の二つ痴より起れば、つまる所愚痴の一つ也、人間のあるあらゆる悪事は、皆愚痴よりすることと思ふべし、此愚痴は生付きて改められぬ物なりと儒者は思へり、佛法にては貪嗔痴の三毒は、修行して取除ける者なり、愚は黄蓮の苦く、甘草の甘きが如くにて天然なれば取除けられぬ物なりと思ふは愚なり、愚取除けられぬ物ならば、人間の一切の所作は、一も仕課られぬと一切の所作につきて皆其所作の上の智と愚と有るべし、弓作か弓を作るにかうすれば弓よし、かうすれば弓知りて惡いと云ふとを心得せられ、弓を作る智が暗くして、現はれる也、然るに弓を能く修行したれば此智發す、この智發明すれば愚己に削げ去る、愚既に削げ智現はる、修行せずして物の上手と云ふとなし、矢造も同じ、太刀、長刀作る者も同じ、百工の所作、何かこれにかはるべき、まして又三教の道や、然れば愚は削げる物なり、之を削がして智者にならまじきことならずや、一能をよく修行すれば、一能の智者なり、其能の上には愚なし、是愚を削がして智を現はしたる人なり、此の如

一切の上に一切の愚あれども、修行すれば一切の愚皆削げて一切の智現はる、道は一切にわたる物なれ、道をあきらむれば一切の上に智明かなり、或人云く、さは承はれども道者と云はん人に、馬乗らせたらは、なるまじきと云へり、應さる候、萬のことに事理の二あり、事は其業なり、業をする人は業をはすれども其道理を知らず、理を知る人は其業をば作さ、れども其道理を知る、馬の上能く保つ人も、馬を我儘にするとは未たならぬことあり、是れは馬の心と人の心と感せされは也馬と人と心々相感すれば、駈けふとも留めんとも右へも左りへも人の儘に成るなり、鞍によく保つ人、此道理を待たらは何か有らん、此道理を知るとは理也、鞍上によく保つとは事也、工は刀子の柄で、萬のことをすれども、刀子をうつとい治工の事なり、刀子の切れる切れざる金の堅く柔なるぞ木竹に合ふ合はぬの道理をは、工の知るところ也、刀子を作ること治工の事なり、金の堅きは竹を削るに不可也、金の柔なる可也、木を削るには是に反せり、かやうの事は刀子をつかふ人の知る事なり、是は理なり、治工のなすは事なり、事をする者この理を知れば、事理相應すへし。

鈍根與利根之辨

一儒道に云へるは、氣の純萃清明なるを禀けたるは、利根智慧あり、雜取汚濁なる氣を受けたる、鈍根愚痴なりと云へり、一往きこへたり、濁れる水に月の映り難き如く人の氣濁りたる故に、見るこ

と聞くこと心に移りかたきなり、故に物を得ると速し、又澄みたる水に物の影早く移ることく、心へ見ること聞くとか能くうつる故に、物の道理を心得ると早し、是を利根と云ふ、此理明けし、譬へば同じ爐火にて温むれども清酒は疾く温まり、濁酒は遅く温まるか如し、濁りたるには火氣速く入り、清酒には火氣疾く移るか如し、利根は澄酒の如し鈍根は濁酒のことし。 一不審

○澄める氣を受け利根也、濁れる氣を受けたる故に鈍根也、すめる氣受けたらん人は、百様の事皆利根なるへきに、只一能一藝には年十歳にして五六十の人も及ばず、其外の所作は常の人の鈍さにかはらざるは一能一藝とかりに天より澄める氣を賦與へたるか、因碩と云ふ者は、九歳にして三つの基を打ちたれども其の外の智慧は世上の並なり、又濁れる氣を受けてや萬事に愚なる者も、一能すくれたる處あり、其すくれたる所作は、同年にしてならぬ稽古しても及ばざる能作あれば、生れ來てよりの修行をなしけれども、遠ふ處あるは、其一能にかぎりて氣を別一分受けたるにては有るへからず、此辨別如何ぞや、傍に人あり云へるは、斯様のことも只自然の理なりと云ふ。 一不審

○鈍利は己に氣の清濁なりと云ふに付き立ちたる不審なり、然るを自然の理なりと云へば、氣の清濁と云ふ處をば破り玉ふか、儒にて儒のとを破り給ふは、我刀を把りて我身を破るか如き者なり。

一不審

一化育流行して萬物生成することは目前なり、花咲き緑立ち、葉落ち根に歸して、又春にかへること
 く萬物皆此の如し、人も又物なり、鳥獸蟲虻に至るまで化育にあへり、然れば天地の間の萬物は、天
 天を造り出せるといへり、しかれども植ゑたる粟を如何してか天生すること能はず、植ゑざる柿を
 是生するとあたはず、梅桃萬の菓植ゑずして生することなし、一切の種物うまらずして生することなし
 されば粟をば唯粟自ら造りいだし、柿をば柿自ら造り出すは天にはあらず、天は唯化育を施すはか
 りなり、是を譬へて云はし、天地は一盤の茶磨の如し、下に置る磨盤は地に喩ふ、回る磨は天に喩
 ふ、即ち回り動くを陽にたとへ、磨盤の常に靜なるを陰にたとへて、これ陰陽備はれりと云ふ、始
 めて手を懸けて回らし始めたる所より、回りと又元の所へ回りがへるは、春夏秋冬と回りと又元の
 春に回りがへるにたとふ、回るとは變也、又本の所へかゝるは通なり、即ち變通これなり、其間に茶
 を入るとときは則ち抹茶をるゝ、薬を入れば則ち薬粉となりてをるゝ、百の品を入れて挽かんとま
 まよ、百の品各々にして磨盤へをつる、萬物生々此比喩なり、然れば磨回るとさう茶にても、薬に
 ても、其已々色をあらはせども、磨其品々を造り出すにはあらず、磨は只回るばかりにて、をるゝ
 所の物は茶はちや、薬はくすり、已々と持ちて出て、其品々をあらはすなり、天地の化育も唯此の
 如し、天地の化育と云ふは、春は暖に、夏は暑く、秋は涼く、冬は寒く、又春に歸り、夏と變して

茶磨の回る如くなる、此化育ばかりを施せば萬物は已々持ちていつる物なり、縦令又茶磨終日回る
 ども、茶にても薬にても此方から入れされば、其色をあらはすこと有るへからず、天地は回れども
 種を下さしれば生せず、名もなき野の草も已々か種ありて、地に落つれば天地の化育にて生成する
 なり、天一々を造出すには非ず、然れば一章一木も其始なきの始より、粟と成る始る時に粟と成る
 道理ありて、粟となるにより、又終なきの終に至るまで、粟を植ゑて柿と成ることなし、梅を植ゑ
 て桃となることなし、已々か業を引きて梅はむめとなり、桃はもゝとなる、有情非情ともに此の如
 し、万物一々已か業を引きて生成する故に、引業と云ふ、万物相並んで滿業とす、引業とは一物々
 々の上を云ひ、滿業とは万物をこめて云へり、儒道には万物一氣の變也、天造り出せり、自然なり
 と云ふ、決定天造り出すと云はし、種をさる梅今目前に生すへき乎、植ゑざる桃今目前に生すへき
 乎、自然と云はし、梅を種ゑて桃ともなるへき乎、唯歴然梅は梅の引業にて梅に成り、桃は桃の引業
 にて桃となる、天は唯化育を施す計り也、梅桃は梅桃か自ら造り出すなり、天にはあらず、此外の
 道理あらは其答を聞かん、我門の小子答之。

一易に曰く廣大は天地に配し、變通は四時に配し、陰陽の義は日月に配し、易簡の善は至徳に配すと
 云へり、廣大とは易を褒美して云へるなり、易とは即ち天道のこと也、易道の廣大なることは即ち

天地に配すと云ふは、配すとは配偶の義なり、引合せてたくらへて云ふ義あり、易の廣大なること即ち天地に配すれば也、天地は實に廣大也、變通は四時に配す、易の變通をは即ち四時を以て配して云ふなり、四時は變して行く者なり、春の暖なるは夏の熱と變し、夏の熱は秋の涼と變し、秋の涼は冬の寒と變し、又取て觀して春と成つて暖なるを通と云ふ、去年の春の暖なるに通すると云ふ義これ易の變通なり、故に變通四時に配すと云へり、變通とは即ち四季の變通なり、陰陽は即ち日月なり、日出て月升る即ち晝夜也、春と云ふ名も始めはなし、氣升りて暖るを春と名けたり、本是夏の名もなし、氣空に浮んで熱するを夏と名けたり、秋本秋の名なし、氣降りて天漸く涼き時を秋と名けたり、氣下に沈んで天甚だ寒き時を冬と名けたり、四時の變て行くを變と云ひ、變して又本の春に歸るを通と云ふ、故に變通四時に配すと云へり、天道は此の如くやすくとしたるを易簡の善と云ふ、然ればやすくとして万物皆此化育に依り生成しても、かくやすくとしてしかも化育を受くる所廣大なる故に、簡をはそひなりと訓せり、人間の所作も、名人と云はるゝ人のする所作は、力を入れず、やすくとして成るものなり、天道これ也、故に易簡の善に至徳に配すと云へり、至徳とは聖人の至徳なり、聖君やすくとして實殿に座して居たまいて、天下の四民百工やすくと世に住んで己々か所業は、己々と勤めて國安穩也、聖君の徳に至徳と云ふ、天道易簡の善を聖人

の至徳に配偶ふとなり、配と云ふは此を夫と二をなりへ合せて見する義なり、聖君國を回して田作るか、蠶するか、角せよ兎せよとは云はずとも、田作る者は己と田作り、蠶するものは己と蠶し、四民百工己々となす業なり、聖人は只天道の易簡にして、万物己々と生成する如くに只天に法る、國の亂れざるやうにして居給へずれば、民は己々所作として身やすきなり、細々救法などを上から云ふ物にあらす、ひもいさことは己々か身に覺ゆることなれば、食を求むる業を己々とせずして叶わさるなり、寒きことも己々と身に覺ゆることなれば、己と勤めて著るなり、天道の化育をやすくと施して、万物己々生成する如くなれば民苦まず、天道の化育と云はやすくとしたることなり、故に易簡と云ふ、只氣の升ると浮ふとはかりなり、氣升るは春にして暖なり、氣浮へは夏にして熱す氣降れば秋にして涼し、氣沈めは冬にして寒し、寒ければ又變通して春となる、此外天地の化育と云ふことなし、此化育さへ紊れば、万物各己々と相續して盡きさるなり、茶磨をさへ回らせば茶は茶か自ら茶と現はるゝ也、磨は非す磨にはあらずと云ふは茶を磨へこちから入れさる者下ささるなり、夫万物を生すと云へども、種をおろされば生せさるなり、是天は化育而已にして物を造ることなし、人主の人を養ふか如し、養は化育なり、人主か人を作るにてはなし、人をは生すへき人ありて各々に生出せり、天道万物を化育す、人主万民を化育するも同じ道理也。

一或人曰く天地のことは物をこしらへて成すとはならず、只自然なり、自然なるに依りてやすしと云ふ、我此にをいて説きて曰く、何ことも前にこしらへずしてひよつと出生するならば、是を自然とも云へし、前にこしらへて時至りて出現することは、みな因縁なり自然にあらず、儒道には自然と云ひ、佛法には因縁因果と云ふ、今汝か云ふ、天地のことはこしらへずして自然なりと云ふ、我今言ふ所、天地万物皆こしらへて出たる物なり、是を以て自然に非ず因縁なりと云ふ、天地のことはこしらへず自然なりと云ふは然らず、立春正月の節至りて春の色現はるゝと雖も、十一月の中冬至よりはや一陽來復してこしらへ立て、正月の節に至りて其色を顯はす者也、前益なくして正月の節は俄に其色現はるゝにあらず、冬至よりこしらへて立春にいたるを因と云ひ、立春以後春の色顯はるゝを果と云ふ、これによつて佛法には因なくして果有ることなし、物は種を殖えすしては天も生ずるとなり、種をおろすを因と云ひ、生して實るを果と云ふ、因果の果は菓の熟なり、人盜をす、天に盜の性あらず、人自ら盜をす、何とも天也と云は、盜の性ありて天これを人に賦與する乎、さうには非ず、習ひ性となるは最初の一念が盜の因なり。

一五常は綱目の如し、一目を引上くるときは則ち衆目これに従ふ、一仁をわくるときは則ち四常尊屬と成りて之に相従ふ、一義をわくるときも亦同じ、一體一智一信をわくるときも亦皆其尊屬もの首領と成

るときは、則ち四者相従ふて以て眷屬となる、何ぞ管五常のみならん乎、百行皆然るなり、凡そ事は一是、万事なり、之々万端と謂ふ、一の本あるゆへなり、仁も亦端なり、義も亦端なり、百行万行皆端也、蓋異端と云ふは、一端を擧げて用ゆるときは、則ち其外を指して異端と謂ふべき也、仁を行へば則ち外四つ是異端なり、義を行ふときは則ち義を行ふ者のために、仁も亦異端なり、夫仁はひろく愛する也、有義無義共に廣く愛するのうちに在るときは、則ち義を行ふものゝために害あり仁を以て義を奪ふ故なり、害あるときは則ち義のために是異端なり、譬へば琴を造る者、琴を造るの工を專にせずして、笛を造らんとするの工を交するか如きは、則ち琴をつくるものゝ害なり、故に曰く、異をする是害而已、只其一事を專らにすべきの教なり、此教と云ふは始め修行底の人、特に之に依りて中を超へ上に及ぶ、則ち異端を交ゆるも亦其事の助けとなる事異なりと雖も、工む所の智は万事に渉る、其工む所の智を用ゆるときは、則ち之を用ゆるに笛も亦可也、これを用ゆるに琴も亦可なり、異端亦豈我作す所の助とならざらん乎。

一仁の字をこれを本と謂ふも可なり、これを末と謂ふも可也、仁の字これを本と謂ふときは、則ち仁義禮智四端の仁にあらず、是性理の別稱なり、休なり、仁義禮智の時是用あり、己に四端と言ひ本と言はす、惻隱の心は仁の端也、或は曰く、仁はひろくわいするの理也、是皆仁を以て休とし本と

す、四端の仁の字にはあらず、仁義は未なり、本にあらざるなり、も一之を本と謂ふときは、則ち人其愛未た生せず、成敗未た分たざる時これを仁と謂はん乎、これを仁と謂はん乎、已に博く愛するの心顯るゝを以て、仁者と謂ひ、己に成敗分明の心顯るゝを以て、義者と謂ふ、顯はれざるの時何を以て仁といひ、義といはん乎、水を酌んでこれを酒と謂ふへからず、これを酢と謂ふへからず、己に化して酒と成り、酢と成り、而して後に、之を酒と謂ひ、之を酢と謂ふなり、酒酢は末にて水これが本たり、仁義は末にして性これか本たり、喜怒等の七情も又之に同じ。

一人の恐ろしと思ふは鬼なれど、目お見へぬと云へば名のみなり、實に恐ろしと云ふは只人なり、手足健にして面に七竅開き、はたなく辨舌ある人は、無を有と云ひなり、天を地とも曲げ、鷹を鷗ども云ひなし、人を失ひ、死罪流罪に云ひなすも人の口也、芥川の邊にて鬼はや一口に食ひてんけりとは云へど、今夜を實に鬼に喰はれしと云ふ人のほちをは見す、人こそおそろしけれ、人は只爐中に一度入れたる炭を又本の炭計に入る、人は行末に眼しい、人の嫌ふ病を受くると云傳へたるこそ實なれ、炭のうらに火の付きたるをも知らずして、釜火須彌を焼くとは有り難きことに云へど、釜火程の火燃付きて牆壁につきぬれば、一城を見ながら燒裂はしぬる、其中の人の嘆悲か皆挟む火筋の先にあらんことを知らざるものは、實に恐れても餘りあることなり、鬼は恐ろしからず、人の仕

業ほどの恐ろしきとはなし、慎めや。

一物各其始め幽微にして、見る、所僅かなるもの也、寒の長する所世を驚すに及ぶものあり、人は只始めを見て長する所を見る故に怖れず、爛々たる火、繞りりと雖も之を救はされは一城を燒亡す涓々たる水、繞りりと雖も寒の足る所大船を泛ぶ、人生れて靜なるを性といふ、性に於て不善なしと雖も、此人長し壯なるよ及び、人を殺し盜をなす、一家を喪し敗り、一城を燒き亡はす、世の人は本を知りて末を知らず、鬼神の事をして論多し、其本を問ふときは則ち繞り氣を指す、禮記祭義に云ふ、幸我か曰く、吾鬼神の名を聞く、其所謂を知らず、孔子の玉はく、神と云ふは氣の盛なる也、魄と云ふは鬼の盛なるなりと、爾云ふ一氣僅に上りて毫芒の如し、其盛なるに及んで神の名あり、氣と云ふは魂なり、鬼は魄也、夫子の玉はく、衆生必ず死す、死すれば必ず土に歸す、是これを鬼と謂ふ、骨肉下陰に斃れて野土と爲り、其氣上に發揚して昭明蒸鬱悽愴となると云々、衆生死して野土に歸す、これを鬼と謂ふ、鬼の盛なる上に發揚してこれを魄と謂ふ、魂魄合してこれを神と謂ふ、また夫子の玉はく、百物の精神著るゝなりと爾云ふ、百物の精上り結りて神と成る、大廟の神、五岳四瀆の神、社稷各聖人これを祭りて儼にするなり。

一人に上中下あり、上の人と云ふは、物毎に心をつけ、其道理を一々觀して、そのこと、明らむる人

を上の人と云ふ、中下の人は何を見るも心を付けず、うはのそらにしてすこす、故に物毎の道理に暗し、道具を見るに上々の物ほど、彫も塗も床までも心をつけて仕たる道具は、上の道具也、草の物と云ふは細くさらざる物ぞ。

一自性を了らざる人は物に就て奇特を見る、眼未だ盡す、真理に至るもの奇特なきを以て奇特とす、凡人の奇特と思ふ處あらは、其人は至人にあらず、至人は奇特なし、奇特無きを以て奇特とす、奇特なきの奇特凡人の得ざる所なり。

一人に何事をも問はれて其答をするに、初めて思惟して問方の義に相合ふやうに云ふへきと、思ふはあしし、皆煩惱情識なり、只我心に打向ひて思ふやうに手間を入れずは答へたるは合ふものなり、もし合はずとも是非に及はず、情識なく思ふたけを云ふたるはよきなり、合せんとすれば、皆却て相合はざるなり、思ふたけをてまを入れずは答へて、いやさては違ひぬと云ふときは、如何様にも情解すへし。

一薰物に貝甲を入ると、彼の臭さばかりて芳さを衣小袖にとめるなり、貝甲更に芳さものにあらず臭さを以て能とす、佛菩薩化身再来して世を救ふにも、衆生の煩惱をからされば化身再来はならぬなり、佛祖の心は着く處なき也、衆生の煩惱の念よりものに着く、故にその念をかりて、母の胎に

着きて出現するなり、香は軽くして物に残り難し、貝甲の臭きは重くしてよく物につくを以て、借りてその香に和して薰を衣に留める也。

一古書に曰く、記誦の學は人の師とするに足らずと云々、今の世名を發する者は見たるを能く覺ゆる生質、以て、その誦する事良馬の行くか如く、以て人の耳を驚かす、それ難問をするに及んては少しも聖理を知ることなし、寔に記誦の學たる者乎、よく聖理を窮めることは記誦の才にあらず、理はもと言にあらず言を閉ぢて心以て會す、心もつて會して後に言以て顯はす、心以て會せずして言妄りに發す、豈人の師たらんや。

一生死即涅槃、煩惱即菩提、迷悟不二と、教ゆることは、本來空寂にして生死なし、煩惱の實性即ち正覺なり、迷と思ふは、即ち悟なり、一切の作業は幻夢の如くにして、本來ないものごと見れば一切に相を見ず、一切に相を見れば執着を離る、執着を斷んかために破相を示すなり、相を破りて後執を斷し了り、還り來て世間を見るときは、則ち破相すへきもなく斷執すへきもなし、然るを今の禪者、十分相に着し執を持し、向上の人の行履上の言説を取て以て我有とす、天地懸隔せり、眼を閉ぢて色を説くか如し。

一有義の善惡は、善惡共善なり、無義の善惡は善惡共に惡なり、人を敗つは惡に似たりと雖も、義

を以て人を敗り惡を懲し、義を以て人を成すときは善を勸めるなり、惡を懲して人をして善に進ましむ、勸善は人をして善を益さしむ、惡人を成り、善人を敗る、成る所、敗る所、總て是惡徒無義也。
一無欲は人の貴ふ所なり、有欲は人の賤しむ所あり、然りと雖も有義の欲は無欲に勝れり、無義の無欲は有欲に劣れり、有功と無功となり、有欲にして施すことを知る者は義あり功あり、人として犬馬の如く金銀を見る者は義なく功なし、金銀は寶なり、豈貴ひざらん乎、豈欲せざらん乎、然れども布用ひざるときは則ち瓦の如き而已。

一あそこなる物取りて來よと云ふに、言ふ人の顔を見るは利根のものなり、言ふ人の顔は見すしてあそこへへ行けども、終に云ふ人のいふ所に行き向はず、鈍利かくの如く迷ふなり、猿猴の能するに鼓打一つ聲をうてどもうてども、大夫出でず、かゝる時鼓打待兼て、樂屋を頻に見ること、尤も見にくし、樂屋を見ずして芝居を見れば、人の顔の色にて出るか出口かは能く知ると云ふ。

一道の至極は皆靜なり、中庸に合ふ、中に過くるもの氣の馳るなりと、性理大全に見へたり、氣の走るは皆勿忙の故なり、至人は皆靜なり、一より二三を超へ、四にはしるはこれ中を過ぎて皆大過なり。

一鏡を水に入るときは曇りて見へず、湯に入るときは明かなりとは何の謂ぞや、火の源を益して

以て陰翳を消す、水の主を益して以て陽光を翳む。

一今人古人風俗同じからず、古を是とし今を非とするものは古人なり、古を非とし今を是とするものは今人也、古人今人の間に於て、好しとする所あるへ、聖道に違ふ事は今人好しとする所と雖も我は從ひかたし、道理にそむくほどのことにもあらず、當世の風体、座舖の起居振舞、茶を點し、酒を酌み、衣裳の着なしなどのことは學ひなし、見習ひて今時の人の目に宜きやうにすへきこととなり古はかくなかりしを今はかくの如くする、一向に惡しとて情強く云ふは偏枯なり、古人は死して遠し、來てこれを見ず、今人は生きて近く在りてこれを見る、よしとも見よ、あしとも見よ、好惡は今人の目にあれば今人の目に宜きやうにそへきことなり、如何に今人の目によしとも道理に負き聖道に違ふことは言ひ難し、行ひ難し、空侍者か云く、師の言に不審あり、古人は死して遠し來てこれを見すと云へども、今人の風俗を嫌ふは即ち古人なり、然れば今時に古人あり、今人古人目をならへて之を見る、古人の風情を學ばし今人の目に宜しかるへからず、これを嫌ふへし、今人の風情を學ばし古人の目に宜しかるへからずして、これを嫌ふへし、是をせんこと如何そや、我答て云ふ、されはこそ一を聞て二をさかす、古人今人の間に道有るへしと云はすや、古とて偏に宜しきにあらし、今とて偏にむしからし、宜しきに從ふへし、理を負くへからず、道に違ふへからず、道理

に負かざる事當時の風情とて惡からず、古きを温めて新きを知るの心にも近からんかも。

一當世と云ふことは今に限らず三十年前は今の昔なり、今の昔は三十年前の當世なり、今當世を嫌ふ人は、今の昔の風を好む人なり、若し當世を偏に嫌はし、三十年前の當世をも嫌うへし、三十年前にも昔あるへし、其昔にも又當世あるへし、然らば當世を捨て偏に昔をこのむ人、いつを昔と定むべきそや、好むへき道嫌ふへき道は、昔今に依るべからず、凡三十年には風俗少しは違ふ物とせばゆるなり。

一或人曰く、我人のために拔若することは自然にあるへし、與樂することは我手柄に及ひかたしといへり、予曰く、拔若こそ即ち與樂よ、苦のなきか樂なるを如何してさば仰せらるゝそ、其人曰く、拔若の外に丁重人を樂ましむることあらん歟、予曰く、それは佚遊佚樂とて墨賢の嫌うことなり、只苦のなきか樂と云へば、笑ふて興下き、又佛法に樂と云はれしは別なり、假令苦なりとも樂かあらはそれも苦なり、樂あつて苦なきことわたはす、苦樂ともになさことを、眞實の樂なるへけれ、寂滅爲樂と佛も説けり。

一當世の人を見るに、南北に奔走し東西に往來して、富家の門を敷へ、偏へに飯錢を求めらるゝたり、一二五の家人を養ふて我等興に扶けられ菓を使ふと思へり、菓を使ふに似たりと雖も、唯菓に

つらはるゝなり、五人の家人を養ふ者五人の苦を受け、十人を養ふものは十人の苦を受け、五人を養ふ時は十人の糧を得されは養はれず、これを求めんか爲に南北に奔走する、菓に使はるゝに似たり、幻閣梨傍にありて云く、師の言然り、されどもその家をばたし、其名空しからんは口惜と思ふ故に、名家に使はると思へり、予曰く、士は君に仕へて忠あれば禄是にあり、農は耕を勤む、勤むるときは則ち糧あり、工商各その職にその禄あり、各か家に各糧あれども、方の職を勤めずして、その糧をくらはす、人の能く勤めて富る家を敷へて陥ひ、他人の糧を受け食ふ、これを名家につかはるゝと云はんや、偏に名を耻しめ家を下すなり、頭陀の人信施を食ふは別に道あり、之も亦空しく信施をくらはふて道なくは愧也。

一風は陽なり、巽にぞくし、其類又五にして陽なり、然れども之に當るときは、則ち寒冷なり、夏之を招きて涼意をうる、これ何の義ぞ、風を痛むときは則ち必ず寒を惜み壯に熱す、寒を惜むこれ義に當る歟、壯に熱するこれ義にわたるか、また風に暖風あり寒風あり、これもまた風に寒暖の二性ある歟、答へて曰く、風は動生を身とするものなり、故に陽なり、火の勢なり、東南のすみより起る、問ふて云ふ、既に八風あり、甚たしどては東南に限る乎、風の性よく往々するものまたきたる、南風の後は、必ず北より回りて以て雨ふる、東西もまた以て同し、然れども亦陰陽あらざる所

なし、又その處にその風あり、則ち八風ありて往徠すと雖も、先つその本を指すときは、則ち位巽なるか故に東南の隅といふなり、又問ふ、風に當るときは則ち冷なり、陽の勢甚たしとして、既に冷なるや、答へて云く、風身にあたるときは則ち表の氣裏に藏る故に、表虚にして冷意をうる、氣を裏に藏る漸く蒸熱して發熱す、これを治むるに冷氣を下て外に發散せしむるときは則ち愈ゆ、氣本復する故なり、風、暖寒の二はなけれども、來る所の方に依るかゆへに暖寒あり、南北東西も亦同じ。

一盲人のり物を荷ふて津に入る、津北に在り、北に向ひて行く、南より多く人馬競ひきたる、盲人耳をうはたてて聞きてこれを辨ふ、行くにをいてその難なし、然るときは則ち耳を以て目の用を足す予此に於てこれを思ふ、盲人は耳をもつて目とし、聾人は目を以て耳とするものなり、もし六根の名ひとりして其の事を辨せば、盲人は何として向ふものを辨せん乎、盲人といへとも言を以てするときは則ち色を辨し、聾人といへとも筆を以てするときは則ち聲を辨す、何によつて此の如くなるや、心主ある故なり、六根ありと雖も心なければ何ぞ此の如くならん乎、故に心を失ふものは狂亂す、目明かにして見えざるか如し、耳聴して聞かざるか如きなり、一心は是身の主君なり、六根は是六臣なり、臣は君に奉するに外事を以てす、君は臣に勅するに内證を以てす、君を失ふときは

則ち臣々ならず、故に六根ありと雖も死人は物を辨へざるなり。

一桶を荷ふもの南に向ひ行く、兩人屢ばその先を辭す、一人の曰く、吾桶甚た輕し予先つ行くへし、此に於て此語をききて己に進む、兩人の心黔首ありと雖も、仁あり、義あり、禮あり、輕さを荷ふものまつ進むときは、則ち歩速にしてその從ふもの苦む、重を荷ふものまつ進むときは、則ちその量に應して遲速我にあり、故に輕さをになふ者、重をになふもの、勢を知る、仁此に在り、兩人屢辭す、禮此に在り、終に重を荷ふもの先に進む、義此にあり、土民すら猶此の如し、況や上の人に於てを乎。

一或人樂を問ふ、答へて云ふ、上品の樂は樂なきなり、苦もなく樂もなきを上とす、これ寂滅爲樂なり、其次は中を答ふ、一切の事中を以て樂とす、如何となれば寢るほど樂はなし、然れども朝より暮に至るまで起るなどいは、則ち苦なり、又寢てはかり居るを苦と思ふ時起るは樂なり、然るをまた終夜起きて居よと云は、又起るを以て苦とす、起臥ともに中を得るを樂とす、過くるときは則ち共に苦なり、甘草はあまくして人皆食ふ、甘草アリとも日夜食せよと云は、その苦きこと黃連の如し、久しく居るときは則ち立つて樂とす、立つこと久しきときは則ち又苦なり、その中を得て以て樂とす、飢えては食を願ひ、食をもつて樂とす、飽くときは則ち食を以て苦とす、中を得る

ときは則ち是眞の樂なり、物を見て目を悦はしめ、久しく見るときは則ち苦なり、中を得るときは則ち樂なり、萬事共にかくの如し、然るときは則ち中これ樂なり、その次の樂は足ることを知るなり、たるをしろものは寡きを以て多しとし、足るを知らざるものは多きを以て寡しとす、足ることを知らずして願ひあるものは一生苦み、足ることを知りてもとりなさものは貧を以て樂む、人皆貧をくるしむ、然るに貧をさへ樂むときは則ち何の苦あらん、則ち是を樂とする故に樂と爲る、故に足ることを知るは極樂の國なりと云へり、その次は小人の樂也、言ふに足らざる而已。

一名所舊跡を見ることが好む人は、目を樂ましめて脚を苦ましむ、願ひ食人は舌を樂ましめ心を苦ましむ之を求むるに心を勞せされは食足らず、衣は輕さを求め、居は易さをもとむ、人は身を樂ましめは心を苦む、心を苦めしめて輕さを衣、易さに居ることは難し、身を樂ましめたるものは耻に近く心を樂ましめたるものは耻に遠し。

一君子は樂みをもとめず、樂み窮る時は苦必ず來る、况やまた耻あるを乎、先づ樂みをもとめて、樂みの前に於て苦を積るときは、則ち樂みきたらず、樂みきたるときは、苦み樂中に伏し來りて、その樂みの窮るとき其苦則ち顯はる、樂をもとむるにその樂の前に於て苦をつむの義如何、例へば人料理をなして食するか如し、朝より之を營んで暮に至て之を食し、或は前日より營み前より日より營

んでるの樂半時に過ぎず、營む人は苦む、食する人は樂む、これ樂みの前に苦を積むにあらざる乎。

一高麗唐土の珍器器具、願ひ求めてこれを愛する人は尤も人の常なり、吾此に望みなし、吾人間に心なく、貴介公子と交はり、花の下月の前に、會席を設け茶香の遊ひによつて日を過さんと思ふ心なし、一間の茅屋に紙被を綴り、一領の綿衣を身に纏ひ、僧形を破らざるのしるしを表して、生を送り死を待つの外あらまじきと思へばなり、さながら又物の善惡知らぬほどの心にもあらねば、一旦は眼をうるをすことあれども繼て求め願ふ心なし、我一得のたのしみあり、願ひ求むる人は苦なり、今大人のために引出されて人間に在り、予か樂みにあらざるなり。

一兎に角に何事も遮はり覆はれぬものに決定せば、人は私曲の耻はあるまじきものなり、唯藏せし藏さるゝものと思ふ故に顯はれて耻を受く、能く藏されぬ物なればこそ、盜人は已に顯はるれば身を亡はすにさわりぬ、何程の才覺をいだして力め藏さんとすれども、古今盜人の顯はれるはなし況や亦其餘事をや、身を亡はし命を失ふこと盜程には人思ふへからず、然らば盜の外のこと又何そ人之を知らざらん乎、故に雲かゝる峯に獨り居るときも、君子は行跡を亂すことあるへからず、實に君子は獨りを慎むなり、我心を謂ふ、我行ひ亂るゝときは、則ち人未だ知らずと雖も、我心まつこれを知る、况や人の知るをや、心の形に顯はるゝ紅よりも甚たし。

一名附は諸道に好まざる所なり、然りと雖も實にあたるるときは則ち可なり、名は外より揚げる所なり、實は我に在り、名は我求めすと雖も、實我にあるときは則ち人これを揚げる、實に當りてあかるときは則ち可なり、虚名に拙し。

一書をよく讀む人の道義なきは、只下戸の酒と云ふ字をから文字を讀みもするか如し、酒といふ字は書けども酒徳に觸れざるなり、書は目に觸るゝこともなれども、道義のうまへある人は上戸されども酒と云ふ字知らざるか如し、酒の字知らぬとも酒徳にふれるなり。

一酒掃する人用捨なき故に、箒を以て茗荷草の五分一寸づゝ萌したるを悉く損ふ、之を悲しく思ひ、枯れたる竹の枝を折り來て之を立て、垣とし扶く、傍に童子在り今之を悲しむとも長したらんときは之を切り必ず食用とすへし、悲しむに足らずと云ふ、子曰く、仁心の草木に及ふと云ふことを知らずやと、これを教へけり、草木時を得て斷るときは則ち藥にあたるなり、漸く土を出て寸計りにしてしかも徒に之を害ふときは則ち愛なし又義なし、その後禮記を讀むに曾子曰く、樹木時を以て之を伐り、禽獸時を以て之を殺す、夫子の玉はく、一樹を斷ち一獸を殺す、その時を以てせされば、孝にあらざるなり、時に彼の童子を呼んで説いて再びこれを教ゆ、童子曰く、一樹を斷ち獸を殺す、何に依つてか孝不孝ありや、曰く、樹を斷ち獸を殺す皆時を以てす、もし其時を失ふときは則ち義に

負く汝見ざる乎、曾子曰く、身は父母の遺体なり、行ひは父母の遺行なり、敢て敬せざらん乎と云へり、汝か身汝行皆父母の遺体なり、遺行なれば汝か一切の言行義に負くときは、則ち父母を耻かむむ、これ不孝にあらずや、汝か耻は父母の耻なれば、孝すこれを思はざらんや、一切義にあたらざるの事皆不孝なり、只養を以て孝とるときは則ち犬馬もやしなふことあり。

一或人孝を手に問ふ、答へて曰く、孝外になし、別に以て孝を答へかたし、進退禮あり、禮に負くときは則ち孝にあらず起臥時あり、時を失ふときは則ち孝にあらず、飲食盥あり、盥お超ゆれば則ち孝にあらざる也、視聽言動一にして孝にあらざるなし、百事は百事と共に、萬事は萬事と共に、皆道にあたるときは則ち孝なり、道に負くときは則ち不孝なり、一切の行ひ皆父母の遺行なり、汝に依りて父母を耻かしむ、古、皇は孝を以て天下を治む、豈當然ならざらん乎、一切道に合ふ、皆これ孝なり、一切道に合はざる皆不孝なり、一事も孝の外なきなり、朝疑するも不孝なり、晝疑するも不孝なり、さの八夜話、久しきも不孝なり、高談高笑するも不孝なり、喧嘩口論みな不孝、病者の禁せざる是れ不孝、病なきもの強、亦不孝、罪なきを殺す不孝なり、功なくしてあくるも不孝なり、賦を厚ふする是れ不孝、博奕好世最も不孝、主に不忠もまた不孝、兄弟不和是れ不孝、進退義にむ

く皆不孝、人は唯養ふを以て孝と思ふなり、(孔子の玉はく、今の孝はこれよく養ふを謂ふ、犬馬にわかたん) いたるまでよく養ふことあり、敬せずんば何を以てか乎と云々)

一 蟹は甲も似せて穴をほり、人は心に似せて家を營ひ、されは家に大小あれば心に大小あり、蓋心は私にあらず天の心なり、假に身にやとせり、天心に大小あるへからず、大小は人の著する所にあり好悪邪正は氣質の性なり、性を疑むものは死して天に昇り、氣を疑むものは死して地に降りて必ず地の禍に罹る、佛法に流轉を恐る、如來一代の教法、祖師師代の用心、これを本とせり。

一 神罰冥罰ありと云ふ、凡下は教への如く之を信す、中人は智慧未だ至らず之を信せず、皆罰なきものぢやと思へり、至人はよく知れり、故に人に教ゆれども人之を信せず、下と上とは罰を信すること均しけれども、道理を知りて信すると、知らずして信するとのかはり也、智未だ至らずして信せざらんよりは、知らずして信する凡下は勝れり、至人に相似たり、中人は人の誹を受く、罪はなを惡の如し、言ふ心は前に慎まずして後惡身に昇る、これを罰と謂ふ、神の罰、佛の罰、君の罰、親の罰、兄弟の罰、知音の罰、民の罰、衆生の罰、一々義に負くときは則ちあたらすと云ふことなし皆人錯れり、蓋人の思ふ所の罰は天上に冥府冥官あり、人惡をなすときは則ち冥官これを見て罰を充つると、初思ひのちまた分別して中智發して何の冥官かあらん、人惡畢身に上り來るも亦自然と

謂ふ、誰あつて罰を加ふと云ふこと、これは初めに思ふも錯なり、後で罰へして思ふも錯なり、唯物の積む所なり、惡をつめは惡來り、善をつめは善來る、人の身の善惡禍福自然に成じ俄せんなりと思へり、積を以てきたること人これを知らざるなり、例へば家富める人二人あり、各一子あり、家富む故に一子を以て慈悲尋常にせず、莊飾を飽迄にし飲食を飽しめ百事足らざることなし、この一子勞をなすして衣、苦を知らずして食し、百事思ふことなし、或時親死し家衰へ財盡き孤となり後親あるときは心をわすれず、勞を爲さずして衣んと欲し、苦を知らずして食はんと欲す、百事思ふことなくして足らんことを要す、抱てあははす、人これを救ふことなく、自ら給するに力無し、故に乞ふて食し、乞ふて衣る、初めは人に羨まれ、後には却て人のために耻しめらる、又一人の富家の一子は、その父母の慈悲尋常ならず、莊飾飲食自甘たらずと云ふこと無し、その一子の心向ふ所別なり、父母善に於て慈愛すること深し、吾を行なくんばあるへからず、父母勞をして財を得、その財を以て父母吾を莊飾す、吾れ父母の勞を思はずんば天吾を罰せん、父母勞して以て吾を養ふ、吾これを飽食す、心を用ゆることなくんば天吾を罰せん、一日これを食ふの功を作さずんば、吾くらはすと云ふて力を親に欺す、あるとき親死す、その子よく家をほめ財をばらち、身を直くして親をてばすかしめす、此二子の間に於て罰と樂と、罰をことひらさるどわり、終日心をもぢひ、艱難

を経るものは艱難に逢ふ時艱難に堪ゆ、故に身を保つ、終日用心なく父母の慈愛に管せは、冥慮を知らず、艱難を経ざるものは無事に於て違ふことなく、艱難に逢ふとき艱難に堪へざるなり、只舌を罰するものは吾なり天に非ず、即ち之を名けて天と曰ふ、天とは理の當然を謂ふ、理のあたる所皆これを天と謂ふ、それ人義に負けは身に惡を生ず、これを罰と謂ふ、その義親に負けるときは則ち親の罰と曰ひ、その義君に負けるときは則ち君の罰と曰ひ、兄弟に於るときは則ち兄弟の罰と曰ひ、智音に於るときは則ち智音の罰と曰ふ、賦を厚くし民を苦しめ、其身佚遊佚樂のためにして後惡その身に上る、その義を民にそむく、これを民罰と謂ふ、勞をなさずして金銀を泥沙の如くするときは則ちその義金銀にそむく之を金銀の罰と謂ふ、その爵異なりと雖も、天理は一なり、人の罰する所は通るゝ所あり、理の罰する所は通るゝ所無し、天理怖れざるへけん乎、天理とは皆教なり、教盡るときは即ち亡ぶ、人三十年用心なく、樂をするときは則ち豫め樂の數を盡す、故に三十年を終りて樂なくして苦み多し、初め三十年心を用ひて艱苦を歷るときは則ち樂の數残りて三十年を終るに安し、初め三十年の苦は正に堪ゆへし、終り三十年の苦は堪へかたし、前に苦を以てし後に樂を以てするは最も可なり、前に樂を以てし、後に苦を以てするは不可なり、萬事皆數也。

一耻を以て耻とせされば身に苦なし、耻を知るものは身を苦し、富家の門に倚つて乞ふて以て食し、人によつて乞ふて以て衣、足を以て飢寒を充つ、只耻を知るに因て、四民の業によつて身を苦めて以て自ら給せんと欲するものなり、豈衣食のみならんや、萬般の事耻を知るを以て身を苦し、身を苦むるを以て人なり、耻を思はずして身を安んずることを謀るものは人にあらす、夫人とて身安きときは則ち耻あることを知らず、君子は身を苦めて以て父母を耻しめず、兄弟朋友を以て耻しめざるなり、君子は身を苦めて以て耻を避く、これを身を安んずるとす、小人は耻を榮ると雖ども、衣食足り、起臥吾に在るを之を身を安んずるとす、只これ身心を安んずると、形をやすんずるとの二なり、其形は一世に朽ち孽をのこすなし、其心は萬世に傳へ摸規を取る、故に明教に曰く、伯夷叔齊は古の餓夫なり、今斯人を以てこれに比して人皆喜ぶ、桀紂幽厲は古の人主なり、今それを以て之に比して人皆怒るなり、これ形に就かず只心に就くものなり。

一懶と懶の字同一、夫人少き時は高に懶くして、所作に荒むものなり、痛く責むへからず、草木なども懶さ縁はたゞとして、さはらは折るへき程に見ゆ、人の形も強からず十五の兒女の弱々として所作に忍ぶへきとも見へす、これ懶さときの体なり、懶と云ふ字の意あり、然りとて又なるをまゝにせは其人老ひて悔ひあるへし、漸々にして諫むる心を得て以て自ら進むへきやうに教ゆへきなり。

一人は薪盡きて火滅ゆるか如し、佛の説き給ふ程に欲しきも目の業、目なくなれば欲しき共に滅して
 なくなり、床しきもゆかしきと知らず、目既に滅すれば床しき心も共に滅するほどに、輪回と云
 ふこともないと思得るは恐しきそ、薪か盡くれれば火も共に滅するは勿論なり、其薪其火は消ゆるに
 相定まれり、然るを其薪盡る時、其火を別の薪に投すれば、其火又新しくなりて燃ることはなきも
 のに候や、薪は盡くれれば火は滅するものに定まれるを、已れ計りて薪に移して其火たゆる期なし、人
 も當然なり、當然にして滅すれば、殘と云ふことはなきを已れ計りて、念を物にうつして、念々
 断ゆる期なし、之を辨へずして唯滅して跡なしと思ふは誤なり、人毎に火は滅してなくなると思ふ
 は誤なり、其火は滅し其薪は盡くれども、火の性は滅せざるなり、只其薪其火、一分々々の火とあ
 らはれたる火の形は滅すれども、性は滅せずして天に歸して、天より物を生すれば、生するものに
 一々火徳具はりて、吾儘に火を取出すときは火の滅することは無く、六十餘州の内一火、なく、火
 と云ふものを悉く滅して末代火と云ふことは無きものならば、火滅するにきはまるへし、一天下の
 火を悉く滅したりとも、即刻火とたきつくへし、然らば火の滅する物にあらず、火の滅すると云ふ
 は實に滅亡すると云ふ義歟、曰く火は實に滅せず、問ふ、滅せずんは何ぞ火滅すと云へるぞ、曰
 く火の英氣滅す、之を火滅すと云ふ、火の性萬古滅せず、薪火を成し、火焰を生ず、此火焰は火性

より生ず、火焰滅すと雖も火性滅せず、故に石より火あり、木にも火あり、万物皆火性あらざるこ
 となし、天下の火一時に滅すと雖も、火性は滅せざる故に石を打ちて火をいたし、木を鑽めば火を
 生ず、これ其證據なり。

一龜毛侍者曰く、薪つくる時、火を別の薪にうつして、火滅することなし、又心は萬世に傳ふと、然
 らば先尼外道か言の如く、喩へば人の轉宅する如きや如何、答へて曰く、火薪に移すと云ふは、薪
 に黑白二品あり、何も身口意の淨と不淨によりて、不淨は黒業なれば黒薪を成就し、淨は白善業な
 れば白薪成る、業か即薪なれば薪か即火なる故に、業風に吹れて羅刹鬼國へも移り、兜率天上へも
 昇り、寂光の淨土へも移るあり、また心とは凡夫の思ふ、慮知念覺妄想分別の心を云にはあらず、火
 宅僧の謂ゆる、際もなき法身際もなき解脱の異稱にして、日月の光に超過せし光輪なれば、萬世は
 かるか劫盡世泯すれども、眞冥を照して有にあらざ、不可思議の眞實なるものか。

一龜毛十問ふ、孟軻人の性と犬牛の性と異也と謂ふ、然ば二性あるや、答ふ、二性なし、然らば物は
 その偏を得、人はその全を得るか、答ふ、否なり、然らば人と物と同じさか、答ふ不稜の體は同じ
 く隨縁の用は異なり、故に佛の玉はく、法身六道に流轉すと是なり。

一濕氣は暫時もをるへし、乾栗をもつて掌中に握るときは、則ち忽然として堅きと失ふて、これを

咬むに甚た軟かなり、初めより口に入る、ときは、則ち口中潤ひ多しと雖も堅軟かならず、掌中潤ひなしと雖も、生發の氣あるを以てなり、口中は粘唾ありと雖も生發の氣なき故なり、ものを以て蒸すと湯に漬けるとの異なり、蒸すものは早く氣通して軟かなり、漬けるものは直に湯に合ふと雖も軟かなること遅し、生發の氣あたらざる故なり。

一人皆我飢を知りて人の飢を知らず、故に人を憐むの心なし、我飢を知りては何う人を憐まざらん、放逸の人はたゞわれを知りて、人を知らず。

一大なる蜘蛛の檐にかゝりたるを地に落せば、足を收め石の如く成りて死を遁れんことを計る、彼か小智にて人を計らんとす、少しなりとも走り遁るればその程も命存すべし、彼か謀計は人よく知れり彼は思ふべし、人は知らじと、無智の人、有智の人を計ることも蜘蛛の謀計に同じ。

一また毛蟲の大なるもの地上に行く、之を犯すときは則ち憤然として奮発れり、此の如くなれども人之をことども思はず、小人の大人に向つて此の如きの風情をなすこと、毛蟲にことならず。

一番をさくに最初にもちやつと鼻へ入れたる時、之は何れの香じやよとさ、たるが、大方はわたるものなり、そこを感ふて又聞ひて見、いろ／＼にすればわたらぬものなり、それを如何となれば最初にもちやつと聞けば、才覺分別なし、これ我本心感する故に正直なり、後又取りてかき、再三さくとき

はこれ血氣分別なり、血氣に感はされむとしたりる物になるなり、最初にさしてそれがあたらずはわたらぬと思ふべきなり、酒茶を試るも同じことなり、最初一口飲むときならては知られぬものなり、再三味へは一向に知られぬものなり、詩句を吟味するも亦同じ、よくもなき句なれどもひたご何返も吟すれば、口になれて能きやうに覺るものなり、最初一返二返よむとき、好し悪し知らるものなり、又よく吟味すへきと思は、吟しすて、置き、一兩日も後に讀見れば又新しくなりて、初め再三讀んで好しと思ふ句の悪き所か知るものなり、其時も別にふしもなく覺へば、初めよきと思ふ所か避はぬと知るべし、文章を書出すときはよく聞へたと思ふものなり、はる／＼後に引出て讀んで見れば、すまぬ所かあるものなり、是を以て詩を知ること、重陰に至りて始めて功を見るべし云へること、此重陰は返をかさねるにてもあるべし、大方は吟し樂て置き、問をへたて、重て吟するの意なるべし。

一癡山なる人を初めて見たるときは、さて見苦きの人物やと思へども、慣れて毎日見れば後は見よきものあり、これ血氣誤られて此のこと、最初の一念は本心に感する故に其もの好し悪しをありの儘に知るなり、されは人の好悪はよく見ゆるものなり、我好悪を知らぬものなり、我所作は我身になれて知られぬものなり、又悪きと知り、狂げて悪とするは道の外なり。

一多欲の人は却て無欲なり、多欲の人多く財を得んと思ふて、中を廻つて多なる故に、集めたる財と一時に官に奪はれ、剩へ其身を亡す、則ち財を奪はるゝのみならず、一つある命を添へて失ふ、則ち多欲の人は無欲の人なり、小欲の人は其分に留つて得る所の財をよく保つて、其身を全ふして天命を終ふ、これ多財を得るなりと思へり、否なるや、或人曰く、然らば多く財をまつむるは富と云ふことは、總してあるまじきこと歟、天下の者皆貧人たるべきかと云ふ、われ云ふ、その中を得るときは則ち富も亦得たり、その儀も亦得たり、貧なるときは則ち貧も亦得たり、天下何を貧人たらんや、故に曰く、不義にして富み且つ貴きは我に在りて浮雲の如しと云へり、義にわたるときは則ち何ぞこれに悪あらん。

一何事もせんと思ふことをせんと思切りてするは本心なり、斯うせうかせまじきかと二途にわたるは血氣なり、二途にわたりて分別窮らざることをすれば必ずあし、是血氣に惑はさるゝなり、此事をせんと思はゞ一途にしたかよし、二途にわたる程ならはすべからず、初め一氣は皆本心なり、ふたつにわたるは血氣なり、本心ならはみなよし、血氣はあし。

一何事もせざるなく、せざれば任損ふぞ、をつる平生のこと、構へてはせざるをつるなく、構をばつんと飛べ危しと思へば、はまるぞ。

一財寶も骨を折つて手間を入れたるは遅く盡るなり、骨を折らす手間を入れずして得たる財は早く盡るぞ、色を塗りあくるに久しくして、返を重ねたるは遅く、疾く塗り返を重ねざるものは早く剝ぐるぞ。

一或時生の櫃の水を含みたるを、そと焼きてかみわらんとすると、ことごとくしくをひゆるは跳る、これ陰水内にありて、火之を攻むるなり、雷空に鳴るの心あり、陽火水雲につゝまる、陽火内より走り破りてその聲空に響きわたるなり、鳴る所は一所なれとも響き四方へとばる背くらりと鳴る也。

一我を人は可笑しと見るへし、餘義なきことなり、然れども其時に相應の二識と思へし、煎豆を食ふに大粒より食へば果まで入粒と喰ふと云へり、百粒あるときの大粒ある豆と、五十粒あるとき其内の大粒を、變はるへけれども、其内にて大粒なるを吉しとす、然れば古の知識はさう有るらん、此時にあたりては此時の内の知識をつとむべきこと歟、此時に在りて古の知識を思へども遇ふことならず、百粒なりしときの大粒なる豆を望みては、五十粒のときは其望み叶はず、されども悪知識の邪見に引きたらば、一言飛言と引くなるへし。

一的傳の付はころりと餓死ねと先師は教へ給ひしものを、的傳と云ふことは早く衣を改めたを云ふ

にあらず、師家の我家の的傳など、云はし是非に及りず、衣を早く改めた程に我が的傳ぢやなと思ふことは然らず、總ての傳とは其一家々々の區別にて昔的傳なり、紫野には虛堂南浦との傳する、東福には無準聖一の傳し、又南浦の下にても南浦宗峯との傳し、又漢州遠山には南浦宗翁との傳す然れば紫野派のもの南浦宗峯之を的傳とし、遠山派のものは南浦宗翁之を的傳とするなり、天下一人的傳と云ふことは人か許さるるなり、的傳傍出なと云ふことは仔細あることなり、むざと心得て衣をさきに改められたれば的傳と云ふ、笑ふべきなり。

一異相と云ふは、祖録行狀等にも好き方云へり、並々にかかりたる州形あるを云へり、異相なれば必ず其行もまた異なり、人にかばり抽んでたる處あるを異相と云へり、異産と云ふも同じ、人にも異に生れたるを云ふ、異人など云ふも世上並の人にてはなし、されば昔の聖賢の相を畫圖に遺したるも、一角ある相見えたり、如何にも面貌圓滿して變はる處もなきやうなるかあれども、それも何處ぞに、人に異なる所あるものぞ、異相と云ふを今の世にむざと心得るぞ、異相人杯とて嘲けるは笑しきことぞ、今の世に人の嘲ける異相の人と云ふも、如何様よく心を留めは好き所もあるへし、正直にして曲らず、然るを私曲を以て相待する故み、其人に向つて放言し、猶心に合すは跡を見せずそこを去る、然るを人異相人と云ふ、これも異相人に理つよし、但し一轍に相定まらざる所を、短

かき處と云ふへき歎、然るを一轍人など、は云ふへし、一轍は器道にも好まふるなり。

一大隱は市に隠れ、小隱は山に隠る、此語を口に覺へて山隱閑處の人を誹謗す、眞に笑ふへし、出家は樹下石上にあるか本なれば、市中床しく思ふとも山林に居るは本儀なり、山林に居ても市中忘れざるよりは、市中に居て市中に忘れたるはまじよとて市中に居るは道にあらず、況や又山は閑なるものに定まれり、市中は閑はしきにさたまれり、市中に居ても隱逸の心ある人、山林に居ても同じく隱逸の心ある人にしては、山林に入るは上なり、隱逸にして隱地にあるは相應なり、然るを市中を好み、一日も山居閑居に堪へざる人の癖として、閑居の人を云ひけして我非を掩はんとして、大隱の市、小隱の山の語を持來りて眞隱の人を誹謗す、まことに道理を知る人は早く聞くへし、大隱市にかくれ、小隱やまにかくるの語は之を説くと滋味あり、一往に心得かたし、只心は市を忘れずして、身にはかり山を求むる人の爲めに云へる語なり、身も心も市を忘れたらんには山に如くへからず、身心ともに閑なるは山なり、市は縦令心は閑なりとも聞く所喧しく、見る所鬧はしければ、身之にありて詮無きなり、智者は水を愛し仁者は山を愛すと云ふも、忙と閑との二つならずや。

一法の外なりとも能く手に熟したる好手のするは、物を損はずして其事なるものなれとも、法に違ふてすまじきことなり、なせにとならは好手のするまねをして、益十或は無分別なるもの、其手未熟

此してするは必ず事を損ふ程に、すまじきをばして見せぬかよし、ありやうの仕様なきにあらす、法の外は皆略なり、據なり、略は事の草なり、據は道の草なり、例へば小刀を以て疊の上に於て紙を断る、好手はすこしも疊を破らす、或は障子に於て、切れども、好手は障子を破らざるなり、野人の擲聖のことは好手の業なり。

一器は塵を持さるものなり、殊に重き物を盛りたる器のかせをとれば、塵必ず離れて興をさますものなり、假令無事なるも見て危し、賢人は危きを嫌ふなり。

一縁のある器をもつに、大母指を我手の方へつよく引けば、縁を引缺く、心ありて危し、器の内の方へ大母指を推掛くるやうに、力を入れて持つかよし、得意の人はこれ体のことはよく辨ゆるも雖も、童子若輩無骨のもの、ためにはよき教へなり。

一ある夜、三四千燈籠す、一人の云く、古老の人は道を以て甚た秘す、大道うれ然るや、一の小事と雖も、大道を傳ふるか如し、笑ふへし、或老人の云ふ、便桶に向つて小用を便するに旨あり、密にこれを傳ふへし、汝蓋小便のとき直に其桶の中心に便すへからず、其桶の中心に便すれば則ち便の聲ありて人の耳を汚す、便の臭ありて人の鼻を汚す、便を桶の唇に投ずれば則ち聲無く臭なしと云ふ、笑ふへきや、予か云く、古人の心深きこと知るへし、此一小事と雖も、此の如し、況やまた大

道にをいてをや、之を一小事といふて容易なるときは、則ち大道これに随つて以て容易なり、道容易なれば人に信なし、信なきときは則ち道立す、この一小事と雖も授くるときは、則ち人之を信して以て之を受く、大道と雖も世の話の如きは、則ち人信せずして之を受けず之を笑ふ、人はこれを傳へずと雖も此一小事定めて誤るへからざるなり、世の人多くは狼藉なり、此一小事と雖も習ふときは則ち得ることあるへし、と云ふ言未だ了らざるに人あり、戸を開き出で便桶に向ひて小用を便す、其聲瀑の如し、予曰く、老者の言の如く習ふて是好きか、又老者を笑へて此の如く狼藉なるが是好きかと、道に了りて笑ふ。

一橋をばわたれ、端をわたるなど云ふは面白き奇語なり、何事のふしなきことども、ふしありさうに云ひなせば、その言葉に興してよく口慣るによりて、はしどだに云へば此言葉を思ひ出し云ひ出して利あり、上のはしは橋なり、下のはしは端なり、橋を渡るに橋の中正をわたれと云へることな、橋と端とは唱へかはりぬれど、此にてまぎらかして同じ唱へに云ふてよし、鳥は食へ、とりは食ひそと、俗語に云へるも同じ、鳥の脊骨の下あはきて血あり、之をとりと名けるとなり、如何なる仔細そや、鳥とは云ふならん、この血毒にて人にたゝると云へり、これ毒を人に致へても人肉に留めず、鳥は食へとりは食ひずと綺語に云へば、この詞を興して人このことを思ひ出して利あり、覺

へかたきことを歌括にすれば、よく覺ゆるることし。

一小事を大事にせされは、必らず大事に大事をしいたすぞ、小事なれども仕損して能きにはあらぬぞも、小事なる故によし、うれよとてやみぬ、大事に至り仕損しては實の大事なり。

一夜途と行くに、善人さきに行きて殺害に逢ふ、悪人後に行き 遁る、何事ぞ、善人害に逢ひ、悪人幸ひを得る、天の加護と云ふことは、此にはあらざるか、予曰く、これ天道なり、善人ぞて引上げ悪人ぞて推下さは、天道にあらす、天道は悪人も不捨、善人は猶捨てず、善を取らば悪をすつるは天道にあらす、これ人間なり、然らば善を作して善ならず、悪をなして悪ならず、唯自然なり、恐らくは天と云ふもあるへからすと云ふ、予曰く、汝か言の如くならば、汝今日悪をなして見よ、悪積りて汝か身必ず亡ふべし、又予か言に隨つて善をなして見よ、善つんで必ず身立つへし、彼の夜途に先き、行くもの善人なるを、天これをして先立しめ禍難を興ふるにあらす、その人自ら行きて禍難に遇ふ、天の作す所にあらす、その人現今に悪人にあらすと雖も過去の業燒るることあり、此にをひて不意に人に先立ちて難に遇ふ、また一人の悪人後れて難を遁るゝも亦過去の業、心感することありて一旦難を遁るゝなり、これ又一生の悪にあらす、一生の善にあらし、近きときは則ち一生の裏に報を見、遠きときは則ち復生のとき報を見る、そのさきに行くこと不意なりと云へども前業あり

前業の感は不意にあらす、唯不意なりといへり。

一人を崇むるに様と云ふ、御所様、殿様、長老様など云ふ、此の様と云ふこと更に心得すと云ふ人あり、様と云ふは様子と云ふ義なり、その人の容、骨柄、様体など云ふ義なり、然らば人を崇むるの儀あたり難し、様と云ふて崇むるの儀は、例へば貴人は貴人の様なるかよし、貴人の賤しきやうなるはあり、御所は御所の様なるに依つて貴きなり、殿はどのゝ様あるを以て貴し、長老は長老の様なるに依つて貴きはとに、長老様など云へば貴き儀なり、その身の様々を遠へぬ處を以つて崇むる心なり、長老は長老の様に御座候よ、殿は殿の様に御座候よと云ふか如し、又長老の様にはないぞ、殿は殿の様にはないぞと云は、貴きにてはなし、殿か殿のやうにあらは貴いぞ、歌の權詞の様など云ふも同じ、歌にうたのさまなくは歌のよきにはあらし、詩に詩のさまなくは詩のよろしきにあらし。

一人皆聖賢の語を咬味は、すして、直に吞却する故に心聖賢の道を執ること無し、譬へば胡椒を好むかとし、之を咬味ふときは則ち其味ひを得るか故にこれを好む、もし一九を以て直に吞却するときは則ち其辛味を知らず、その辛味を知らざるもの甚とし、胡椒を好むの意あらん乎、聖賢の道も亦よ、咬味ふときは、則ち聖賢の道の善を知る故にこのも、一切の食味は、すして吞却するときは

則ち好むの意なかるへし、一切の道も亦此のときなり、柿は旨きものなれども咬味ひてころまた食ひたいと思ふ心はあらんか、丸呑みにしては又食ひたいと云ふ心はあるまいぞ、聖賢の語も同一聖賢の道を慕はざるも道理なり、また咬ずして呑んでも腹中にて消し、命を養ふものはあるへし、知らして食つても命を養ふものもあるべし、聖賢の語をよく味ひて知るは上なり、知ずして丸呑みにするも、呑ざるにまさる道理はあり、聖賢の道を咬み味はすして口に云ふも、終に道に入るの端となる理あり、工夫深き人にあらすは辨へかたし、佛氏よくこれを知る、譬へは初生の赤子の乳の味を食ひかことし、之は母の乳味ふとも辨へず、所乳味はなにものか乳味となりて、誰か我口へは入るゝと知らずとも、呑めは命を養ふて長となるか如し、長て後はその乳味をよく辨へるときありて、聖賢の書々讀むに、例へば一世に聖人の道に入らずと雖も、これを捨てるときは則ち必ず聖道に歸すること有るへし。

一今の世は神者も教者も、古人の言をつたへて人に示すことは即ち違はされども、偏に意味違ふ故に言者は古人の言にして、道即ち隔懸せり、恰も貝の脊を以て之に合するか如し、左貝右貝、違はずと雖も貝の口合はず、貝の口合はるときは物を容るゝことあたはず、諸家の師言と意味と合はるときは、身道に容るゝことあたはず。

玲瓏隨筆 卷之二

一松杉の實を今日うゑて、軒端に見んと思ふは、五年七年末遠くして待遠きなり、其間の養育實に稚子を育つるうことし、然れば今軒端に見る木を移植して、五年七年を今日に引寄て見ることは、大切なることなり、是を考へば今軒端に見る木を植ゑんには如何程精を盡してもあきたらぬことなるを、あらくも扱ひ根の土を落し枝を折り本を動かさずして、順て枯れぬれば、嗚呼枯れぬるよと云ひて引捨てぬるは物の考へなき心なり、我人此の如し、今植ゑる松杉の實は五七年の思ひを積ますは、軒端に見ることはならぬなり、五七年の思ひを積むとたに思はし、一本の樹に一日の勞を盡すほどならば大方つくへき歟、然らば一本を植ゑんには一日の勞を以てつくへき計謀ころ有らまはしけれ。

一問ふ、天道は萬古變なく、造化の生する所曾て以て易らず、古の松は今も松なり、竹は今も竹なり万物都て此の如し、聖人何としてか復生れざる、答へて云ふ、それ聖人氣の清明を裏くること純粹

にして生知安行なり、人の氣を慕くるその氣清明純粹あることも偏に古に在りて今なかるへからず
聖人只生れざるこそ何そや、或人曰く古エた希なり、予曰く、古には希れなれどもありつへし、今
亦希にも無きことはいかゞそや、天道はこれ古と變すへからず、此儀いかん、終に符ふることを得
ず、曰く縦令二程程明道程頤程頤出來るとも儒家に於てこれを明すへからず、それ道は別なり、佛氏に於て
解し易し、予曰く、人のためにこれを説くも、若し自得無ければ則ち人これを信せず。

一人嘗已々の得たる所一つあるものなり、その得る所をとりて之を用ふるときは、則ち人を捨てず、萬
の物を委しく見るに、小分にして大方あるものあり、蚊蚊の血を飲ふこと其者の小にして力最も大
なり、大方量の人身に口をあてし如何に吸ふとも血出でかたかるへし、然らば人力量ありと雖も血
を吸ふことは蚊の力をかる、物ごと其徳を以て用ゆるときは則ち廢らす、物々一徳なくんばあるへ
からず、辛き苦きとて人の嫌ふ所なれども、懇い辛きを以て能とし、實運は苦きを以て能とす、そ
の能を用ゆるときは則ち物奔らす、砥礪は人を傷ると雖も人を傷るを以て能とす、殺樂の破りかた
き病あるときは砥礪の方を備へて以て傷るときは、則ち病去る、されば毒を以て人を活かす事は其

獨の好手なり、明主は能く人を知る、蓋人を知るものは其能を取りて用ゆ、暗主は雖も明臣を用ひ
るときは則ち主の明なり、眉斧國を劈破ると雖も吳は敗られ、越には補けあり、越始め斧に觸れる
と雖も終に柯を把る、吳を破るものは范蠡か明なり、一斧人を破ると雖も我柯を把るときは、則
ち人を破る、人に柯を把られるときは則ち人にやふらる、破ることは斧にわれども、破ると破らる
るとは人の謀計にあり。

一我常に思ふ、われを乞食なりと憐に見給ふやうに身を持ちたしとすれども、兎角人間か残りて人に
まざる、事こそうらめしけれ、我本乞食の跡をつくるものなり、我本師釋迦は摩伽陀國の王たりしか
下りて乞食となり、我祖師達摩は香至國の王子なれども下りて乞食となれり、袈裟は衆生濟度の方
便に等く見ゆるもにくからず、少し見たすくる方もあり、元くさり色の布にて製するを本とせり、錦
襪の衣は能仁私云釋迦終に披し給はず、熱尊に遺し給ふ、飲光是を抱きて羅足山名の洞に入りぬ、沙門
の內衣美しくかざり、前後を見て出立たる顔の風情うらめし、偏に美婦の色を衒ふにことならず。
一至つて硬きものは尤も寒るなり、氷は堅きゆへに尤も寒るなり、雪これに次く、水又これに次く、石
硬ふして尤も寒る、金これに次く、木も至つて堅きは身に添へて尤も寒る、柔かなるほど暖かなり
さればこそ溫和と云へり、絹も生にして堅きは肌にひゆ、練り和らぐれば暖かなり、綿は至つて柔

かにして尤も温かなり、絹これに次く、人も容儀堅確なるは秋の如くにして冷し、容儀柔かなるは春の如くにして温和なり、寒温の二をならへ、誰か温につかざらん、人にして人に嫌はれんはうるさし、人に下ればれんは悦はしからずや、慕ふも嫌ふも權威を以て押さば、異儀あるへからず、權威の窮むときろの常の心を以て人これを見る、人豈盛なる時と終りの衰へるときを思はざらんや。

一 衣裳の表裏は公私なり、表より裏勝つときは、公を裏にして私を表とするか如し、表を十分にしてい裏は六七分なるか順あるへし、人の一生皆この心ならんか、寝るときは衣は華美にして、出仕に古く垢つける衣若たらは禮にあらし、表より裏の華美なるはこれに同じ、公を第一にして私を二三にかまふへし、貴く見へて心の賤下なるは表より裏の華美なる衣若たる人なり、如何となれば財寶多く持ちたる人に見へんの心あり、實に富貴なる人は富貴と見えす、實に才智ある人は才智あると見えす、才智を人に見せんは才智乏きなり、故に食に飽くものは食を忘れ、才に飽くものは才を忘る、孔子老子に見へて禮を問ふ、老子の曰く、吾聞良賈は深藏なり、君子の盛徳盛さか如く容貌足らざるか如しと云へり、良賈は財寶あれとも深く藏して貧屋の如きなり、君子の容貌徳内にかくれて足らざるか如くなる貌ありと云へり、或人曰く、孔子老子に禮を問ふなり、道とは問はず、子曰く禮これ道にあらすや、道に違ふの禮、孔子豈これを行はん乎。

一 只學んで知りたると自得とは雪と墨のかはりあり、故に君子深く入るに道を以てす、その自得を得んと欲するなりと云へり、或武士の家人下部二三人聚りて云はく、いさ和睦原ひもじひか一睡せんとて皆寢にけり、佛弟子の爲めに法度を定められたるを律と云ふ、律に云へり、食後晝時分に一睡せよとなり、僧は一粥一飯なり、一睡するは胸滿ちてひもしさを忘れせんかためなり、我と身に覺へて知りたるとは、佛も祖師も心相合ふものなり、此下部とも寢て胸のふくれひもしさを忘るゝことをよく自得せり、水のつめたいと云ふことを習ふて知ると云ふことはなきものろ、口へ入ると自得するそ、湯のあついなご云ふは如何やうなるものと習ふものはないそ、口に入ると即ち自ら知るそ、諸道を知ること水の冷暖、食の飢飽の如くに自得すへし。

一 我終に寂しきことを知らず、問ひ來る人の歸ればあら閑かなり面白やと思ひ、日暮れば今は早問ふ人もあらし、我身に成りたりあら閑かやと思ふ、雨も月も閑かなれば、我雨我月よと思はるゝなり然りとて此閑を樂んてかく閑にするにはあらず、少し心による所ありてかく閑居せり、若し閑を樂んて山居を好まば世人の富貴を好むに同じ、餅の辛みを食ひぬあり、甘草の甘さを好むぬあり、辛さと甘さと其身にあり、樂む所は同じ、富貴閑熱と閑居寂寥とは變はれど、樂む所は同じ、然

れは道を捨て樂みを取るは佚樂の人に同しかるへし、富貴を好んで人に蹈ひ、佛法を賣りて渡世の營みをし、佛祖の道を泥土に墜さんよりはと思ひて、樹下石上の栖居せん人は樂みを求め山に入るにはあらし。

一今の世に順はんとすれば道に背く、道に背くまじとすれば世に順はず、只跡を藏さんには如何なるなり。

一奉公の人の心掛にも品あり、人退けは退き、人進めは進む、此等の入立身すへからず、人退くにも退かず、人進めは我いよくすむ、此人立身すへし、人進めは共に進む、人退けはともに退く、功少し、人進まば我いよく心を捨てず、人の退くときを待ちて進む功多し、斷る處を心にかくる人能き奉公の志なり、蹴鞠の人のつめを陸に心掛ると見へたり。

一美言惡言と云ふこともなきものなり、又思へば美言惡言と云ふこともあるものなりと云へば人如何と問ふ、予曰く、時に遇ふ人の言ふことは、惡言なれどもこれを美とし、ときに遇はざる人の言ふことをけ、美言をも惡とす、然らば則ち美言惡言はない、人に就くと見へたり、時に遇ふと遇はざるは、富貴と貧賤となり、されば人となりて物云ふときを待つへし、時至りて云へば人これを用ひ、時至らずして云ふことは人これを用ひず、とき至らずして言ふときは則ち孔孟の語と齊くとも

人これを用ひず、人非人の言或は五七歳の童の言、貧窮孤獨の言なりとも、美言あらは聞きて以て身に就けてるの得あり、貴介公子の言なりとも、巖岫惡言とは心に捨て身が省みるときは則ち身に得あり、三人行くとときは則ち皆我師なり、匹夫匹婦の言をも捨てされば好き語必ず我に在るものなり。

一鳥鷹の卵毀はすして後風風集る、誹謗の罪誅せずして後良言進むと云ふこと異なるかな、燕鳥の卵を育て何にせよそなれども、君子は物を捨てず毀たぬかよい、惡を棄てされば善に至るものと、燕鳥の卵さへすてされば風風か集るなり、人それ我を誹る、其誹るを罪すへからず、誹謗の罪を誅せされば良言を聴くぞ、ものゝ云ひ損ひを尤ひれば、人言を慎んで言はざるものなり、君子は雜人にむさとしたること言はせてうつけたる顔して聞くもよい、雜人なれども自得の心より出る理言はあるものなり、善言は聞きてさかす、美言は聞きてこれを記すときは則ち損無くして得あるなり。

一君子は人を誹ること、我臣下として主君を陰に誹罵するをば聞くとも、さかす顔して之を誅すへからず、誅すれば損あり、誅せされば得あり、これを誅すれば只悔さ奴め、我を誹謗するよと思ふ憐愍を達して快しと思ふばかりなり、その誹る人を失へば一人の損なり、人言を慎んで言はされば則ち良言進まず、人を誅して憤を達すれば、その憤じふ、之を忍びて憤を弁れば、同じくこれ

その憤亡ふ、之を誅するると之を忍ぶとは別なれども、憤の亡ふることは之に同一、然れば人を失して良言進まざるの損と、人を失はすして良言進むの得は、誅と忍とに在り、君子これを忍へ。

一沙門の言行正しきときは、則ち權威とても恐れ無し、私を以て沙門に傷くるときは、則ち我に耻無し、その耻は權に在り、その罪も權にあり、死するは人の常なり恐るゝに足らず、横難昔よりなきに非ず。

一心に城郭を搆ふへし、心の城郭は人破りかたし、石をつみ池を堀り水を貯へ、専ら之を以て敵を防かんと欲す、敵も亦謀計なきにあらす、石を崩し地を割き水を落すときは則ち城郭は平野となる也恩恵を施し國土を撫育するときは則ち誰ありか吾に敵となさん、是心の城郭なり。

一敵を怖るへからず、身方を怖るへし、初めより敵なし、身方を敵とする、敵に恩恵を施せば身方なり、身方恨を含めば即ち敵なり、思少く恨多きときは、則ち何の所にか身方あらん、天下敵なり。一性は滅するもの乎、滅せざるもの乎、答て曰く、滅せざるものなり、曰く、滅せざるものならはなせに性善とは云ふたそ、譬へば人參は人を生ず最も善なり、用ゆると大に洵るときは則ち病を生ず、これ用ゆる人の惡きなり、人參のあしきにあらず、磁石は人を殺すもの也、然れども用ゆへき時に中て用ゆれば則ち病を愈す、これその性も随つて用ゆるときは則ち人を生ずなり、物性あり、性は善なり

り、孟子曰く、性は善也と云ふもこれなり、善は生滅の物ぢや、なせになれば善は惡に對するものなり、善滅して惡となり、惡滅して善となる、善滅すれば默し、默滅すれば暗なり、明滅すれば暗なり、暗滅すれば明なり、塞滅すれば空なり、空滅すれば塞なり、何れも互に生滅す、人は元性善にして、善を作すに今日より變して惡を作すときは、則ち善滅して惡なり、人元惡を作す、今日より變して善を作すときは、則ち惡變して善となる、日暮れば明滅して暗と成る、夜明けぬれば暗滅して明となる、然るときは則ち善は生滅の物なり、性は生滅無し、生滅なき故に性は善と云ふべからず、孟子性善の善は、これ善惡對の善にあらず、これを無對の善と謂ふ、善惡出る所を云ふなり、善惡の休なり、性は善なく惡なきものなり、善なく惡なく強ひて崇尊して之を善と云ふ、もし人を愛す之を善と謂ひ、之を性と謂はば、性はこれ人を愛せず、若し愛せば必ず信じてことあらんれば愛あつて憎むこと無きとあたはず、性には愛憎なし、愛憎はこれ外の情なり内にあらず、例へば水の如く、花に洒くときは榮え、また惡く洒くときは則ち根を穿ち花枯る、然るときは則ち之を枯すも水なり、之を榮へさすも亦水なり、然りと雖も榮と枯とは水を洒く人の手に在り、水にあらず、水はこれ性なり、榮枯の善惡は洒く人の手なり、何ぞ手を以て水のため性善なりと云ふや、人の手に善惡あれとも水には善もなく惡もなし、可もなく不可もなき處を無ひて名けて善と云ふ、此

善は本然の善にして無對の善なり、善惡の機に落ちざるものなり、善とすることなく不善とすることなし、不善を離れたる物なり、只恐らくは諸人これを説きてこれを知らざらんことを也。

一儒云く、虚にして虚、空にして妙、これ心を説くの論なり、問ふ、虚にして虚、空にして妙とはこれ何のことぞ、答ふ、即ち心なり、問ふ、心とは名なり、名を呼んで實と爲すへからず、虚にして虚、空にして妙、その實此身に在いて何の處を指して云ふ、それ人の心間斷無し、心々聲色に轉するものなり、聲色に轉せば聲色は心なり、本心はこれなんぞ、各た、その名を云ひ、その徳を説きてその實を知らず、只胡升生姜の味ひ、その能毒よく書を以て知ると雖も、終に胡升生姜目に見口かことし、本草幾品皆本草の書を讀みてこれを知ると雖も、未たこゝに渡らぬ藥をば人未たこれを見ず、縱令この地に在りて朝夕目に觸る、草の實、木の葉と云ふとも、これよと證明せんは心を説くことを知らず、人皆此のこゝく心性をどく、心性知れたやうに人は思ふなり、こゝてはなほ。

一性これを説くに空を以てす、空はこれ性にあらす、性はこれ空なり、空は性にあらす、空は性を説くの言なり、言はこれ性にあらす、六祖の云ふ、口に終日空を説して性を見されば食を説して飽かざるかことし。

一それ善は古の善人君子の言行たり、古人をして存せしめて世に今見ること能はず、故に書に寫して

古人の言行を見せしめて以て今人をして、古人の如くならしめんと欲するなり、今の學者を見るときは則ち總て然らず、世に學者多し總て古人の言行をまなはず、只文字を記誦して以て渡世の爲みとせる而已、儒者は儒書を市る、孔子は羞を包む、佛者は佛書を市り、墨墨は耻を忍ぶ、今道士は種を敗る、老子坐を免れたり、神道は神書をかさり、歌道は歌書を市る、道世俗に浴て偏に工商の業の如し、孔子豫めの玉へり、古の學者は已かたりに、今の學者は人のためにす、實にこは道は此のこゝくならず、蓋身を直くし、心を清くし、仁に従り、義に遊び、人心を克めて道の心に復せんとするなり、此の如きときは則ち父母を耻かしめず、身安くして祿亦備り、名もまた高し、孔子又の玉はく君子は道を謀りて食を謀らず、耕すや穀其中に在り、學ふときは穀其中に在り、古語に云く、紀誦の學は人の師たるに足らず、今の學者きたなし、食を謀らすとも只身を直し心を清くして、道に叶は、食も自然に備はるへし、道を賣りて食はんと思ふ故に耻あり、却て穀あり其物に居てその物を食む、更に耻にあらす、法に居て法財を食し、學に居て祿を食す、何の耻かあらん、食をばかりて食ふもの耻あり、謀らすして食ふもの耻無し、琴に栖む虫は琴を食む、琴に栖む虫は琴を食む、其物に生すれば其物を食む、食まんと期しては生せず、人も此の如し、此儒に居ては儒にある財を食し、釋に居ては釋にある財を食す、更に耻なし、食のために謀るはきたなし、傍に人あ

り利口に云ふ、學ぶや祿その中に在りと孔子の仰せられたはどに、學問して禄を食さんと云へり、されはこれをことの如き人ありて、此章を錯るべきとて、孔子己に末の句に君子道を憂へて貧を憂えずと云ひとめられたり、況や又道を謀りて食をばからずと云ひ出せり、とこと何そ食をばかりて以て孔を錯ざるぞと云へば、されはこそ我君子ならねばと云ふ、笑ひき。

一薪は下賤の手に拾ふものなり、道は君子の學に有るものなり、然れば貴賤各別にしてそのものも亦別なり、薪は卑うして道は貴し、然れども其賣るに至りて我は薪を賣らん、如何そなれば賣るものはこれ薪なり、道にあらざるなり、故に我は其賣物をうる、其賣らざるものを賣らず、その賣るものをうるは淨し、その賣らざる物をうるは穢る、更に君子買ふときは則ち道と雖も我賣らん、只君子は買はずして買ふときは則ち我賣らずして賣らん、孔子もまたの玉はく、沽らんぬ沽らんや。

一短才とはよく言へり、一章二章三篇四篇積んで卷とし重ねて部とす、是人の才也、佛は五千卷に説けども理盡さず、棟に尤牛に汗さすれども理つくるときなし、理明なれば言伸ぶ、理暗ければ言屈す、今の世誰か一篇の辭を著はす、古文いさ學ひす、古風長篇の時下りて八句にて、時下りて絶句、絶句往々に題しかたく、日本様の聯句とて五言一句を製す、才の短さにあらずや、本邦にも古の述作多し、女の才にたも伊勢物語、式部か双紙、さま／＼和言より雖も、貫之か古今の序はま

つ山谷か序にその格同しと云へり、和漢ともに遠人の才覺はこれ同し、今の世には百紙に足らざる物語一帖も書き出すべき才は多くあるべからず、代々の集の假名序など見るにも、今の世にはかゝるべきとも覺えず、假初の歌の詞書なども、のびらかに幽雅なることは希なり、萬の理胸になければ言に出ぬものと見たり、双紙の筆取ることなく、長歌短歌の云述べたること書出すことあり、皆文短かになりて歌道者ぞ云へば三十一字にきわまり、剩一首の歌を分ちて二人して之を作り、述べてこれを翫ふ、真に才短くなれり、今運歌に長せる人は歌は讀ます、これ長き物は短き用を助くれども、短きものは長き用をなさぬしなり、實に尺は寸の用になれども寸は尺の用をなさず、歌の六義もと詩より起れり、詩は志のゆく所各その志を述べて、物に感して心の動くなり、されは三十一字を連ねて人のよむのみ歌にあらず、花に啼く鶯水に住む蛙の聲も皆歌なりとは、志を述べ心の動く所を云へるにや、末の代には法に溺れ、法式に縛られ、皆志を失ひ、料略して以て道とするものなり、吁。

一木規を作りて鬻ぐものは心曲れり、木酌を作りて賣るものは又心直きなり、草鞋縫りて自ら給するものにも心の淨らかなるものあり、賤むべからず、詩歌管絃の坐に列る客も心穢れたるあり。一千京に赴き淀の堤のこなたに乗物据へ人力休息す、そこの小家豆腐を業とす、彼か人と語るを樂物

の内にて聞く、彼か言に云く、何事も先世の因果と候ものを、身の悲き時は人のどがのやうに皆申す、我こそ知らぬ、皆我爲し置くことか身に來るにて候ものと云ふを聞きて、衆物の内にて獨り感一ぬ、今の世に正しき沙門たるもの因果を知らず、古には因果撥無の僧としてしうりぬることなり因果を撥無し、眞風地に墜ちんと大燈國師も仰せられし、古は貴僧高僧多くまゝく、處々にて衆生に因果の理を教へけるにや、耳にふれて末世まで賤の男賤の女に至るまで、因果とは如何なる教と云ふことは正しく知らざれども、教の如く信じてかく云ふは古の高僧の力なり、今教化すべき僧として因果を知らず、如何そ人に教ゆへけんや、因果と云ふは因は過去にあり、果は現在にあり今此現在に善惡の果あり、或は五雲天上に生し、眼には花鳥風月、耳には糸竹管雅を聞き、鼻には衆香をきき、舌に衆味を調して身に綾羅錦繡を纏ひ、意高事につきて思ふ儘にして下界の土をふます、翅なくして鳥道を行き、六根の樂を受け、或は大臣官人高家の氏族に生れ權威成なり、ろの外貴介公子富家に生れ、處を得ていみじき振舞をす、又貧窮孤獨として朝夕を營みかたく、飢に臨みて則ち人のものを押取り、その罪によつて禁獄せられ、我と我身を傷り、あらぬ惡事をす、その罪無量なり、かゝる善惡は皆過去の因により、今現在に其果を得るなり、因なくして果を見ると云ふことなし、今日の上にても因なふして果あると云ふことはなし、果あるは皆先の因によるなり、風

寒にあたり喜怒により、寒熱往來頭痛背痛の病、氣虛耗散の病あるは風寒喜怒を病む因と云ふ、頭痛背痛等これを病果と云ふ、病因無くして病と云ふことあるへからず、一切今日の態、万端皆因により果を顯はすことなり、春種を轉くは因なり、秋の實るは果なり、菓なり、今日の我人の善惡は皆過去の因によることなり、若し信せずは佛經祖錄を見よ。

一 駄馬を乗りて道ゆく人、油断して落ちなは重くは當座にも死すへし、足を折り手を折りて不具にもなるへし、或は五年三年後まで騒むこと世に多し、慮りなきときは則ち憂ありとはかゝることなり朝に宿を出て午時に下りまた乗り、夕に宿に着き下るゝなれば半日つゝの氣遣ひなり、半日の間を氣遣ひなく樂まんとて當座に死し若し不具にもなり、五年三年の苦みをせんは却て損なり、これを思はし乗りてより下るゝ迄は馬の外に心をやるへからず、敬の一字にもあたるへし、主一無適を思ふへし。

一 毒物を食し病を引出すも口惜し、味に耽り病引出す人數多あり、愚痴の甚だしきにあらざれば狂なり、それ飲食は色身の枯衰をうるはし、養ひ世に長生へて己々道にすゝみ、立身行道して素望を遂げんための藥なれば、過不及なく程よく飲食してこそ藥なれ、過ぐれば毒となりて遂に色身を害す是等のことよく心得ある國手にも、飲食より病因を生じ、遂に天死して不忠不孝の人となるあり、人

々よく嗜むべきとなり。

一士は忠心をつくと恩祿を得て家富めるはよし、空しく義なふして富めるは耻なり。

一財寶に富める人は不仁の人なり、蓋仁は博愛するの理なり、この理の字は義理道理にあらず本を云ふ、仁は本なり、博愛は端なり、己に博愛と云ふときは愛に外なし、粟あるときは則ち近くは鄰里郷黨に與ふ、廣く世を見るに救ふへき貧兒多し、財餘すへからず、若し誤ありと謂は、施さるるなり、施さずして家富むをはこれを仁と謂はす、陽虎曰く、富を爲せば仁ならず、仁をすれば富ますと云へり。

一天下を知るほどの大なる富はなし、然れども天下を知る富は天下の富を以て富とす、己れ財寶をつんで富とせず、己れ自ら財寶をつんで富むは小人の富なり、小人の富は不義なり、浮へる雲のごとし、無欲は人の褒むる所なり、有欲は人の惡む所なり、然れども道あらは可なり、道なくんは無欲も奇特ならず、七寶とて佛も譽め玉ふなり、犬馬は七寶を踏んで石瓦の如くす、然りとて有欲に似たれども佛を卑しとせず、無欲に似たれども犬馬を尊しとせず、有欲無欲ともに義を存すへし、無欲にして義あるときは則ち彌好し、實を實と知り、施すへきにわたつて之を施し、捨つへきにわたつて之を捨て、これを取るに當て取る、故に君子は財を愛す、これを取るに道ありと云々、我に人

物を賜はるに我深くこれを傷む、給はるものは多くこれ名聞の財なり、我に相應の徳あり、徳によるときは則ち可なり、名聞の財は徳を損ふ、我に相應の徳ありとは我沙門として明か先師の道を傳ふ、一則の因縁を擧げて利生の道を立つ、我門に入らん人心地の明ならざることを歎き、一則の因縁を參得し、過現未を明らかに生る、所を知り、此度無爲に入らんことを善ひ、現世の快樂を思はずして偏に寂靜を樂む、これ一則參得の得なり、此恩を知る者は佛を貴ひ祖師を重んず、此宗に志深きは、我に財を呈せすとも佛祖の報恩を知る人なり、これ我喜ふ所なり、財は我益なし、又志誠ならば、一把の野菜なりとも我爲めに財を呈すと思は、我金玉よりも重くせん、志真ならざるときは則ち金玉と雖も一毛の如し、金玉我を以て用なし、食は朝に一粥暮に一粥にて足ることを知る、衣は紙の被ま綿衣なり、住處はその居一疊に過ぎず、衣食住の三つに煩ひ無ければ、金銀更に用なし金銀自然にあらず、堂塔營むへく貧窮患むへし、強わて求めて之をするに足らず。

一道は説く人はあれども之を知る人は鮮し、之を知る人はこれあり、これを行ふ人は鮮し、説くことを得すとも之を知るは説に勝れり、之を知ることを得されども自ら之を行ふは之を知るに勝れり、説は之を知らんかため、知るは之を行ふかためなれば、之を説きて知らざらんは説かざるか如し、之を知りて行はざるは知らざるかとし、或人の曰く、説は人のために好し、之を知ると之を行ふとは

已かためなり、予か曰く、これを説く人、之を説きて知らざれば、これを聞く人、聞きて知らず、之を知る人、之を知りて行はざれば、人も亦之を知りて行はず、説くも聞くも二つとも利なし、或人又曰く、縦令説きて知らず知りて行はざるも、説かす知らざるには勝らん乎、此言人を弄てす尤も可なり、又此に一儀あり、之を説きて知らず之を知りて行はざるは、之を説くと之を知るとの咎及ひ行はざるの咎あり、説かす知らず行はざる人は知らざるに依りて説す、説かざるに依りて知らず知らざるに依りて行はず、是唯咎無し、一切の事知らずして爲ざる者は、其人のために其事を知らざるの咎あれとも、之を言ざる咎無し、又曰くこれを説きて之を知らず、之を知りて行はざる心底の人の説を聞き、よく道を得て之を知り、之を知りて之を行ふ者これあるときは、則ちその身、人を得ること無しと雖も補けわらん者乎、氷は水より出て水よりも寒く、青は藍より出て藍よりも青しと云へり、之を説きて知らずと雖も、必ず之を聞きて之を知るものあらん乎。

一南都の宗二は儒者なり、林和靖か後ありと云々、宗二か曰く、貧には成りかたきものなり、貧になる人は奇特なりと云ふ、此詞はまた奇特なり、されは古人有道の人は貧しき聞へ多し、范蠡か五湖に入り富めるはさずなりと書さしことあり、欲ある人は多く無欲の人は解し、貧になることは無欲より出る程に貧になるは奇特なり、又色を好み快遊を事として、親の譲りし財を守らず貧になるも

のあり、かく有らんよりは奢らすして富むはよしとも云はんか。

一世の華美になるほど、人の心の比興さぞ彌まさりぬる、外の飾清ければ内汚る、外淨く内穢るときは斯ることにや、内淨く外汚るといへるは、内心清淨の人はさまで外を飾らんと思ふ心はなり、今の世には其分際より万人花飾の容に財足らず、財足らざるゆへに富める士の門を窺ふ、何そ家の豊儉に従ひ心を清くせざるそや。

一老人に杖をゆるさるゝことは三國共にあると見えたり、禮記内則十二に云ふ、五十は家に杖つき、六十は郷に杖つき、七十は國に杖つき、八十は朝に杖つき、九十には天子これに問ふことわらんと欲するときは、則ち其室に就き珍を以て従ふと云々、人五十からはや老衰するほどに杖をゆるさる、九十になれば天子の問はせられたきことかあれば、其老者の家に行きて問ひ給ふとなり、日本にても賀のどき杖を賜ふどか。

一禪家に主丈を取るこれ杖なり、靈山路檢し佛許して老者につかするなり、律に云ふ、佛舎杖を懸すと云々、又云々、主丈をゆるすに二つの因縁あり、一には老瘦力無きか爲り、二つには病苦嬰身のためと云々、杖つけとまゝには佛のゆるし賜ること、又天子のゆるしたまはること、また賀のことまた刈向と云ふものに藜杖を異人かやりたそ、これより夜は燈の光り出て、此燈にて書をよくみたる

故事もあつたり、杖に燈、又燈に杖もつくへき乎、故に鳩など付くへき歟、鳩の杖と云ふことあり
 老人は咽狭くなりて食つまるなり、鳩は咽の穴廣きものなれば、杖の頭を鳩を作りてつけるなり、藤
 ちどり杖にするなり、主丈を鳥藤と云ふ、鳥はくちどり云ふ心なり、主丈は黒きものなり、連歌の
 付合を思ひ出てなり。

一 靈鷲山と云ふは、此山の形勢の頭に似たる故に、鷲の峯とも又鷲の山とも云へり、鷲の峯ともあり
 佛の居給ふところなり、鶴林樹下にて、佛は入滅ありたるなり、鶴林と云ふは所の名なり、いにし
 への鶴の林の春はあれと世にかり山の秋そかな一と、龜山院崩御のとき讀みたる歌なり、遺作者
 を忘る、佛さへ鶴林の入滅はあるものぞと思へとも、龜山の秋は悲しきなり、かように歌にも對
 した歌があるなり、是や此行くも歸るも別れてはと云ふに、知るも知らぬも逢坂の關と對した歌な
 り、連歌にも聯句付と云ふことありと聞ゆ、桃園の桃花こそ盛なれと云ふ句に、梅津のひりり今や
 咲くらんと付たるあり。

一 庭の櫻に雀二つとまると、上なる雀しやくしやくと啼きぬれば、下なる雀ちやくと云ふて飛退るぬ、そ
 の跡へ上なる雀をり居て脚を取りて食ふ、上よりしやくしやくと啼きかるとて、下なる雀の痛みに
 も成るへきと覺へされども、彼其旨を得て退るぬ、心を付けてみればかれ風情にも道あることと知

れり、智者の教化に隨ふものは智者と心の通ずる故なり、その機にあたらざるものを強めてせむ
 とも心に通せず、道は彼同じ心ありかたきものと見ゆる、佛法の教化もその機よしたること詮な
 るへし、雀は雀の心を會するか故に彼其心に隨ふ、犬は犬の心を會する故に彼其の心に隨ふ、其道
 に入らざる者を我心にあはせてせむるは拙し。

一 我身に敬されんと思はし、先づ佛神を敬ふへし、佛神は人の上にあるものなり、我上を敬へば下
 また我を敬ふ、我上を敬せずんば何として下我を敬せんや、君と臣と哲人たれども上に在るを以て
 敬ふときは、則ち下にあるもの又我を敬ふ、我上を敬せずして誰か我を敬せん乎。

一 天命は一盞の燈油の如し、雖も見て雖もこれを知らず、人の身は器なり、油を受ける盞の如し、油
 盡れば火滅す、油は天命のことし、天命盡くるときは人死す。

一念の物を止めること古來此の如し、南都に此頃人あり、罪に達して鏡會せしこと已に三年に及ぶ、漸
 くして罪をのかれぬ、その妻獄の門へ行きて今日罪のかれぬ、後に獄の門開かるへし満足せよと云
 ふ、夫此言を聞きて吁と云ふて即死す、女残念に思ひ泣けどもかへらず、是非一度罪を免れんと思
 ふ念此男を三年止めけるなり、罪まぬかれぬと聞きて念弱くなりて其儘死す、生死の大事こと、在
 り、灰袋の小兒を留める事今にこれを見る。

一 小惡をなして天理を惑へし、その一小惡身を亡すことあるまじと思ふは誤なり、勿論其一小惡は即日忽ちに身を亡すことばなけれども、その心萬事に涉る故、小を積んで大となる、時至るときは則ち必ず身を亡す、筑波山の峯の雪落添ひてみな川の名に立ち、吉野の峰の木々の雪落添ひて竹田の川淀には舟とひる例もあり、雲より落ちる瀧波も岩に傳ひ上りて水上を見れば縋の谷川なり、谷川を上りて又其水上を尋ねれば、爰の岩の根、彼處の苔の舞集りて谷川となり、谷川自ら崖より落ちて瀧となる、爰を以て人恐るへし、一小惡と云ふとも恐れすして之を作るときは、則ち積むところ必ず身を亡すこと必然たるへし。

一 熱出家の偽り多く眞善さを視るに其本三つなり、一に衣、二に食、三に住なり、衣は輕さを着温かにして外人の照さんことを思ひ、食は味ひを厚ふして美食足りて飽かんことを思ひ、住所は廣く安からんことを求む、すへて此の三つに依りて偽り多くして世に蹈ふは何事そや、衣は寒を禦くを以て理とす、食は飽充るを以て理とす、住は一身を容るを以て理とす、衣輕くさはやかなるを求め、食は旨く厚きものをもとめ、住所は廣く安からんことを求むるか故に、皆其言行ともに偽り多くして實偽し、食は命を繼ぐを以て理とし、衣は寒を防ぐを以て理とし、住所は一身を容るを以て理とす、何を輕さを求め、厚さを求め、安さを求めん乎。

一人の口に宜しきものは我口にも宜し、人の口に宜からざるものは我口にも宜からず、獨り美食厚味を惡み、蔬食淡味を好むにあらす、唯これ我心の恣にする恣にせざるとなり、沙門は粥、飯、此外に食ふを佛之を畜生食と罵り給へり、まして美食厚味を好むことは放逸なり、放逸なるときは愧あり、愧を知らざるときは則ち人にあらす、禽獸のとき乎、それ出家は士農工商の外に居て定まれる糧あり、朝城中に入りて托鉢して食ふ、専ら佛法を修行す、何の餘あつてか美食を集めて活計の事とせんや。

一 沙門として人に誦ひ、財を食りて食を美にし、衣をかろくするは愧なり、愧をうりて以て身を樂むるものは拙し、己か身を辱しむるは自ら作し自ら受けるなれど、佛、愧しめ、祖を辱しめ、法を辱むるは佛祖の恩を知らざるものなり、愚、知らざるものは猶禽獸のときし。

一 心雙と云ふことあり、心雙とは心の耳潰れと云ふ文字あり、鈍なるものは耳の遠きやうなり、人の云ふことをちやくとは聞得ず、さらば耳か遠きかと思へばは遠からず、心か鈍き故に耳に入りなから、心に合點する處遲きによりて耳の遠きやうにあるものなり、まさしく耳には入れども心に得ざるなり、心雙と之を云ふなり。

五 味

一清酒の甘味なるも又酸味なるも、これを飲むときは則ち久しく酔ふと覺ゆ、辛く甚たしきは火急に酔ふと云へども早く醒めてよし、されはよきものは輕し、次なるものはしたるく、もたれたる心何にもあり、宜くも甘きは緩にして滯る、酸は澁飲す何れども脾胃に留滯して散せず、久しく酔ふの儀明なり、辛は散す、酔は酔ふと雖も散して滯らず、故にさひしく酔ひ速に醒めて跡無きか如し、これを以て人を見るも亦此の如し、酸き甘き人はやわくとして意趣あり、則ち終にこれを果さず、辛き人は當ることさひしく楯もたまらぬやうにおれども、言ふべきことをははさと云ふて根無き草の如し、その跡なし、但衆味をすてす取るに宜き所あり、一盞の酒を醸して五味相生するの理を知る、まつ酒を醸する其初め其色黄なり、其味ひ甘し、これ土なり、次に其色清くして白し、其味辛し、これ金なり、土金を生ずるの理なり、次に其色黒し、其味ひ鹹し、これ水なり、金水を生ずるの理なり、この次酒の性漸く降り其色青く其味酸し、これ木なり、水木を生ずるの理なり、次に酒の性彌降沈して、損して其色赤く其味ひ苦し、これ火なり、木火を生ずるの道理あり、然れば酒の徳は土金の盛よして、水中分にして木火に衰ふ、されは専ら辛きは偏にして和無く、専ら甘きも緩帯にして所強き無く、たゞ能く辛く能く甘ふして酒なり、人も五味を兼たる人稀なり、辛からるときは則ち甘く、甘からるときは則ち偏に辛し。

一獨業の花の千葉にして赤きは、其實必しも少くして薄し、これ其精を花に過す故あり、花一重にして白きは實必しも豊大あり、徳の俄に輝くもの頓て盡くる、人は徳を惜むべし、之を放たすべからず、例へば大豆を十粒算ふるに、一粒を以て數ふるときは則ち久し、二つを以て數へ、三つを以て數ふるときは則ちやかて算へ了る、又一盞の水も小杓を以て酌むときは則ち久し、大杓を以てくむときは則ち頓て盡くる、草木の枝左小なるときは則ち右大なり、右長きときは則ち左り短し、必ず短小の理顯然たり、牛鹿に角あり、故に上齒無し。

一紙を徒ら費す童男あり、之を戒めて曰く、往古紙なり、片竹を編みて以て書を爲す、故に書を編むと云へり、後漢和帝のとき蔡倫字は敬仲、始めて樹膚及び敝布を用ひてこれを爲る、今の爲る所のものは楮皮なり、先づ其楮を植ゑ、培養して時至りて之を剪り皮を剥き、水に漬し蠶皮を去り、搗爛し水に酒し、粘滑のものを熱和し、後その紙を製する、籐の長短の量に應じて紙となして已後一紙々々悉く板の面に張り、之を乾し乾きて後刷りて五十枚を以て帖々とし、これを切り一帖を重ねて一束とし、以て功を終る、一紙輕しと雖も此の勞を思ふときは則ち重し、輕んすべからず、人の勞を知るときは則ち人のためにあらず、我身を補るにあり。

一垂示して云ふ、法性の義も用ひず、時節因縁も亦觀せず、坐禪學道は平常の心を失ふ、長連床上に

久座して窮屈を作す、畢竟いかん會得し去る、代りて云ふはにはへと。

虚無

一衣食住居に結構をつくす世ならば世間つかるへし、いかにとなれば金銀足りて結構する人は百人に五人あるへからず、百人に五人はあるへしと思へども、千人に五十人、萬人に五百人なり、然れば萬人あつて其中に五百人金銀足る人これあるへからず、百人に一人あるときは則ち萬人二百人あるなり、福人の結構を盡すはさもあるへし、それ猶奢りて大和唐もさるふたることあり、萬人の中百人は餘りありてするけつこうなり、九千九百人は福人にならうて及のさる申をする故に、世間の心渡る、その金銀足りたる百人の方を押へて奢りを止めさせたらば、自ら萬人ともに奢りが止みて世は安かるへし、世間のつかれ、人の悪心になり、屋焼人殺をするも其本を尋ねれば、侈りに事足らざるより起るものなり。

一それ天下を領する者、珍奇異物を我有となし高僧に進むものは非なり、珍奇異物は散して天下のものに與ふへし、高僧は辭して進むへからず、其故如何となれば、天下を領する者、天下はみな我倉庫の中なり、矧んや又珍器異物と雖々求めかたきにあらす、求めやすきを以て實とせば理當然たる

にあらす、もし其所用にあたるときは則ち天下みな我倉庫の中なり、豈之を用ひかたから乎、又天下を領するときは、則ち權威を以て官爵するは進みかたきにあらす、進みやすきを以て進むものは奇特にあらず、布衣にして天下を安んず、これ難い哉。

一諸道に始中終の三あり、始終の二の中を得て諸道の終りとす、終は終りにあらず、始と終とは偏なり、また始と終と相似たりと雖も、似て似ざる所あり、二歳三歳の者は、心は八九十の人と相似たりと雖も、中年の才覺を盡して立歸りて少年の心に均し、相似て似ざる所あり、少壯の中を得て老年穩便なり。

富人非「達者」 塵埃之管辨

一諸家の學始めは皆名利渡世のためと思ひて志すものなり、よく道を明らむれば何れも名利渡世にあらず、其故に諸家の達者皆財寶に富めるはなし、諸家にをいて何れなりとも其家の達者といはれて富あらは、道は達せぬと知るへし、陽虎か曰く、仁者は富ます、富をすれば仁ならず、道を學んで立身すへきと思ふへし、富人となるへしと思ふへからず、立身は我心の私曲を失ふて公直となし、汚穢を除きて清淨になしぬれば、名を求めんと思ふ心はなければとも名世間なきこへ立身すへしと思ふねども身を自ら立つ、これ學者の力なり、富を願ふ人は我本來の心公直なるを曲げて私をなし、我

本来の心はもと清浄なるを不浄となしたるゆへに、有錢の家とはなるへし、塵坑を掘るに初めはなにもなく淨地なれとも、後はいつとなく塵土平地よりも高くなりて其近邊の草を肥す、これ世間の不浄を愛するゆへなり、洒掃したる地は塵埃を絶して人の心までを淨す、但しこれ世の人は網塵の地をさらひ、塵坑を好むと覺えたり、然るに當世地に水を洒き塵を掃ふことを好むと云へども、身の洒掃はしらざるなり。

一意不浄なる人も其生得の我本心は、清淨潔白にして聖賢にことなるなし、唯我と心を覆ひかくして不浄不潔の人となるなり、塵坑の如く始めはりたるときは、洒掃の地を異なることなし、塵坑を愛しぬれば塵坑なり、人皆世上の塵をあいすこと塵坑の如き乎。

一曲と直と淨と汚とは、善惡にわかりてあり、之をわやまる人はあらし、庭塵敷の美麗を好まぬ人はなし、我心の私曲ある人も物の曲れるを好む人はなし、木を植まればゆかみを直し、庭に塵あれば掃ふと見へたり、已か身の不浄曲事を私にして置くもの、不浄曲事は堪えずと見えたり。

一心こゝに在されは視れども見えす、聽どもきこへす、これ至れる人の心にあらず、學者の心なり、深く思へば心こゝに在りて視聽するときは、則ち一つのものに在りて衆を欠く、心こゝにあらずして視聽するときは、則ち一つに在すて衆を欠かず。

一人の云ふを聞くにそんぢやう其長老法印は殊勝にさむろふ、御佛でさむろふと云ふ、如何やうの所を見付けてかく云ふと思へば、これは甘きものてさむろふとて黄連をあたゆるに、昔の甘草はかくなかりしか今の甘草はかうこそあるらんと思ひ、また水を酌みてあたゆれども、酒と云へば酒と思ふ類の人を殊勝なりと云へり、眞實の殊勝と云ふは此の如きにあらず、これは偏に殊勝に似て殊勝にあらず、よく一切の理を窮め知らざる所なく、上は天より下地に至るまで、王侯貴介の事、士農工商下賤の業まで知らずと云ふこと無きは聖人あり、佛祖なり、舜何人ぞ、歴山の耕父なり、佛何人ぞ、舍衛の乞士なり、蓋聞きてさかす、見て見す、知りて知らず、其節にあたりて其知るへきを知り、其聞くへきを聞き、其見るへきを見るなり、其見るへからざるを見ず、其聞くへからざるをさかす、その知るへからざるを知らずと云ふときは、則ち感なるか如し、其見るへきにあつて見、其聞くへきにあつてき、其知るへきにあつて知るときは、則ち一切のことをいいて知らずと云ふこと無し、これを殊勝と謂ふ、殊勝は字の如き乎。

一之を用ひても理に當らず、之を捨てても亦理にあたらす、これ今時の人なり、用ゆるときは則ち其惡を知らず、捨つるときは則ち其美を知らず、己に順ふときは則ち惡人と雖もこれを用ひ、己に違ふときは則ち善人と雖もこれを捨つる。

一物各天理あり、其天理に率ふときは則ちもの我心の如く従ふ、其理に逆ふときは則ちもの我に従はず、況んや有情を以てを乎、車は横にをすべからず、もし横にをすときは行かず、これ車の理、逆ふゆへなり、車は造化の形にあらず人の造作なり、人これを造ると雖も既に形成るときは則ち天理あり、天理に従ふときは則ち無心にして従ふものなり。

一狗猫のたくひ陽國に生るゝものは陽氣勝つへし、然るに陰國に來ては甚だ寒にたへず陽氣勝ちて寒に堪へざるは義にあらず、只知る其習ひあるものなり、温かなるに慣ふものは寒に堪えず、寒に慣ふものは熱にたゆる、此を以て知る、人も辛勞艱難を経たるものは艱難に堪ふ、一生艱難に遇ふまじきにあらす、人は只身を以て至樂に置くべからざるなり。

一萬事は皆純善なり、惡なし、萬物皆純善にして惡無きなり、中なるときは則ち皆善なり、中を通ぐるときは則ち善もあくとなる、例へば甘さは善なり、苦さは惡なり、甘さを用ゆること中なるときは則ち善なり、中をすくるときは則ち甘さも亦苦さに同じきなり、苦も亦これ五味の一つなり、用ひすんはあるべからず、中を執るときは則ち苦さも亦中正を得て甘さに同一。

一世俗佛法を寂にして滅絶すと思へり、道はもと生滅なし、然るを衆生生滅の相となりて、悟るときは則ち生滅の二つとも滅して寂滅の轉現前す、之をたのしんで寂滅爲樂と云ふ、滅絶の義にも

らす、道の体寂にして物の滅死の体のごとく寂靜に至りて、猶滅如と謂ふか如くと謂ふ、衆生の眼生滅をはなるゝときは則ち寂滅現前す、生滅は末なり寂滅は本なり、凡夫は末を見て本を見ず、此本かんして末にきたる、千變萬化するとも其本口湛然と常に寂として變せざるなり、これを指して以て寂滅とす、迷ふときは則ち生滅を見、悟るときは則ち生滅す、悟りて生滅の二つとも滅して寂滅現前す、これを悟りて樂みとすると云ふ義なり、諸行は無常なり、これ生滅の法なり、生滅して丁つて寂滅を以て樂とすと云ふ。

玲瓏隨筆 卷之三

一僧として佛法を裏とし、世間を表とし、多欲にして世に陥いて渡世とするものは、一代藏經目を開て暗誦するとも、亦僧にあらす、縦令佛經祖語を誦せすといへとも、道に契ふときは、則ち是真の出家兒なり。

一一等その身凡相ならず、志高くして、人を直下に見て、然も亦未だ曾て筆を執りて書くことあたはす、未だ曾て書をとど誦することならず、百の事不能の人あり、一等又その身凡實にして、外相貴からずして、然も亦心を文章にかけ、うの爲す所拙からざるものあり、上に謂ふところの一等の者平生此の人を説る、双立つときは則ち道の人の作す所を一事なすことを得ず、然るときは則ちその笑ふこと又なんぞ乎、徒に志高きのみ、更に實なり。

一眼に在りて心に無きの工夫すへし、書を見るに意を得ること無きなり。

一明來れば暗滅し、暗來れば明滅す、寒來れば空滅し、空來れば寒滅す、語來れば默滅し、默來れば

語滅すと云ふこと、よく辨へ知るべきなり。

一昔豊相國の世に大盜あり、名を石川と云ふ、ある人の曰く、石川能く智仁勇あり、彼をしてよく一轉せしめば、善人たるへしと、その所以如何、賊を以て世を久しく經るといへとも願はれず、これ智なり、その徒よく従つて、自ら願はれざるときは、則ち仁愛あるなり、諸將陣をはるときは、則ち謀りて以て陣を張り、諸將普請を役するときは、則ち謀りて以てこれを營み、其盜むところに隨ふ、これ勇ありて姓名の願はる、ことを恐れざるなり、予か曰く、これ實に利口の説なり、然れども實義なし、古に曰く、賊はこれ小人にして、其智君子に過ると云々、賊と爲るの智は君子に過越せり、若し君子のことを謀るべきは、則ち智君子の智にあらす、譬へば犬よく吼へて人をして我封疆のうちに入らしめず、此の智人の守るに勝れり、人よく終夜寐て我倉庫の物をして奪はしめる其守り人として犬に劣れり、然りといへとも、犬はその一智にして人の智なし、犬は人にまさるべからず、狐よく人を誑すと雖も、其一智にして餘の智なし、人彼の好き餌を以て謀るときは、則ち己に縋られて死す、故に知る、賊は唯賊の智なり、彼をして君子の位に居らしむとも、君子のことを謀るべからず、仁と云ひ勇と云ひ、皆賊の智謀なり、君子のことにあらす、賊の位に在るときは則ち謀計あり、その位を離れて君子の位に在らば、唯純闇にして明かなることなし、これを轉すと雖

も君子たるへからざるなり。

一君子の智と、小人の智と別なり、賊たるもの能く之を誅る、智あるに似たりと雖も、真に賊の智なり、君子の事をなすときは、則ち偏に小人なり、譬へは猫よく鼠を捕るの智の如し、鼠の夜行きてよく食を偷むの智の如し、これ皆氣質の智にして、君子の智にあらざるなり、君子の智は、天理自在なり、楞伽經に云く、譬へは牛に馬の性なく、馬に牛の性なきか如し云々、これ牛を以て馬の用をすることあたはず、馬を以て牛の用をすることあたはず、是氣質の智各々なる故なり、然ればまた馬や牛や天理の性なきにあらざらず、賊はこれ小人なり、賊の智ありてよく人を誅るども、彼をして君子の事を誅らしむるときは則ち克はす、これ牛馬の各々の性の如きなり。

一異道を難へ學ぶは、我道の妨げなり、一道を能く學ぶへきなり、禪僧ならば、先づ禪部を一筋よく工夫し、教ゆるものならば、教門をよく習ふへし、よく我道を究めてのち、又偏に我道を守り外を見ざるときは、則ちその見偏枯にして通明の理無く、また始めより異道を難ゆるときは則ち害あり、又始め儒或は老、よくこれを學びてのち、捨て以て釋に入り、或は醫に入る、これ亦道の廣まる所以なり。

一人前にて痒きところを、ばり、とかくことは不法のことなり、甚だ慮外なり、形を忘れてすることなり、痒きこと了聞なき時は、身をつめりても居るへし、大慧禪師の云ふ、覺へすかゆき所を抓あらわすと云ふ語があるぞ、これ身を忘れてすることなり、正氣にあらざるなり。

一問ふ、天地に氣質の分あり耶、答て云ふ、有り、亦問ふ、なにを以て質とす、答ふ、質は地なり、氣は天なり、地は万物なり、形あるものなり、天は形なし、形無きものは氣なり、天地合して令行はる、これ氣質なり、氣質雜らす、質より氣を生じ、氣より質を生ず、人に於て之を推すときは、則ち全肺これ氣質、其時に在りて休氣を生じ、氣體を活す、互に相持して以て立つなり、氣疲るときは則ち体重し、健なるときは、則ち氣活す、形は人の全肺を總て云ふなり、質とは全肺の内にて目鼻口等を云ふなり、形質と續けて云ふときは、右のことく心得へし、又形となりども、質となりども一字取離して云ふときは、形と云ふて質にもなるへし、質と云ふて形にもなるへきなり、一概に物を心得へからず、又氣質を氣形と云ふたもをなし義あり、又其人氣質なりなど云ふこと、少し心持別なり、人々の氣に具足したる質がある、之をその人の氣質で候と云ふ、平生面相に怒ある人あり、又莞爾々々と笑ふ顔ありて挨拶よき人あり、此等はうの人々の氣に具したる形なり、これを氣質と云ふ、氣の質と云ふ心なり、短慮に怒るも、心寛長にして温和なるも、みな人々の氣質なり。一氣は獨り動きかたし、物体によつて動く、譬へは人の跣動するに、地を踏されば跣動こと能はざる

かことし、足物をふまされは勢ひ出でず、物を恃まされは動くことあたはざるか如し、故に獨り陽生せず、獨り陽成ずといふなり。

一或人、手に問ふて曰く、詩は何の爲にして作れるや、予之に應へて曰く、人生れて静なるは天の性なり、物に感して動くは性の欲なりと云々、詩の作ることに在り。

一人皆朝恩を輕んすへからず、爵祿の其身にをよぶものは、聊か朝恩を知るに似たり、其及ざるものに至りては、曾て以て朝恩あることを知らず、これ人愚なるを以てのゆへに、恩あることを知らず普天の下朝恩を得ざるものなし、只些か深淺ある乎、爵祿の其身よ及ぶもの、外、も朝恩なしと謂ふときは、則ち我爲にこれを説くへし、帝畿の内は上一人在ます故に、今の世道なしと雖も、聊か道あり、故に民法法の坐に逢はず、令吏若し民法を行ふときは、則ちこれを訴へ以てその坐を避る、畿外の國遠境の民は、朝の光遠し、故に其民法のつみを訴へに路なく、恣に令吏に曲げられて禁獄せられ、或は水火の攻に逢ひ、終にその身を喪す、かなしむべきなり、これ畿内の民は豈爵祿をうけるの外朝恩なしと謂はん乎、蓋畿内に生ずる所の民は、實に天祿なり、畿外遠境の民は實に悲むべきなり、故に聖王専ら道を以てす、これ即ち天下の民を憐むなり。

一學者は人の非を談すへからず、これ只人我なり、師家これ人の非を談するに咎なし、其故如何とな

れば、人の非を談して一衆をして是ならしむる故なり、蓋師家は人の非を談し、復是を談して衆をして身の非を扱かしむ、人の是を談じて衆をして身の是を増さしむ、小人は一向に人の非を談し、人の是を談せず、故に人の恨みありて我得ることなし、此を以て今謂ふ學者は、人の非を談すへからざるなり、賢者は人の非を談し人の是を談す、若し是非を談せずんば、なほを以て人に教へん乎、賢者は人の非を談して非をせらるゝ人亦之を聞きて之を怒る、賢者人の是を談して人の是をせらるゝ人亦之を聞きて之を喜ぶ、非をせらるゝ、人の怒り彌非なり、是とせらるゝ、人の喜ひ彌是なり、抑も人の我非を談するをきくときは、則ち自ら我非を扱くべきなり、人の我是を談するを聞くときは則ち自ら我是を長すべきなり、世間に一等の人、曾て以て人の是非を説かざるものあり、之を以て賢とす、實の賢にあらざるなり、不仁のものなり、此人假令非に長し惡を増すとも亦傷まず、唯人の非を談し人の惡を説きて、人の憎怨を受くることを傷むなり、已を傷みて、他を傷まざるものは不仁者なり、仁者は人の非を説きて、是ならしめんと欲して己を忘る、不仁者はこれに反す。

一如來大師五千卷の大藏は、五十年心を盡せし言なり、戒律行義を忘るる、我滅後に於てかくせよ、かくせよと、金棺に近くまで遺教したまひしも、皆今の世に變じ、沙門の行義俗方に劣りて邪見無慚なり、欲は海より深く、人我山より高し、常に靈山に在りと説き給ひけれとも、寂寞の扉を閉ちて

出て誠め給ひす、時衰ひ、機降りて、今の世に佛書き給ふとも、祖師出て給ふとも、正道には復りかたし、後世ときあるべきをや、慈尊の世遠し、今の時を如何せん、我輩真に心を痛む器なり、一
事儀にあたることなし、偏に渡世の心までありて、道の心曾て起らず、空しく佛法の名の字をかる
のみにして實なきなり。

一 蚤の飛ぶにも心を付くへし、大道の端なり、大道をわきらひるに便となれり、牛馬は其性大なり、蚤
は其性小なり、然れども蚤の小と牛馬の大と、皆大道の端なり、大小の道を見ることなかれ、大小
の差なし、譬へは黄金を以て蚤を縛る如く、又牛馬獅子等之を縛るか如し、蚤と牛馬獅子と皆黄金
なり、薛化の上に大小長短あり、各荷の葉の團き、松の葉の細き、なにをか察てなにをか取らん、物
各一大極あるなり。

一 萬端につきて、事と理との二に心なきあることなり、事を知りて理を知らざれば悪なり、物に糊
の氣あるときは虫之を食む、虫すいて餘所より來て食むにわらず、糊より虫か生する程に、すいて
食むと云ふ義にあらず、其生する理は糊の濕氣ありて、其物の生を損するによりて、濕より虫を生
する故なり、此の如く心得るを理と云ふなり、板杯を紙にてはるに、濕氣の糊をつけて紙を以て其上
を以り、閉ぢて置けば濕氣を紙にて閉る故に、紙と板との間より虫か生するなり、皆濕より虫か生

すると心得たるか善し、書箱に不審紙をつけるに、久しくおれば其紙のところより虫か生して食む
なり、睡氣にて濕してこれをつけるに因てなり、万の物を外に置きて、風濕にあつれば虫か食むな
り、塗物又は函の蓋、密なるものに入れて置けば食まざるあり、箒最も此のことし、箒掛に懸けて
をくこと最も非なり、此理を心得れば、糊にかきらす總別濕氣を書籍杯に忌むと知れば、ひろき心
得なり、これ理を知る一徳なり。

一 物皆權實あり、唯實を知りて知らざる顔にて權を用ひて善し、權は方便なり、實は一んじつなり、譬
へは山椒を疊の上に置いて、後取りて食へば、噎はすと云ふは權なり、これ實は疊の上に置いて噎
はずにはあらず、山椒は噎せるものと思出たさせやうと云ふ義なり、此理を現はせば謀計か破れて
人か信せぬほど、疊に置くか秘法ちやと云ふたは能きなり、楊枝を手より手にわたせば中かわる
く成る、扇子になりとも載せてわたすと云ふは權なり、口中に用ゆる道具ちや程に、他人の手よけ
かさせしと云ふ義、これ實なり。

一 席に座たしるより、竹倚曲線等に腰掛けたるは樂しと云は、腰掛けたるより座したるは樂しから
んことなり、如何にして斯くあるそとなれば、座するは常なり、腰掛くるは時の興なれば、稀なる
ことを以て興する心なり、心は珍しきことに興するなり。

一醫師の語に云ふ、薬の禁好のものに海の藻を禁物に書くは、神馬藻のことなり、一切の海藻を云ふにあらず、なのりそと云ふは、神馬草のことなり、神の馬には人は勿乗そと云ふ和名なり、然るに本草に、海藻はくすりに禁すると云ふことを見す。

一薬に油を忌むは、鴈にあふらかしめは薬かきかぬと云ふ義なり、禁忌にあらず、薬の性を弱くすの義なり、氣のつよき薬は、箸に油をつけているなり、性をよわます心なり、況や油のある薬これ多きを乎。

一此虫勸進柄抄の柄の長さを見て候、或長老の武蔵の國より長門まで、高家の身まかりたる吊とて、同宿を使はず、彼の高家の人さもれもひけん、誠に其志にて、海陸万里の難を凌ぎてはよも來らし、さても武蔵から長門までは長き柄抄の柄かたと云はんこと案のうちなり、此志の十の一を修行に費せしと思ふはいかん、我理言あらざらん乎、此長老の長門まで僧の足を苦め、我本寺開山に一番を焼かず、さげは此僧既に印證をり得つへきなきこゆるほどに、今にをいて香拜を遂げざるは如何そや。

一香も味も濃く輕さを褒美す、然れば人も万事につき濃く輕きかよ、遠なれたるは惡し、人に惡するはよけれども、出家法師の身にては之も濃く輕きこそなれり、惡過くれば却て胎ふに似たり、佛

法の慈悲は別なり、一言も發心の種たるへし、愛憐の慈悲は遠多五逆にまされりと云へり。

一萬事飽足則は止、未飽足則求むる心止す、少年にして年をつまんことを望み、老いて年をげんぜんことを思ふは目前なり、唯世人のあかざるは財なり。

一道は万事をかぬる、此辨甚だ深し、容易にへんし難し。

一人は古郷を離れて、蝦夷か千島にも住むものなり、唯左迂と云へは、行く人の跡に名残多し、思ひ、留るものは行くを思ふて、互ひの袖を濕すを思へば、左迂流し人どきくより歎息を起すなり、又知行所領につきてゆくと云へば、目出度きとて反離すへし、人の悲歎は見聞のかはりなり、本心は動かず、見聞によるものなり、故郷を遠く離れ、千里の外へ行くにもよらず、唯悲歎は我にあり、外に善惡なしと思ふへ。

一万事につき、好惡は疾く定めり、人毎に之を知らざるにあらず、よしとあしきとを双へて、誰か好きをし知らざらん、好きことを知らずして善道に赴かざるにはあらず、惡しきことを知らずして惡道をするにはあらず、善事はするに難く、あしきことはするに易し、難きを忍びすして、其易きをするなるへし、物に能く忍ぶ人惡事をはよもせじ、堪へずして惡しきことをもなすと覺ゆ、堪忍の二字常に思ふへし、百戦百勝も一忍に如かず、勝は人の欲するところなり、況や百勝をや、然れども

一忍に如かずと云へり、大燈も吾山に入らざるもの、一に堪忍、二に志、三に智慧とありし。
一因ありと雖も縁なきときは、則ち果を得ざるなり、譬へは因とは舟なり、縁とは風なり、果とは到る處あり、初め一の葉あり、これ因なり、此葉をうゆる手はこれ縁なり、葉ありといへども、これをうゆる手なければ生せず、生せされは次の葉ならず、うゆる手の縁に逢ふて、葉のなるを果と云ふなり、人過去の業因ありて其果を感ずへし、されども縁に逢はされは智慧發せず、空しく一生をば果して、未來の縁を待つものなり、六祖能大師は、嶺南の樵者なり、薪を市に鬻くに婆子の金剛經を誦してまことに住する所なくして其心を生ずへしと云ふを聞きて心を得、遂に黃梅山に到りて得果をなす、六代の祖師之風因ありども、婆子の縁にあはすんは、永く嶺南の樵者となつて身を終るへし、又日々縁に逢ふども、夙因なくんは、感果の理いかたこれあらん、然れば彼の市に金剛經を讀みて、幾千万人か聞くへし、されども大果を得るものは六祖一人なり、因縁和合せされは、一切のこと成就せざる道理なり。
一利根の人は妙旨妙し、鈍根の人は妙旨あり、利根の人は疾く走り行過くるを、鈍根の人は漸々にその理を盡す、利根の人はよく前言を記す、之を説くと雖も妙解妙し、鈍根の人は多言にわたらすして一句一言の上をいいて、久しく之を止めて、思惟する故に、利根の人よりも却て妙解を得るものなり

山に入り葉を拾ひ、茸を採る、茸多きを心にかけて走る人は却てこれを得ず、走りすぎたる跡を認めて却て多きを得るものなり、多きを思ふものは多からず、多きをすてざるものは多きに至る事、万事にわたるによつてなり。

一田夫野人に孝行人に超たるなり、四書五經をよみても不孝の人あり、孝行の田夫野人、何によつて孝行なるぞ、知る人何によつて不孝なるぞ、二つともに出ること天然と云はし、聖經論なきなり、不學にして天然の孝行の人あり、學ひて不孝の人あり、人よくこれを辨す、佛法信あるべきなり。

一漚は浮ぶものなり、故に天にそくす、輕きを以て堅實の躰なければなり、村家に蘆茶を煮て之を喫む、漚よく浮ぶ、醫書に曰く、清く軽く升るものは茶のるいなりと云々、濁酒を温むる鍋を以て茶をにるときは則ちあはさき、以下温清酒一鍋煮則漚不消と云々、况や又漚乎、清輕の輕なり、知んぬこれ濁るものは下り、清きものは上る、天理私なし、村夫の語を聞きて、道をあきらむること多し。

一物と人と皆同じ、剛き金に礪柔くして可なり、柔かなる金に礪剛ふして可なり、それ人剛と剛のものとは互ひに破る、剛柔にして尤もよし、剛なるときは則ち柔これに隨ふ、柔なるときは則ち剛これたすく、乾は堅く坤は柔なるの道なり、况や柔よく強を制するものをや、強者は力を以て之と

制せんと欲す、互ひに力あるときは則ち制せられず、柔相隨つて以て遂に制するに、制せられすと云ふことなし、齒盡きて唇猶存するか如し。

一人は少年に學ひ、壯年に早く立身すへきことなり、西民の所業も何も急ぐへし、假令成得ても老ひぬれば未短し、日暮れて道を急くなるへし、北地陰寒の國には春の花遅し、陰寒にさゝまられて然り、然らば秋の花は末の陰寒を考へて疾く開くへけれども、節序あれば之も前年の寒氣春に持越し、其傷みよや秋の花も遅く咲出づる故に、又來る秋末の寒氣にあたりて盛りもほどきなり、人の中年過ぎて立身して末の短きか如し。

一鳥有先生問ふて曰く、宋儒云く、佛氏方に老莊の文を以て其教をかざると、是なりや如何、答へて云く、此れ朱氏の妄心なり、かの老莊は太極の先を以て無となす、太極の後を以て有となす、無を以て是となし、有を以て非となす、有無の見いまだ消せず、是非の情いまだ泯せず、即ちこれ輪廻の根にして靡妄の本なり、況や無を喜ひ有を厭ひ無を取り有を棄つるとや、虛無の獄に囚はれ自然の縛に纏はれて、有漏の因を成し有爲の果を招く、之を以て能仁氏の道に擬すると、なほ河伯の海若を望むが如くなり、能仁氏老莊の文を以て其教を文ると、それ佛に經るゝあらずや、豈老莊の文を用ひて之を文らんや、漢より此方諸經迭に至る、文は譯に由ると雖、義は實に梵より出てたり、豈

譯家自ら老莊の文義を用ひて之を文らんや、譯經院の内群英悉く集る、譯語の者あり、筆授の者あり、證義の者あり、豈一人私に老莊の文を取りて之を文らんや、一經の梵本或は屢譯す、前師の略は後師の梵本に據て詳にするを得、前師の誤は、後師の梵本に據て之を正すことを得ることあり豈妄に老莊か文を取り用ひて、これを文ることを許さんや、唯梵を譯して華となす、必ず此方の言句を用ゆるのみ、此方の道を談するの書は老莊を最とす、故に多くその語を取る、意義は則ち殊なり、察せずんばあるへからず、老莊無爲と言ひ、我佛も亦無爲と言ふ、或は老莊か道徳と言ひ、我佛も亦道徳と言ふ、何ぞ日を同して其意味を論ずべけんや。

一人の哭と笑との聲をさけは、都も鄙もかはらず、奥羽の間に誦せられて、所の人の云ふこと、洛と違ひぬれば聞分けかたし、人の云ふ詞は、先の人を學んで云へり、學ぶは皆血氣なり、洛は洛の血氣を學ひ、夷は夷の血氣を學ぶ、故に夷洛の詞かはれり、哭と笑とは皆本心より出づる故に、夷洛皆同し、血氣と本心とのかはり此の如し、奉行憲法の人達、彼の笑と哭との出づる本心を以て公事と聞かば、毛頭私の見あるへからず、血氣によらは危し、人心は危し、道心は微なりとは誠なり。一寒き朝は天地凍れり、漸く朝陽昇りて外暖氣を得るとき、家の内殊のほか寒と、これ陽氣寒をせむる故に、寒氣うちに追つて此の如し、硯に向ひて居るとき、朝に水凍らすしてありしか、太陽昇り

て外明々たるるとき、忽然として硯に氷を生ず、こゝを以てまことを待たり、外陽にして寒内に迫り外寒にして内熱來ることを知る。

一好語は依らずんばあるへからず、その言ふ所の人三歳の孩兒と雖も、言ふ所謙むる所好語なるときは、則ち受けて以て聖賢の語に同一うす、是れ其得ること身に在り、多くは高位高官の人の言ふときは、則ち飲して以てこれを聞き、貧賤の人言ふときは、則ち金言と雖も以て之を輕んず、刺へ諫める人に向ひて顔色を損す、この損するも亦我にあり。

一爐櫃を地につけぬれば灰濕るなり、上にありと雖も火の性は昇るものなれば、上にありて下を燥すことは甚し、況やまた燥の濕を取ることを知るへし、濕の燥につくこと亦之を知るへし、上に火あれば、大火に小濕勝つて灰を濕をすへきことあるへからずと云へども之を濕す、燥は弱しと云へども燥の濕を呼ぶ故に、火熱の灰負けて終に濕ふなり、美生の心に合せて思ふへきことなり、又善人の惡人に引かれて、終に惡人となることも然り、惡人の善人を招くこと燥濕よりも甚たし、血を吸ふこと道理掩ふへからず、血に水を入れて其水を捨て、跡へ松をけつりて火をつけ、血の内へ入れて血を取るへき所に少し口をあけ、彼の血の口を推付ければ、血を血の内へ吸入るなり、血のうちへ入れたる火、血の内の水を吸ふて底へ引く次てに血を吸出すなり、火の濕を吸ふ熱の強き

こと知るへき乎

一物の危きことを知らざるは、惜む心なき故なり、取捨さはやふれなん、物を思ね重ねて持ち、氣遣ひ無く行くは器を惜む心なき故なり、取捨さは破れなん、此器新らしきことやと思ふ心なき人此の如くす、この金玉をあたにきて人に取らるるも、金銀をくしむ心淺き故なり、虎狼の群に走入りて急に飛びつかり、或は敵の所に思ふことなく走入るは、身を惜む心なき故なり。

一善の惡を消すこと、あしき臭氣に香を焼くか如し、智人出て愚者の影なきか如く、月出て星の影なきかとし。

一渴するか故に水を思ふ、飢ゆるか故に食を思ふ、渴せされれば水を忘れ、飢ねされれば食を忘る、鴨か鳴きたるか惡か身に來くへきか、狐か泣きたるか何事か惡か來るへきかなど、氣にかけぬるは惡事を忘れざる故なり、惡も自然、善も自然、惡も途くへうらす、善も途くへからざるなり、善惡は双對するものにて車の兩輪の如し、惡なくんば善もあるへからず、惡あれば善もあり、只管に善と思ふとて善のみ成るへからず、只管に惡を嫌ふとて惡なかるへきにあらす、善惡々々を廻るなれば善は善に任せ惡は惡にまかせて、善惡一任して一をも胸に置かされば、鴨の鳴くも、狐の鳴くも、かれか三昧にして一切氣にかゝることなし、況や又善惡は二ならずして法を以て分つことなし、又

た衆生界を假に建立して迷妄の人を救ふには、善あり惡あり、此の善惡その迷妄の人自ら作出して又自ら嫌ひ好むなり、惡を嫌はばなほ自ら惡とする、善を好まばなほ善を勤めざる、自ら作りたる惡の身に報ひ來るとき、この惡を歎きてあらぬ孤鴉の鳴くをも思ひあてし、氣にかけぬること大なる誤謬なれ、又人善をつみて其善身に報ひきて、榮へぬるを見ては之を羨む、自らなさざる善如何にして身に報ふべきをや、或人の曰く、善を作す人此世にて貧困にして、百事心になわす、又窮して心根あしくして、人の惡をなす人と呼ぶもの、その身榮え、心に万計任せぬることを見れば善の報ひ、惡の報ひと云ふもなきに似たりと云へり、曰く、古人既に此の不審あり、これは貧人の舊債とて先づ償ふか如しと云へり、去年去々年に借りたる債物を先づ償ふて、當分今年の債物をは未へのふるなり、此生にて不思議に善心に飯し、善をなすと雖も、先の世の惡あり、其の惡自身に就て、此生の善未だ熟せざるか如し、現世の善は未來に必ず熟して、今の善未來の身に報ひきたるへし、經に前世の罪業によつて應に惡道に落つべきに、今の世の人に輕賤まるゝかため故に、前世の罪業即ち消滅すと説けり、罪業今の世に消滅して、未來には善道に赴くへしとなり、又此の世に惡を作す人も其身に惡きたらざる、これ亦少しき過去の善因感して、せんくは身にきたるなり、當分の惡は未だ熟せず、この惡未來の生に必ず身に昇るへし、彼の舊債の償への如し。

一 司馬溫公の家訓に曰く、黄金を積みて子孫に遺さんと欲す、子孫守らす、善をつみて子孫に遺さんと欲す、子孫讀ます、陰徳を冥々の裏につみて、子孫長久の計を爲すに如かすと云へり、今我身に積む所の善、子孫の長久となるべきこと、如何か心得べきをや、子供未々のためとて、善をする人今もあれは人之を笑ふ、これ又如何をや。

一 相撲をとる人の勝たんくと思ふか故に、我よりか劣りたる人をは、もし存分骨身の破るゝ程、方に任せて勝ちて喜ぶと雖も、亦我に勝れる力ある人には負けて骨身を破られて苦むあり、世間の人の心も人を毀ん、人惡かれと思ふ人は必ず我身あしし、我より弱き人をは抑へ滅すれども、又我に勝らんありて我を抑ゆること歴然なり、只人も善かれ、我も善かれと思ふべきなり。

一人として人のためによかれと思ふこと、誠に難いかな、凡そ生きとし生けるべし争はずと云ふことなし、空をかける翅、地をわしる獸、螻蟻蚊虻に至るまで争はずと云ふことなし、然れば人として争はざること難し、心底にはあらそふと雖も、外争はざる顔するは體なり、これを人と云ふ、此體を存せずして人に向ふときは、則ち早くどもに争ふ、これ人にして禽獸に近し。

一人の人を思ふ心をつけて見れば、實に人を思ふにはあらず、人を思ふことこのまことと云はば、親の子を思ふなるへし、然るに子を受する人を見るに、毒物を食はして忽ち病を起すと雖も、彼に食は

せたりと思ふ我心の欲に忍びずして、言はず病を起すべし、之を興へてくはしむるときは、則ち子を思ふ心に我欲勝ちて毒を興へて病ましむるなり、我子随意に食ひ遊山玩水して身を貫いて、死に及へども之を責むることあたはず、然れば彼を實に愛するにあらざる、子の好む所に従へば子之を喜ぶこれ喜はしめて己か樂みとす、これ子のためにわらす已が愛に溺るゝなり、佛祖の衆生を思ふは親の子を思ふが如しと云へとも、愛に溺れて子に毒食を興へて病を起し、愛に溺れて子を放逸ならしめて、身を喪すに至るに非ず、佛祖は魚肉は人の好む所なれども之を制し、邪淫は人の好む所なれども之を戒しめ、飲酒は人の甘んずる所なれども之を制す、五戒を禁し、十善を勸む、これを寔の大慈大悲と云ふ。

一成人の云ふ、君子たる人も人を惡むことありや、我答へて云ふ、これあり、不義の人は義者の讐なり、無道の人は有道の讐なりと云へとも、我ために惡むことなし、我と人との間にして讐を報ゆることはなし、不義不仁の人は道の讐なり、君子は之を惡む、人我に讐をなすといへとも、私のわたをば捨て、報ゆることなし、故に曰く、伯夷叔齊は善惡を思はずと云々。

一李太白か云ふ、それ天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客なり、浮世夢の如し、歡をなす幾時う、古人燭を秉りて夜遊す、其所以あるなり、万物と云ふに有情非情隨れり、人をも物と云へり、故に人

物と云ふ、天地の間は万物の行通ふ旅の宿なり、遂に止まることなし、光陰の過ぐることも又旅客の過ぎてやまざるか如し、四時の過行くこと百代も遼ふことなし、この身は夢のことしと、有りて見て跡なし、又見るかうちとても幾時そや、故に古人夜を以て日に繼ぎ、燭を秉りて夜遊すること所以なきにあらざるとなり、此にをいて人あやまるへし、遊ふに節あり、せつに當らんば遊ふも憎からず、節にあたらすして遊ふは狂人なり、節をすくことなけれ、節と云へるは、竹の節のことく方の事に大方定まりたる程あるものなり、然れば遊ふとても程あるへし、その程々に過ぎなば善きにあらし、公家武家社家出家、それく相應の遊ひあるへし、其身に不相應の遊ひ之を節にあたらすと云ふへし、出家なとは遊ふと云ふことあるへきにあらざる、然れども世下りて人の心劣りぬれば、大方の相應したる遊ひは人の免すことあるへし、夜會の忍びには詩歌杯もゆるゝあらん、三十句二十句を聯ね杯するも、偶風雅の人々交わるとき興態さもあるへし、之をよき作として佛事を忘れなは、出家兒にあらし、又月に興し、十四五許の兒若衆など、誘ひ花の下月の前に破籠小筒など携へ、小硯短冊箱など見へたるもやさし、道心あらん出家は之をもよしとせず、出家として道心なしと云ふことあらんや、道心ある上の私の車馬なり、斯ることをさへやましとす、此外蕪茸たる風情をや、公家武家によらず或る族は云ふ、浮生夢の如し燭を秉りて夜遊すと、云ふこと尤もなり、な

にこども夢ぞ、只遊へとて限りなく心を動し、色に耽り、修を極むることは古人の言を引き用ふといふとも、古人の心意とは雲泥違ぬることなり。

一某の人、身のために宜しからざることを止め給へと諫ひれば、我は、や六十になりたり、此年まで此のこどくして過來れり、今少くは兎も角もならん、まゝなりと云ふ、吁善道ならば朝も聞いて夕に死すとも可なりとこそ思ふへけれ、六十の上五年にても十年にても生んかきり、今日より身を善に改めんこと喜ばしからずや。

一人の眞實は何にて知りぬへき、涙の外あるへからず、思はずこぼし出でんものにあらず、泪をこぼさん心偽あるへからず、其事を深く思ふ心動きて、足手の爪の先までこたへて、情にてせめ出せる水なり、五臓を纏にてまきしめて出さんとするも、滑める水一滴出づべからず、情力の強きこと不思議なり、人の身の中に涙のあり處一所ありて、泣くときにそこより出るものにあらず、情を以て絞り出すなり、愛水なり、經には愛水のうちにこめたり、然れども何事に付きても涙して其事を思ふ思ふと雖も、志遂げずして其の涙偽に似たることあり、人の心朝夕に變するものなれば、かはる心もあるへし、又思ふと云へとも叶はずして、思ふこと偽にあらざるあり、後のことは兎もあるへし、涙を流す端的に偽あるへからず。

一其鉢の動く云ふは、内に心動きて後鉢はうごくなり、然れば鉢の動かぬとて動かさるにはあらず、神木は動かぬものなり、風來れば動く云ふ、然らず春は万物動くなり、動きて花緑を生ずるなり、鉢にあはれて動かされは動かすと云ふは、道理を知らざるなり、人も其所へゆかんと思ふ心、己に中ふ動きて後動きてその所へ行くなり、然るを身動きてゆくを見ては動く云ふなり、中に動く所をは人みな見すして、動くとは心得ざるなり、思ひ内にあはれば色外にあはるゝと云ふも、鉢は動かすと云へとも、色にあはるゝは内動く故なり、神木は座定まりて進退なき故に、動かさるやうなれども、内に動きて花緑を生ずること、神木のうごきなり。

一梅花を咬めば梅仁の味に同じ、杏花を咬めば杏仁の味に同じ、諸華諸仁皆同じ、仁は木の根本なり、枝葉も亦其根本より出づ、然らば枝葉を咬むとも其仁の味たるへしと雖も、花は其木よりも精粹なるものなり、枝葉を咬むときは則ち其仁の味あることを覺へず、これ枝葉も根本は同じと云へども、幾にして眞味渺き故に覺へざるなり、花は木の精神なる故に根本あり、味こゝよ聚りて難取なきゆへなり、譬へば人の本性は仁の如し、これ人の根本なり、根本より起りて言行にあはれば、偽なく全一なるは仁と花との味一なるか如し、人の情意まことは神木の枝葉莖の如し、枝葉莖皆始めは仁より出生すと雖も、眞少くして其仁の味を覺へず、人の情意も根本の性を離れすと雖も、血氣に

化せられてその眞を失ふ、故に偽にして眞なし、艸木の枝葉を咬みて仁の味なきか如し、艸木に枝葉はかりにて花なくんは誰か之を愛せん、人をして眞なきか如く、人としてまことなくんは誰か之を愛せん、艸木の枝葉にも花仁の味は少しはあれども、眞に覆はれて精味顯はれざるなり、悪人も眞は根本の性に備はりてあれども、情賊に覆はれて其光あらはれざるなり、善人は情賊消して本性に随ふゆゑ、眞多くして偽少し。

一火雲とは、只雲の赤きを云ふなり、雲には黒く白きならてはなし、紅日映ふときは雲赤く見ゆるなり、紅葉に露を見るか如し、雲の赤きよはあらず、雲に黒きはなし、厚きときは雲黒く見ゆるなり、煙の薄きときは白けれども濃き時は黒く見ゆるか如し、山より生して上るときは雲皆白し、又雷雨催して風雲を峯へ吹きわたつむるときは則ち黒し、雲厚き故なり、青は天の色なり、然れども天に青色なし、遠く高き故に青く見ゆるなり、水淵深きときは青きか如し、麻緑と云ふは天の青きに似たる色を、緞子に染めなして云へり。

一薰風南より來り、殿閣微涼を生ずとて、夏は南の風涼きなり、薰風とは南風なり、或人不審して云く、南方は火なり、薰とは火すへると讀めり、殊に夏にしてなにとて夏の季、南方は涼きや、曰く南方は火なり、火は熱最も甚たし、熱風を生ずとて必ず火より風生するなり、南方君火の威烈扇

ひて北方に溢れ來りて涼きなり、其火の甚だしき所は涼からされども、火より生ずる風のゆく處涼きなり、古歌に「此ほどの南の風にうさみるのよるくすし、蘆の屋の里」

一南向の座敷は、夏涼く冬暖かなり、夏は南風涼し、冬は時寒するに南の陽氣によりて暖かなり、北向の座敷は、夏暑く冬寒し、夏暑きは南塞りて風來らざるゆへなり、冬寒きは尤北に向きたれば、北方の陰寒に向ひ南陽に背くゆへなり。

一船にも荷を重くつめは覆るへし、車もまた然り、馬も重く荷を負せぬれば、脚を折るなり、人も身に應せざる荷物を持ては、身の舟を覆へすへし、身を軽くもつへきなり。

一五條の橋の上にて、乞食手を出して云く、因果の道理にせめられて斯るうき身に一文下されよ、これは因果のかなしさものにて候と云ふ、大聖國師諸人に語らせしは、師代りて云く、をそいすい一生々の間は我等も斯る身とや成りつらん、生を隔て即忘の小根なればいさしらず顔して、酒の酔の昨日狂ひ、亂走して人にうたれ縛られしは、酒毒のために神をくだき魂を散せられて昨日を覺へず、只今日のみ思ふか如し、生死の砌は鏡湯爐炭のせめに、舊有の身の苦みを忘失すること、彼の酒の酔の如し。

一世に虚とすへき理なり、皆實なり、もし虚を述るの文あるも虚を以て休むときは則ち虚即ち實なり

譬は泡影を脱くときは則ち虚をどくなり、虚は即ち虚にして脱底は實なり、若し實脱を以て虚とするときは則ちこれ虚なり、虚を以て虚を脱けは、これ實にあらす乎。

一小事の費をなにも思はざる人は、大事をなしかたし、小を積みて大をなすものあれば、小を捨て大を成すことなるへからず、大の本を忘れなは末廣くなるへからず、草木も一寸に生出づるをかしたて、こそ、大ふもなるへきものなれ、君子は本をつとむ、本立ち 道成ると云ふこと孔子の語なり、亦に本あるへし、本をわすれぬ心よきなり、一粒の米一錢の錢を惜しと思ふ人は、大なることをなすものなり。

一身貴く成りて本の賤きを忘るへからず、家富みて貧きときを忘るへからず、賤きは貴きの始り、貴きは富のはしめなり、主の恵みにて身貴く成りて、賤きを忘るへゆへに、主の恩をわためものになして道違ひぬるほどに、果して身失ふ、主の恵みにて家富みて貧きを忘るへゆへに、主の恩をわためものになして、道違ひぬるほどに、果して身を失ひ又家を亡ふ。

一論語に已に克ちて禮に復ると云ふは、己に克つとは我身を賣ることなり、禮に復ると云ふは、禮の

道なり、己か身を恣にして隨意隨行なれば、道はミな外になるなり、然るにより己か身をせめて隨意にせされは道に叶ふほどに外邊なる道が道に飯ると云ふなり、禮は道にかなふやうにしたる禮なれば、禮即ち道なり、道即ち禮なり、道と禮と二あるへからず、器を鑄るに陶を以てとるか如し、型と鑄たる器と變はる所なり、小人は我身を樂くして道を亂すなり、君子は我身をせめて道を道とするなり、その條目幾許そや、分量に過ぎて大食するもあし、その人々の分量あるへし、殊に川家など放逸に物を喰ふこと曲事なり、道教經に食を受けて藥を服するか如くすべしと、食は飢を救はんかためなり、味を樂むことなかれとあるそ、天は高しと雖もそりかへりてありかず、地は厚しと雖も荒くふみならず、夜は寝ね晝は起さる、これ人の常なり、然るに朝寢晝寢態にすること、己をせめざる一條目なり、己に責めずは道はなきものと知るへし、一切のことに就て我身に樂みと思ふことは、みな道に叶はざる業とするも、人に安きことを與へ、我は難きことをする、食物もよき所をは人に勧め、あしき飯を我食する、これ皆己をせめて禮に復るの義なり、今時の人はまつ仕善きことを我して、善からざるものを人に與へ、食事もまつよきを我食したかよきと云ふ程に、道にかなふことは一もなきなり、適一人も道を好む人あれば笑ひ猪み倒さんとする、これ世人の意なり。一法華經八卷を箋どなし、阿彌陀經を腰箋にして若たりとも、其經のうち一句半偈の意旨にかなふや

うに、心をは持つましけれ、雨は降るども袋は着さりけり、地獄直走りと一休もいばれしとなり。
一それ地獄の説相多し、地の底由旬を重ねて在りと見えたり、然れども此等のしさいは得道の人此れを知るへし、由旬をかさねると云ふは其遠きことを云へるなり、遠きとは天堂と地獄との間なり、誠は地獄はわたる所有るへからず、一念相より見出したる地獄は、大山の麓、海岸の邊、或は荒野、或は深澤、一切所を定めず、刹那の間に獄相あらはれて、焦熱大焦熱、紅蓮大紅蓮、牛頭馬頭の羅刹の阿責に逢ふと思ひて叫喚大叫喚、又刹那の間に、朝日に霜の消ゆるか如くにしてなくなる無しと思へば又現す、かゝること念の間にと思へども、各一念に劫を経る如くなるは、その人の念あるに依てなり、衆生此苦を受くるを、佛を憐みて弘く方便を以て之を度せんすとす、昔一僧あり荒野のうちに俄に地獄の川を見る、驚きてこれを問へば、獄卒の云ふ、これはこれ玄砂の地獄なりと云ふ、玄砂とは、玄砂の備前師のことなり、玄砂は修行に出でんとて、親の障りになることを思ひ、親を舟に乗せ海に沈め、飯りて修行にいられし人なり。
一江口の女、普賢菩薩となりて、白雲に乗りて天に上ると云ふ、普賢女と云ふは普賢の反相なり、淫欲熾盛のもの、苦を助けんとて、女に化身し人の望みを叶へられたる、之を以て江口の謠に作れる歎、稽古略と云ふ書にて見たと覺ゆ、かさねて引見るへし、善導大師と云ふ此書にあり。

一物を辨ふはみち氣に依る、よくものを味ふに目を閉くと云は、則ちこれを辨ふ、尤も目を閉くと云は則ち精氣散する故に覺へず、物を味ひ知るとは目を閉きて分別せねば知られぬぞ、盲目の者よく覺ゆるも目を閉じて氣が散せざる故なり、古語に目を閉ちて蝸牛を食ふ酸澁苦と云ふも、目をこち能く蝸牛を味ひみれば、酸く澁き味があるとなり、委しく物を味ふは目をこちて心靜に味はねば知られぬぞ、一場とは當分のことぞ、其場と云ふ心ぞ、第一場など、云ふぞ、此句著語につかふぞ。

一木の枝垣壁のある方へさゝるは、草木之を知るやうなれども、知るにはあらず、草木南にあれば北にある壁もあたる氣か、つかへてよられざるにより、南へ傾きて北へ枝をさゝるなり、又南に垣壁などあればそれにあたる氣に追返されて、枝をさゝすして北へかたよるなり、垣壁と樹との間は空き所なれども、氣その間に塞りてあるなり、氣は人の目に見へぬものなれば何もなき様なり魚の水中にあるか如し、魚の一勢頭上腹の下左右みな水あれども、魚の目には水は見へぬなり、魚水を見ず、人空をみすと云へり、又譬へば小兒竹鐵炮と名けて、竹の筒に紙を咬みしたきて、玉となし、之を入れて、又あとより一つ重ねて紙のしたきを入れてつきやるとき、さきへ入れたる紙の玉へ、後の玉行届かぬさきに、はつしと鳴りてさきにゆくなり、これ前の玉と後の玉との間は空な

れども、その間に氣が充ちてある故に、此の如く萬の義理を工夫するに、初め淺く思ひたること正義にあらす、猶よく工夫して二重に正義を見立てるかよく合ふものなり、みな思ふは草木は心なしと雖も、垣壁のある方へは枝をさしぬ程に、草木も心なきにあらすと云へり、此義は尤もさうにあれども、枝をさしぬか心あるにてはな、氣にせかれてさしれざるなり、初めの義を取りて尤もなりと思へども、今一重思惟して見れば、草木も知らずして氣にせかれて枝をさしざるなり、万のこどをなすに何事かなされさることあらんやとて、無理になさんとすれども成さることあり、必ずならざる道理あるへし、此道理を見る人は止めてすまじきなり、その道理を見ざる人何事にも無理をするなり、壁垣の間に氣塞つて草木の枝のさしざるか如し、草木も知らずして枝をさしれざるなり、人の作す業も何故になされぬとも知らずしてなされぬこと事々あるへし、理を知る人は此事を止むへし、理を知らずして無理になさんとするは、草木に劣れる歟。

一世諦の方に始末なくして財寶を獲に費すもの、その行末必ず盜をす、然らざれば虚言を云ひ人を欺かして、人の財寶を取らんことを思ふ、これ穿窬の盜人にはあらす、されども同じくこれ盜人あり世諦に始末よきもの、我財寶を守りて失はざれば、自ら用に事をかゝす自用にことを缺かすして盜せんと思ふのはされなり、自用に事をかゝかたために危きことを忘れ、命の果んことをも顧みずし

て盜をす、然れば人は人の財を食らす、よく始末として自用の缺けざるやうにすべきことなり、人を食らすして我持つ財寶を守るものは、人のために害せらるゝこと多し。

一老釋の二門を宋儒之を異端と云ふ、然らざる歟、夫子の異端と云へるは、正しく老釋の二門にあらし、孔子のとき佛法未だ起らず、儒のさしりて成ることありし、孔子既し道を老子に問ふ、老子をも異端とは孔子宜ふにあらん、家語に曰く孔子南宮敬叔に謂ふて曰く、吾聞く老聃古に博く今を知り、禮樂の源に通し道徳の趣を明むるときは、則ち吾師なり、今將にゆかんとすと云々、此の如きの語を得て老子を異端と云はんや、只此言人の異端と云ふことを知らず乎、孔子の道釋を異端と云ふにあらし、三皇も既に道なり、我宋儒に問ふ、古今に明かにして、禮樂の源につふし、道徳をわきらむるの外に孔子の道ありや、林氏か四書正義に、三教正宗と號す、異端の事見へたり、異端とは道釋の二門を言ふにあらす、三教各異端あり、儒にして仁義の外に道を求むるものは儒の異端なり、道にして性を鍊り神を願ふ外に道々求むるものは道の異端なり、釋にして心を明かにして、性を受るの外道を求むるものは佛法の異端なりと云へり。

二百兩の黄金は惜まず、一飯をば輕んぜすとは如何と問ふ、人を救ひ人のためにす、黄金なんぞ惜からん、一飯輕しと雖も命をつくこと一飯に在り、豈輕んすへけん乎、古帝王の時に士食殘りの一飯

を溝に捨つ、王則ち士ヲ杖殺せらる、王の兄弟在りて云ふ、一飯を以て人に代ると云々、人は大なり一飯は輕し、然りと雖も後人の戒めとす、真に大ひなる哉、一人を殺して万人を助くるの理なり、百姓真に艱難をつくりて穀を得る、之を輕んぜは、何を重しとせんや、民は國の命なり、君子は腹心のことをくするぞ。

一楚王狩るとき、山跡に一人伏して起上からざるものあり、王之を問はせらる、此者答へて云ふ、飢人なり、王これに一飯を與ふ、飢人乃ち起去りて、其後隣國と戦ひにをよひ、敵軍より戈を逆にして戦ふものあり、何者ぞと問はせらるれば、楚山の飢人ありと云ふて戦ひ死したと、賊に命は義によつて輕しと云へり、此者戦ひ死したるか親切なり、吾主には忠あつて人には義あり、此者楚王の軍へ驅入りて與力したらは曲事なり、楚王一人を得たりとも勝利を得へからず、吾主のために兩心なく恩を知り、戈を逆にす、涙こゝに在るあり、人の命は黄金なり、輕からざる黄金の命をかるんして、重からざる一飯のために死す、真にこれ義を知るもの。

一垣を破り、藏の尻を切るばかりが盜にはあらず、道理に叶はざる物を衣、道理にかかはざるものを食ふもの皆盜なり、出家として道心なくしてよきものを着、よきものを食ふ、これ盜人の長吏なり、臣として君に忠節を存せずして肩に衣、口に食ふものは皆主君のものなり、これ亦盜人に似たり、數

年養はれて一度君の用に立つへき身を、行ひの義なく無養生して終に一度の用にもたず身を果さは、數年の給はる所の所領皆盜賊に同じかるへきなり、主親を持ちたらん人は我身を我身とせしめず、主親の身と思ふへし、主親の身と思はし、何ぞ我儘にして身を毀ひ、一度の用にたゞすして大事の身を捨つへけんや、數年の恩賞を一度報せんと思はし、食ひたきものも多く食ふへからず、飲みたきものも過すへからず、有りたき儘に身を持つへからず、身全からずは如何うして望みは違はへき、其望なくして徒に恩賞をうけて其祿を食ふは、盜人に異なるへからず、人たるもの之を耻ぢざらんや。

一因果歴然を知りて因果を亡すものは、教宗なり、因果歴然を見て因果にあらず、元因無ければ亡すへき果ありと見る、これ宗乘なり、怪きものを見て怪と爲されは、その怪自ら消ゆ、因果を見て因果とせざれば、因果自ら亡ふ、問ふ、これ斷滅にあらず乎、これ斷滅にあらず、佛の言を見ずや、顛倒夢想究竟涅槃、私に云ふ、因果を見て因果とせすと云ふ語を見て、凡そ人因果を破るときは、則ち因果に落つへきこと歴然なり、因果の境界一暗からずして至らせず、眼に因果無しと思はし、地獄に入らんこと矢の如き乎。

一達磨初めて禪ヲ作り出せるにあらず、若し達磨作り出せると云はし、邪法なるへし、所謂禪は佛の傳ふるところの法なり、佛に無量の諸佛をしとせとも、釋迦如來西天に出世し給ひてより慈尊下生す

てのわいたに、佛推出して申すは釋迦如來のことなり、餘の佛達は皆其名を呼びて、阿彌陀佛、藥師佛、多寶佛と申すなり、無名に佛と申すは釋迦と心得へきなり、遠處の立てるところの禪は如來藏裏の禪なり、蓋禪に多種あり、外道禪、凡夫禪、大乘禪、最上乘禪なり、圭峯宗が禪師の録の中に之を擧ぐと寶藏録に載せたり、うの語に云ふ、異計を帯ひ上を折ひ、下を取ふて、修するものは、これ外道禪なりと云々、上をねかうと云ふは、菩提を求むるを云ふへし、下を取ふと云ふは、煩惱をさらうを云ふへし、異計を帯るとは、佛の諸行の外に別行をはかるなり、此を以て禪とするは外道なり、一種一行にとふきなり、凡夫禪とは曰く、正に因果を信じ、又折厭を以て修するものはこれ凡夫禪なりと云々、正に因果を信すとは、上をねかひ下をいとふの義なり、煩惱は則ち法界の因果なり、煩惱を信する故に之を取ふなり、頓ふ自心を感じるときは則ち法界の因果を世々回りながら、因果にあらず、因果なきにあらず、因果ありながら、因果にあらずることを知らざる故に、まさに因果を信して折厭を以て修す、これ凡夫なり、頓に自心をさとれば、因果は因果にあらず、故に曰く、因として修すへきなく、果として成すへきなしと、此にをひて古今千錯万錯、採て因果なしと謂ふ、今日諸人灰如土面、これ因果にあらずして何ぞ、百丈既に誤りて五百生野狐の窟に入る今の參學の徒、之を誤り畢る。

一 哭くも笑ふもまた人面の變なり、常を失ふものなり、悲歎は他方より來りて内に感し外に現はるものなり、悲歎他方より來るとは、我子か他國に在りて死せりと告げ來るときは、悲み他方より來て耳にいり、内に感し人面之れかために哭す、我子他方にありて幸ひを得ると告げ來るときは、則ち歡ひ他方より來て耳に入り、内に感し人面之かために笑ひを合ひ、我にもと悲歎なし、他方より來る故に悲み盡き歡ひ盡るときは、則ち笑ひ去り哭き去りて面常に復るなり、人みな變を見て常を知らず、常を知るものはよく變に隨ふ、もし悲歎もと我に在らば、悲歎常にして絶ゆへからず、時ならずして來り、また時ならずして去るときは、則ち喜怒哀惡皆常なきなり、我心は常なり、聲へは鏡のごとく明なるときは則ち常なり、時にをひて影像の現はるはこれ常無きなり。

一 萬の所作に、上手と云ふは力を用ひざるなり、道理を得て作すことには力入らざるものなり、人の骨切ること、力にて切らば、如何なる刀も力に任せは切れなん、小力のものには人に切られてのみ果なん、力にもよらされはこそ、大力の人も小力のものに隨へられて果ぬれ、刀を用ひずして天下を取るも道あり、木竹玉石を磨くに、力を入れて推付くれば曾て磨かれず、手を輕ふしてうけていつとなく磨けば、高き所ひくくなり、低き所平かになれり、推付てきしれば只光彩のみ出來て、高き所は舊に依りて高く、低き所は舊に依りて低くして平等ならず、木賊と木竹の間ゆるかせなれば粉

となりて木竹の高き所落つるなり、推付ければ木賊と木竹の間緊密にして粉出づへきやうなし、うけて磨けば兩物の間に粉出つるなり、力を用ひずして事を調ふるなり、平胃散と云ふ藥は、枳殼を以て胃の高きをとり、白朮を以て胃の卑きをたすくるに依りて胃平かに成るとなり、木賊の強きは枳殼にたくらへ、人の手の柔和なるは白朮にたくらへなは、其物平らかになるへし、木賊の強きは又力を強くせば、高き所は其儘高く、卑き所其儘低くして、平等をなんぞ得んや。

一硯に墨を研るも同じ義なり、緊しく打付ければ墨却て出でず、墨と石との間ゆるかせなれば、墨粉となりて色濃かになるなり、さてにや諺に墨をば餓鬼にすらせよと云ふ、殊に強くすれば墨あらくして筆紙に泥す。

一馬によく駕す人、手綱に力を用ひず、鞍上に埋し待て、腰を以て馬を自由にやる、取れば馬止まらず、放せば馬却て止まる、馬と我と心あぐりて合ふこと、此道の眼とか。

一庖丁が牛を解く、其刀九年に一度磨きしとか、これ其力を以てせずして、刀を費さるる故なり。

一輪扁か輪を斲るは、ゆるやかならず、きひしからず、これを手に得て、これを心に應ず、口にも言ことあたはず、數ありてこれを存すと云へり、かく云ふは莊子天道の篇に云へり、桓公の堂上に書をよめり、輪扁と云ふ者は、車の輪作る人なり、彼の秘をすて墨をすて、堂に上りて桓公に問ふ

て曰く、公の讀む所のものは何ぞ、公曰く聖人の言なりと、扁か云ふ、聖人在りや、公の曰く、既に死せり、扁か云ふ、然らば君の讀む所のものは、古人の糟粕のみと、桓公の曰く、我書を讀む、輪人何ぞ是非すると、但その理あらは可なり、もしさなくは殺すへしと、扁か云ふ、我爲す所以を以て、君子の道をはかり見るに、輪をけつることゆるさときはくつろひて固からず、きひしときはしふつて入らず、されは徐からず疾からず、只これを手に得て心に應ず、その理は口にもいはれずその分數と、我心との其間にありて「我子にも教ゆることならず、子も受くへきやうなき道なり、故に七十になりて老いぬれども、我自らこれをつくる、古人も此道は傳ふへからずして死す、然るときは則ち君の讀む所の書は、古人の糟粕のみなりと云へり、今の書に残るところは古人の言なり、古人の言は酒の糟の如し、酒の糟の干したるを嘗めて酒の味は知りかたきなり、書をよく讀むものは多しと云へども、理を得るものはすくなし、故に今の世に聖人の書を講しあきらめて聖人に遠る。

玲瓏隨筆 卷之四

一偏に人を誇り偏に人を褒む、皆理にあらす、佛法は福智の二嚴あり、智を以て福をすて福を以て智を捨つ、皆相當らず、池寺の白翁か許に京師よりきたる僧あり、則ち欲深き坊主は居られさうかと問ふ、誰ぞと云へば徹翁のことなり、此言をきいて無欲を以て殊務とす、徹翁を誇るへからず、又偏に徹翁を讃めて白翁を誹るへからず、唯白翁を以て徹翁をうすくし、徹翁を以て白翁をあつくするときは、則ち其二つの中間に不薄不厚の道あるへし、白翁を以ては針の頭にて鐵を削ぐの費をを示し、徹翁を以ては泥多くして佛大なるの理を示して尤も可ならん乎、南陽は車を帝城に轟かし、懶融は芋を衡山に煨す、懶融は智を純らにし、南陽は福を傾く、偏に智を立てんと欲するときは則ち智に用なく、偏に福を修せんと欲するときは則ち用体を失す、もし用体の二つにをいて何をか尤も重しとせん、体をすつるときは則ち用あることなし、体あるときは則ち終に用なきこと能はず、然れば則ち体を以て尤も重しとするなり、智は体なり、福は用なり、又此にをひて曰く、池寺今日法

水涸る、靈山今日獨りいまた散せず、此旨如何、曰く、池寺の法水今日早く涸る、靈山のいまたさんせさるも亦終に盡に歸すへし、此にをいて若し体を失せば再ひ何ぞ起らん、達磨大師の曰く、我法三千年の後未だ一絲毫も移し易すと云ふ、これ其体に依りて言ふなり、達磨寺幾度か廢壞に及ぶ其体を立つるゆへに又起りて今に存す、或は廢壞して廢壞せざるの眼は又一道なり、混雜すへからざるなり。

一善く天を言ふものは必ず人を質す、よく人を言ふものは必ず天にもとづく、仙傳通 天と人と一なるか故に、天を以て人をたしせは遠ふことなし、よく人を言ふものは天にもとづく、これ又天と人と一なるかゆへなり、人天に随ふときは則ち人立つ、天に逆ふときは則ち人亡ふ。

一如法作なるへし、殊勝作なるへからず、如法とは佛祖の威儀なり、衣を着け袈裟を被り、その容を造る、これ度生の化裝にして形に在るものなり、殊勝は心より生ず、もし殊勝つくるへくんは血氣の煩悩なり、人家の男女を誑すに似たり、殊勝は求めずして自ら至るとも云へり、解行證の三徳圓備の人はさもあらはわれ、自然にして行跡道に叶ふものは人これを見て殊勝といふ自ら造るにあらざるなり。

一若し欲をはなれんことを要せば、人の物を受くるに多かるへからず、多くうくるときは則ち欲いよ

くふかし、管へは絹をそめるが如し、そめるに随つて其色いよくふかし、凡寶藏庫に滿るに隨ひて欲いよくふかし、一藏滿つるときは則ち又一藏を造る、藏の足ることなきに至る、財すくなき人は深く惜むの心なきなり。

一法師の弟子を取ること暫年を賜食と稱し、或は小僧沙彌と作る、養育して以て大僧と爲す、而して後遍參行脚して定まれる師なし、自ら工夫座禪して得ることあれば則ち見解を呈す、其呈せる所の見事道に契ふときは則ち某師一言の印を以てす、即ち拜して以て師とす、故に定れる師なし、業をうくるの師を以て法の師とせず、其徧歴の間に幾許多くの艱苦を経、野に暮し山に明し、露食風殞し、都て道の爲にするものなり、此の如き豈道心ならん乎、近來まで暫年の沙彌にして、愛育せられ、左右を離れず、絹綿を厚くし、飲食を豊にして艱苦を知らず、偏に髮を削るの俗見なり其師彼を愛育すること恰も老婆の孫を養ふか如し、其後此者の修行と稱し、丁單に一枚の印可の狀を書きてこれを授け、終に門を出でず、目のあたり堂頭和尚と成る、此の如きときは則ち寒寒の道心なきも亦宜かり、法道衰へしより皆此の如し、我れ山の先哲皆他方より入來る、法を我山に求め開山より初め徹翁言外、華叟、美叟、春浦、實傳、古岳、大林、笑嶺、春屋、古溪、他流の諸老宿にをひても亦皆此のことし、只先規に復して修行艱難を経る底の人を擇んでこれに印す、則ち道復

すへきなり

一秋の夜の寝覺につくくと思ひ出づることのみ多かる中に、鬼の字をそにと訓したることを思ひわたりて、面白く覺へぬ、鬼は歸なりと字訓を下したれば、かへるがをにあり、萬の訓點皆をにかへる、鬼を歸なりと云ふは、本へ歸ると云ふ心に用ゆ、又こちへ生れて歸ると云ふ義なり、鬼は屈なりと字注を下したれば、死して行は魂不行して屈してこちへ皈る義なり、屈せしめて行けば伸びて神なり、神は伸なりと字訓あり、屈して伸びざるゆへ鬼なり。

一老後に万事を忘却するもの常なり、然りと雖も壯年の昔の久しきことは忘れず、蓋其遠きを記して近きを忘るゝはいかん、曰く、根性正しきときは心に受くるもの忘れず、老後精薄く神散して心主正しからず、故に前を忘れ後を失ふ、恰も硬木に文字を彫りて其文字久しく泯れさるか如く、又柏木に文字を彫るときは則ち今彫り今泯るゝか如し、古尊宿の云ふ、老人前後を忘却す、魂既に後生の所に趣くゆへなりと云々、最も理屈なり、こゝに無きときは則ち彼處にあるへし。

一老人夜眠らずして晝却つてねむる、これ何の道理ぞや、曰く、老人は氣行らず故に氣行の度晝を以て夜とし、夜を以て晝とす、此の故に夜睡らずして晝ねむるなり、老人は胡麻を以て其藥とす、恰も車に苜蓿すか如し、麻油を喫してよく氣道を滑にして以て氣を巡らさしむ、老人は何としてか氣

行進まざる乎、曰く、老人の皮膚を摩て又壯人の皮膚をなて、知るべきなり、内の筋肉も亦外の皮膚と相應す、腹中に榘牙腹中にさわりあることを榘牙といふを生ずるか如し、氣行す、まざるも亦宜なり、車の石に碍りて碌々たるか如きなり。

一老人身を忘れて鞍馬の花を見るへく東山へゆくへしと云ふ、徒弟はこれを留むと雖も點頭せず、類にこれを促す、其徒弟如何ともすること無く、強ひてこれに應ず、異滅の相きたり、前を忘れ後を失す、此時の形よしなし、人に見られて自らこれを顧す轉た小兒のごとし、其故いかん、曰く、老倒常諦みな忘れて壯年のときの思ひあり、壯年のとき鞍馬の花を見、東山西嶺の春色を見て、顔を怡はしめ、其思ひ不圖方寸の間より出て、身を忘れ覺えずしてこれを催す、實に老をわするること然り、徒弟之を留るときは則ち老人の云ふ、花を見て機を愛す愧るところなし、我を留むるは不思議なり、世人皆花を見て機をぬいすそれ我を奈何するぞ、吁昔人常に壯年ならず終に老と成る、壯年を以て深く之を思ふへし、又昔之を思ふと雖も其思ひと共にこの老の致す所を失す、これを奈何せん汗顔々々、凡老人は今の事をわする、と雖もよく古のことを記す、然るときは則ち壯年の時より老後の愧を思ふときは、則ち老に至り此愧遠るべき乎、至人は老に及んで猶みたれざるか如きなり。

一歳六十に及ぶもの、熱病によつて謔言妄語して謳歌を唱ふ、此歌このもの十四五歳のとき世俗の歌ふ所のうたなり、今を忘れよく古を記すること必せり、今の我を忘るゆへに謔語す、よく古を記するゆへに古風を唱ふるものなり、今の世俗唱ふる所の謳歌之を唱へして古の謳歌を唱ふ、これ又病ひよ依りて以て心みたるにあらす、只老の今をわする、所は古を記するの故なり。

一老後爪髪長しやすし、こ、を以て知る、陽氣よく物を生ず、陽にあらすして物を生ずることわたはす、人年老ひれば陰缺け陽専らなり、故に爪髪長しやすし。

一天地の間に生ずるもの、有情非情その數限りなし、限りなきの數を以て一々かきりなきの理を盡さんと欲するときは、則ち道理をさわめ知りかたし、只一を以てよくさわめ知るときは、則ちその理當然として百千のもの皆明むべきなり、然るを群書に廣く涉り、多く古人の詞を知るを以て博學多聞の名をもとむる故に上を凌ぐ心日々増長して脚下の理を見ず、一を忘れ以て百千を凌ぐ、寔に疾く走るもの遠きをしのぎ脚下を見ずして躓蹉くか如くなり。

一万人多しと雖も一身を以てさわめ知るときは、則ち世界の人みな我と同じきなり。

一身心を知らずして佛心を知らんと欲し、神慮を知らんと欲し、上を知らんと欲し、下を知らんと欲す、皆知ることを得かたきなり、孔子の玉はく、いまた生を知らず焉と死を知らんと云へる、みな

人我を知らずして鬼神を知らんと欲す、孔子若し在さは、當に身を知らずして焉そ鬼神を知らんやとの玉ふへし。

一衆木多しと雖も、一木を取りきはめ知るときは、則ちその理萬木みな同じきなり。

一粟或は柿、此木いつくより生ず、天地開闢のとき初めて天地中和の氣感して、種なくして天理により生ずるかその先も亦粟の實ありて生ずるか、此道理あきらかなるときは、則ち萬木千草造化生々の理みな知るべきなり。

一それ人七兆零七萬零のさき、父母なくして天地中和の氣感して、人天理に依りて以て生ずる歟、其先も亦父母ありて子を生み、其子次第にうみて以て今の我に至る歟、よく此道理を明むるときは、則ち一切の衆生初めなきの論漸くみな知るへけんや、草木は偏に氣なり故に非情なり、人は心と中有に稟くるゆへに有情なり、もし中有に因らすんは其人々として人たらず、只豆腐麥蕪たるへき乎、鳥は卵を破り、即ち水鳥はよく遊ぎ、雞は自ら雞の風情あり、水鳥のよく遊ぶ、家雞の風情偏に心に屬して形に屬せず、形は内に成り心は外より入る、人の形の如きは父母内に造り、子の心は外より入る、一切の有情として違ふことなし、これに依りて畜類と雖も好心悪心の異なるあり、形は父母に似て心は父母に似す以てこれを知るへし、七兆零七萬零道といへども昨今の如し、百年千年も

た然り、萬年億年もまた然り、經歷するときは則ち其數豈これを盡さんらん乎、天地の一周は太周小周皆同じ、天は手に始り亥に終る、一晝夜と七兆七萬と豈別ならんや。

一人は馬を生せし、馬は人を生せず、互にして相生せず、凡定まれる理あり、これ一類相續の毒繩なり、人馬を生み、又馬人を生むとき、非常にして物の變なり、これを見れば常あるにあらず、これ一念の變相なり、人臥して槐安國に入りて蟻と婚姻をなす。

一人は無念の時を知り、念起るの後を知らず、古人の曰く一念の起るこれ病、繼がさればこれ業と云々、道理を説明むるときは則ち繼ぐもまた病なし、つがされば猶病なきなり。

一人は皆毒を食して病を起す、醫人は同じく毒を食して病を起さず、よく本を知るゆへなり。

一人は毒を食するは理を知らざるか故なり、砒備人を殺すと雖も理に當りて用ふるるときは則ち病人を治す、瘡を切るを言ふなり、中を得るときは則ち醒醐も亦毒と成る、中を得れば毒も毒ならず。一仁義禮智信、人の常にして缺くへからざるものなり、君臣父子夫婦は人の三の綱なり、離るへからざるものなり。

一心は三世心、また佛心、菩薩心、聲聞心、緣覺心、六凡心その辨一法界なり、譬は氷雪霜の如し、解

くるときは則ちこれ水の影なり、氷雪のとき氷雪の相と見る、解るときは水の相と見る、これ二種の眼なり、氷雪のとき即ち氷を離れず、人々皆思へり、人死して虚空となる、雪や氷と隔つらん、ちやなど、易々と心得るはあかしきことなり。

一物の音はたゞ一つなり、糸によれば糸の音を異ふし、竹によれば竹の音を異にす、一つの音を止むれば之を糸の音とも云ひがたく、之を竹の音とも云ひがたし、その一つの音は如何なる音ぞ、いかんか聞得ん、ものを離れたる音はこれよと聞くべき、此一つの音を聞得る人を音を知ると云ふへい糸の音を誰か聞かざらん、竹の音を誰かさざらん、三歳の孩兒も聞くことを得たり、物の外の音を聞かん人又萬の音を知るへい。

一何ことも古人の仕初めたることを、今は移してするさへかたし、未だならぬに仕出したるは淺からさることなり、その仕出したる心は叶ふことは、萬づに工夫ふかき人ならでは古の人の心に通ずまじきをや、何ことをするとも其事を仕出したる人の心に通せば、一つ業萬つの業に渡るへい、されは世の話にも一道の達者萬事にわたると申なり。

一次第々に人の詞も調へもてゆけば好悪を知り、斯く言ふたるは悪し、鬼云ふたるはまされりと調へるほどに、次第に言葉に花咲きにけり、庭の梢の花のつぼみ開くも同じ、此花にたかふこと有る

へからず、人生れ出て三つ四つに成りて云ふことを聞くも、神代の歌のことし、次第に成人するほど能くかひつゝろひて聞ゆるは、末の世の歌のことし、何につきては始中終同じことなるへい。

一人の心の比興さぞ顯れける、萬の道具を見るに價輕くして其器はむさくとして異國唐物のやうに相似てめつらしく、置いてはまた取上げくしてやさしき物あり、これを置く時ちなして家に入れ其用ふるときあらくさはらず、收むるときよく拭ひたしむならば、百年も持つへし、然るを石瓦の如くに用るまゝに頓て破損して其跡かたもあし、又此器價重くは八重十重につゝみて、容易に人も見せじとせん、然れば物の悪きにもよらず、我目に入る入らざるにもよらず、あたひの輕重によりて秘藏すと覺へたり、縦合價は輕くともその物のあいらしく宜しきは、價に掛はす愛すへきを人の心の比興さぞ口惜きことなり。

一目近きことを知らずとて人を耻かしむへきにあらず、希しきこと一句知りたりとて人を高く見るへきにもあらず、朝夕左右にある書の内の一語半句も心を留めずして、何にかあるそととることは智者の上にもあるへし、小僧喝食にこれはうれゝの書にありと云はれて、一笑を發すること僅多し、又寡聞淺知の人も珍しき書を取てこれを見て、其内の一句半句を心に留むることはあるへし、之を知りたりとて博學多聞の人とは云ひかたし、記誦の學とて物をよくよみ覺へてこれはなにの語、こ

ればなにの語とやらに之を云ふ人あれども、其理には通したかし、然れば人に物の道理を問はれて忙然として左右を見る、其理は其人の記誦の中にありと雖も其記誦の語すへて空しきか如し、廬山に在るもそれは廬山の面白さを知らず、西湖に在りて西湖の美景を知らず、皆これ外より見て其面目を知り其美景を愛す、譬へば湖の上に扁舟を浮へて、朝日を迎へ夕陽を送り、其舟其人自らこれ佳景なることを知らず、遠く之を見て湖水の一角とす、記誦の外に妙理を知る尤も大切なり、故に古人の曰く、記誦の學は人の師とするにたらざるなり。

一法華にも譬喩品があるぞ、人を教化するには譬喩が専らのもなり、よく譬へを取るは理路通達の人なり、如何なる愚痴のものも譬へを以て人を教ふれば、草木の花にてもあれ、鳥獸の姿にてもあれ、詞にてはそれと心得かたきものなり、之を繪に寫して見すれば其適合點するか如し、これにつきても耳目の及ぶ所は知りやすきものなり、耳目の及ばざる所に變化神通あることは知りかたし、之を知るは理路活達の人なり、人生すれば形を見てありと思ひ、人死すれば死してなきと思ふ、此生死は耳目の及ぶ處有無の二つなり、三歳の孩兒も見て之を知る、生前死後に際りなくなることを知らず、之を知らずして只耳目の及ぶ所ばかりを知りて、我は道理を知りたりと思ふは三歳の孩兒に同じ。

一士農工商の四民のうち農夫尤も心清し、其人柄を以て云へば士尤も清くして、工これに次ぎ、商之につくへし、如何にして農夫の心尤も清きとは云ふべきぞなれば、只ありの徳の質にて身を飾ることなく上古質朴に均しければ世に蹈ふことなく、井を堀りて飲むも田を耕して食ふも、然もその飯精一からず、多くは官に貢きして其餘を食へども、足ることを知るものは農夫なり、士は士の本意を失ひ、工商は工商の本意を失ふ、其身をたかふり衣食住を結搆にするか故や、其分に財足らず財足らざるゆへに世に蹈ひ偽り構へて心底の穢れたること士民に劣れり、士や工や商や、士民の意に愧さらん乎、予唯之を思ふ、外清きものは内汚る、上古は内清くして外を見ず、鎗に不淨を包むは今の世の人なりと云へば、世人の云ふ、いかに心清しとても士民の質にては人たるへからずと云ふ、予曰く、伏羲神農は木の葉を綴り木の皮を冠りぬれど、一天四海の王たり、豈之を人にあらずと謂はん乎、又久しく家を保ちて累世に及ぶものも農夫なり、今の世を見るに士の家も久しく保たず、工商富りと雖も三代に傳へ難く、農夫は質素を事とし華飾ならざる故に、賦歛厚ふして凌飢ると雖も官の糟粕を食ひ、其歳を過すときは則ち又來歲の糧は勸率にあり、世々に傳へて此の如し故に家を累ぬるものは農夫なり。

一人みち富言と云ふことを憶に心得ず、道理のものに寓し或は人に寓して云ふなり、道理なきときは

則ち寓言これ何の得る所ぞ、道理を述べんかために物に寓して之を言ふなり、寓する所の理を取る
 ときは則ち寓言皆實なり、孔子今又生れての玉ふとも、道理なきときは則ち取るどころなし。
 一 出家を慈芻と云ふは慈芻草と云ふ草かあるぞ、慈芻はやわらかなる草にて彼方へも此方へもかやる
 やうに靡く草なり、出家は物にかまはぬか本なる故に慈芻にたとへたぞ、教者には慈芻とよむぞ、禪
 家には慈芻とよむぞ。

一 百味圃と云ひ又混沌圃と云ふは、鉄雨は藥味の厚薄により、藥氣の緩急により、藥性の強弱により
 て少し多寡の分別あるへし、論に曰く、衆方を以て之を治るに衆病之理るは當然なり、一方を以て
 衆病を治るは何の謂ひを乎、曰く、これ天に本くなり、百味を和して一藥となし、以て一藥の功を取
 る、これ天に本くの謂ひあり、それ天は一氣にしてよく品物を生成す、蓋一氣とは地の、草木の蒸す
 る所、衆合して一氣の衆蒸とは地の萬物なり、地の萬物は凡一切の形あるものは皆地なり、勝けて
 道ふへからず、某の物草木も亦氣を發し、魚龍も亦氣を吐き、禽獸甲介も亦氣を吐く、山川水澤一
 切の氣蒸する所合して一氣なり、この一氣また生物を生長するものなり、形は地なり、陰なり、氣
 は天なり、陽なり、陰は陽より出て、陽は陰よりいてす、二つにして一つあり、氣は形より出て形は
 氣に因りて化す、然るときは則ち此氣は一氣にして衆蒸す、衆蒸して一氣なり、今百味圃の方を製

し天に本くと謂ふものはこれあり、百味のうち草木あり、丹石あり、羽毛甲介あり、寒あり、熱あ
 り、緩あり、急あり、昇あり、降あり、一方の内萬物あり、萬物の氣蒸して一藥の功なり、一方に
 して百物、百物にして一方、一方にして百方、百方にして一方なり、一氣品物を生し、一方百病を
 治す、豈理の當然ならず乎、藥は醫するときは則ち應に之を發すへし、血滯ふるときは則ち應に之
 を散すへし、痰塞るときは則ち應に之を通すへし、下に在るものは應に之を昇すへし、上にあるも
 のは應に之を降すへし、氣其處にあつまる故に必ずうち結す、此藥氣を以てよろしく引きて順ふへ
 し、夫惟れば病は偏より來り、正に従ふて去る、七情は内傷のやまひ、憂思悲恐等皆結するなり、氣
 一處にあつまりて偏によりて疾生す、正に従ふときは則ち漸ゆ、喜怒驚等は散なり、散するときは
 則ち氣少し、少きときは則ち巡らず、巡らざるときは則ち又氣の偏なり、氣多少の分限によらず、巡
 りて以て復生す、四氣外感の疾も亦此のことし、風寒暑濕熱皆これ天なり、蓋天これ行ること偏な
 らず、もし偏に行り夏冷かるときは則ち万物焦枯せす、冬暖かるときは則ち万物凍損せす、春
 温夏熱秋涼冬寒並に寒熱温涼以て行き、一歲品物達するなり、天は偏なしと雖も又自ら偏をうくる
 なり、人常に家舎に在るものは、寒暑ともにこれに中ること淺しと雖も、其感することこれ深し、常
 に家舎に離れて行動するものは、そのこれにおたること深しと雖も、これに感すること淺し、其人

の相應に過るときは皆偏なり、能く温かに能熱くよく涼しく寒きときは則疾なし、偏温偏寒偏涼偏熱にして病を生ず、この病能くこのくすり能く熱し、よく寒し、よく涼しく、よく温かに、よく昇り、よく降り、よく散し、よく聚り、よく緩く、よく急き、よく否に、よく泰、兼て一方にあり、或人の曰く、此方寒温涼熱をかゆるものなり、もし寒病に與へて以て熱せしめんと欲するときは、則ち寒藥あり之を遮るへし、若し熱病にわたへ、以て涼ならしめんと欲するときは、即ち熱藥ありこれを遮るへし、補せんと欲するときは、則ち瀉劑あり、以てこれを遮るへし、瀉せんと欲するときは、則ち補劑あり、以てこれを遮るへし、これを爲ること如何、答て曰く此の問ひのときは只單方を用るか如し、或ひは五味七味の方々のときは、また病ひに宜しく、衆病によろしからず、夫混沌丸のときは、一方に衆病を兼、猶一氣萬物を化生するかごとく、義を天道に譲るのみ。

一東來の呂氏曰く、所謂無事と云ふは、事をすつるに非るなり、但これを視ること、夙に起さるる疾飢て食し、渴して飲す、終日これを爲ごと、いまた答て爲さるかこととなり。真西山心經に出つ

一當念無念前後際斷と云ふこと、工夫すへし。

一親の讐をは伐すして叶はざるものなり、親の讐と同じく天を戴かすと云へり、天理已に此のことしと大學衍義に記せり、木剋土と土土にかては又土の子の金、我親の讐討たんとて金剋木と金木にか

つ、然れば又木の子の火親の讐討たんとて、火剋金、火金にかつ、然れば又金の子の水、親の讐討たんとて水剋火と水火にかつ、然れば又火の子の土、親の讐討たんとて土剋水と土水にかつ、五行此理備はれり、人倫これを思はざらん乎。

一唐玄宗の時法を置けり、人として人を殺すときは、則ち其子又其人をころす、其人の子又これを殺す、其子又其人を殺すときは則ち百世も人を殺して事絶えす、只親の讐討つものには官より之をころすへし、親の讐討つへからすと云々、後又此法を評して云ふ、親の讐殺すへからざるときは則ち人の人を殺すこと日々夜々長そへし、人人を殺すときは則ち子ありて必ずその人を殺す、然らば人の人を殺すこと止むへし、人を殺すときは則ち必ず我身を失ふ、人として身を惜ますと云ふことなし、身を惜むときは則ち人を殺すこと止むへし、玄宗の法立たす親の讐今にをひてこれを伐つ。禮曲禮に曰く、父の讐共に與に天を戴かす

一それ宅に戸あり、障子あり、四壁あり、之を去るときは則ち管に柱礎損じて遮障をし、遮障なきときは則ち天地と一枚なり、身宅の戸障十四壁を去るときは則ち我性と天地と通す、これを神明と謂ふなり、人として直に神明に至るもの之を聖人と謂ふ、悦はしからずや、心は神明の舍なり、外宅の戸障子擁塞するときは則ち神明一時に暗くして神明ならず、一切の理皆塞かりて通せず、万事所爲

皆道にあらず、これを凡夫と謂ふなり、曰く、何ぞか戸障子と謂ふ、曰く、身宅に六門あり、戸障子を備ふ、六門とは眼耳鼻舌心意なり、六門とは即ち六根なり、何を以て之を戸障子と謂ふ、曰く門あるに依りて戸障子の名をたつ、實は門即ち障子々々即ち門なり、眼に見て憎愛親疎耳に聞きて好惡取捨あり六處皆此の如し、神處憎愛親疎なく好惡取捨なし、憎愛好惡なき處に在りて親疎取捨を生ずるときは、則ち神明に蔽はれて一時にくらし、神明と天と隔障するときは則ち憎愛好惡を以て戸障子とす、この戸障子六門に在り、此戸障子を去るときは則ち神明獨り顯はる、天地一枚にしてこの身を破らすして天地に參はり、此身ぞんじて此身に非ず、四大分離せしめて四大にあらず、即ち之を天真獨朗と謂ふ。

一或人水の源を問ふ、答へて曰く、山なり、又問ふ、山水も亦源あるへし、山水の源はまた何ぞ乎、答へて曰く、海なり、海水五行の火に蒸されて上りて雨露霜雪と成り、山に屬し谷に下り河に屬して下入し、再ひ本に歸するものなり、問ふ、水は卑につくを天に升るとはいかん、答へて曰く、氣は常に升降す、氣につきて昇り氣につきて降る、況や又火蒸して升るを乎、人の身に逆上なり、痰氣激して上るの謂ひなり。

一譽れを求むるはいやなり、求めずして譽れあるこそあらまほしきことあり、然れども求めずして譽

れあることを得ざるよりは、求めども譽れあるは好し、万世其始に求めずして至ることは難し、求めて後求めずして至るを人求めずして至ると云へり、何れの道も初めは求むるなり、功積りて後求めずして至るものなり、人の人を譽るものは道あるを以て之を譽む、然れば譽れを求むることは道あらんことを求むるの謂ひなり、道あらんことを求むるは嫌ふへからず、但名の爲にして實なきは不可なり、學位無學位と云ふことあり、絶學して無學に至る、無學は向上なり、之を學ぶの功積りて無學にいたる、功を積んで無功にいたる、功を求むることを積りて求むること無きに至るものなり。

一酒後に紅柿を多く食すれば甚だ酔て正儀を失ふと、傍なる人曰く、柿は酔を醒すところ云へ、柿にて酔ふとは心得すと云へり、曰く、諸薬ともに之を用ゆるに時あり、時を得るときは則ち藥却つて毒と成る、其時を得るときは則ち毒も亦却つて藥となる、寒は熱に勝つと雖も時を得るときは則ち却つて熱を助けて人をして熱殺せしむ、蓋酒を飲むこと數盃にして酒胃に在りて未だ順ならざるとき、柿を食すること數顆なるときは、則ち其酒を覆留して酒氣順ならず、胃中に留りて悶絶す酒後紅柿を食へば心痛するも亦これに譬ふるなり、酒漸く半醒に至りて咽口乾きて渴を思ふときは、熱柿を喫するときは則ち端的に醒め肺渴を治す、人間の万般共に時を得るときは則ち作すこと莫れ

時を得ずんは言ふこと莫れ、時を得ずんは敵を責むること勿れ、城を落せこと勿れ、人を疎むること勿れ、人を成すこと勿れ、人を敗ること勿れ。

一 邪堯夫か曰く、物皆數ありと云々、數を知る者は數を惜む、數を惜むものは久しく保つ、數を惜ざる者は早く喪ふ、早く喪ふるものは逆にして苦あり、久しく保つものは順にして苦無し、生も亦數なり、數にあらざるるときは則ち生せず、死も亦數なり、數にあらざるるときは則ち死せず、太古の人は能く數を惜む、故に百歳を越ゆ、況んや又重百彭祖の徒を乎、行ひ匆忙なるときは則ち數期に先たつて盡き、行ひ安靜なるときは則ち數期を以てつくる、期を以て數を盡す、人は死するに苦無く期に先たち數を盡すものは死するに苦を重ぬ、譬へば瓜蒂のことし、よく熟して後之を取るときは則ち蒂自ら落つ、未だ熟せずして早く之を取るときは則ち握るとも亦墜ちす、終に味を損するものこれ數を盡さしればなり。

一人の一日を送るは人の命數を減する寸々なり、一日を送るときは則ち一寸を減す、二日を送るときは則ち二寸を減す、屠る所に赴く羊の歩々死地に近くが如く、今の命緒の寸を盡すこと太だ速なり寸を以て算ふるときは則ち十度にして尺を盡す、尺を以て算ふるときは則ち十度にして丈をつくす此の如くなるときは則ち命緒急につき死地に至ること甚だ速なり、蓋寸を以て算ふるものは少欲少

食少酒なり、尺を以て算ふるものは過欲過食過酒なり、是や皆物に數あり、數を惜むべきなり、人の徳も亦數なり、徳にはかに輝く人は必ず其未短し、徳を惜みて廣大ならざる人は必ず其徳永く傳ふ、廣大ならんと欲するときは則ち後昆必ず微少なり、先師常に云へり、徳を見孫に遺すは、衣を温にせず、食を厚ふせざるなり、今日の我情なを小徳あるものこれ先師の餘なり、文王三年の命を以て武王に譲るも亦これ乎。

一人は氣を以て武勇もしたるものなり、意旨の強きと云ふも氣なり、氣の衰へたる時撓ざるは道ある人なり、多分の人は氣盛なるゆへ物を破り、浮世をも何も思はざるなり、死近くなる時は平生と皆變はるなり、曉き方つ懶くなる心ある心を付ける處なり、曉きは物靜にして心細くなるものなり。一 今の人を見るに伶俐にして却つて伶俐にあらす、氣志に勝つて驕くものなり、驕くもの越るものは氣これなり、氣行く所に向つて急にして左右を見ず、故に一策書を見るも雖も眼一所に在りて一策の書に涉らす、一策の書中の一條目をあけて早 越 人に向ひてこれを説話す、其説正儀にあらす靜に彼の一策の書を見るときは則ち策中の正儀明白なり、一條目に着きて早く義を立、廣く策中を見ずして唯一條目に就きて義を取んと欲す、故に己か見を出すも云々、これ正儀に背く、今の人一 件を見るときは則ち一件に急にし、二件を見るときは則ち二件を急にするなり、志を持つ所なり、志

を持つときは則ち氣走らす、心靜にして前後左右心の涉らざる所なし、今の人何として然る乎、思ふにこれも亦時なり、古は大智の人多し、故に小智のものは小事を知り、人に向ひて之を言ふこと能はず、之を言ふことあたわるときは則ち笑具と成る、今大智の人出でず、故に一事を知るときは則ち早く一事を説く、之を聞きて無智の人之を信じて知識とす、其人後生と雖も智見高くし先世に恐ることなし、日の光り今季世と雖も猶叢林を歴て多く人に交りて切瑛を受けるものは然らざるなり。

一 惠能師と神秀と同時の祖にして、神秀は山の第一座なり、然りと雖も見解能師に勝らす、假令見解まさらすと雖も何と懸隔ならん、然りと雖も亦此の如し、其袿衣鉢に在り、神秀身は菩提樹の如くの句あり、則ち能師菩提もと樹にあらざるの句あり、神秀の曰く、臥輪伎倆あり、能師又曰く、惠能伎倆なし、今世の初學、之を聞きて之を誦すれば箇々點頭す、今世の初學早く知る、而も古の神秀此間に於て什麼となして意を得ず、又今世の初學二師の見解を判斷して口吧吧なり、古の神秀什麼としてか今初學に料理せられん、神秀今の初學に及ばざるときは五祖さんの第一座となし去る、今の初學神秀を以て泥の如く看、魂の如く視て直以一錢ならずとす、今の初學と神秀と高低又如何、神秀能祖 勝らすと雖も五祖の法を嗣き一方の宗主とす、初學の人神秀すら尙之々欺く、況んや今世

知識と稱する人に於てをや、禮も亦なさず、紫野養莫利尙、殿裏にて佛に向ひて曰く、蠟々たる萬徳尊、秋水家々の月、彼れ此出家兒、禮も亦缺くへからすと云々、若し此意を以て世上にあて、禮世亂れんや、今の初學の人兩祖の間を見る、其眼二偏に在るのみ、五祖衆心によりて神秀長く一方の宗主の爲さるるなり。

一 今の初學の人録を讀み傳を見て、即ち一見に其祖を見盡す、甚だ奇怪なり、下を見るだに猶難し、況んや上を見る乎、糜乳子塔は數仞と道ふことを見ず、古の祖塔は吾儕窺ひかたし、肯人一道祖傳をよむときは、則ち早く其祖師を知りて説話すること水晶を隔て、物を見るか如し、其説話一々若し尙世は今の説者古の祖と同器同水あり、實に此の如きときは則ち遠く古を慕はんよりは、直に今の人を信せんふは如かざるなり。

一 前業により心快瀾にして財を惜むの心なき人あり、外に播すこと多きときは則ち内に費少からず、内乏しき時は求めすと云ふことなし、求むることを得ざるときは則ち貪らすと云ふことなし、之を貪りて用脚猶未だ足らず、猶未だ足らざるときは則ち必ず耻を顯はす、これを念ふへしこれを念ふへし、これを念はざるときは則ち曾己か一生不自由を得るのみにあらず、未來の世にをひて必ず己か如きものを引出して己か今生の不自由を得るか如くす、彼の別人をして不自由ならしむ、これ己か

罪にあらす乎、佛之を思ひ給ふ故に今日の人を教化して未來の人をして安んせしむ、故に曰く、佛法はこれ三世の治とばこれなり。

一財我家に入るときは則ち之を盡す、以て外に播し明日の不自由を營せず、此の如き人はよく自己を用ひ得て、有るときは則ちあるに任せ、無きときは則ち其無きを苦まず、食常に藜藿のあつものあつて厚味を思はず、衣は一布百結も亦苦とせず、播して外を思ひ貯へて内に取らず、此の如き人は上の章の心に異なり、此の如き人は万人の中に於て一人あるへからず、若し万人に一人あるときは則ち十万人にをひて十人あり、百万人にをひて百人なり、今六十餘州にをひて世件の人百人を得ん乎。

一今の世に生れたるものを何事につきても、教へて善道にやらんとするに少しも善に移らず、百日教化しても只本の物にてあるを思へば、佛法は早や世になきよと思はれて穢し、教化と云ふこと立たずんば佛は何事にか世に出て説法利生あるへきそや、佛在世には教も立て悪人も善に移らん、今の世それに引かへたるは末法の驗なり、法既に無からんば世は皆外法なり、外法は自然と立つ、万事自然にして鷲は晒さるるに白く、鴉は染めざるに黒く、皆自然の様と云へり、人の教化して悪人變して善とならざれば彼の鷲鴉の如し、然るによりて思ふ、法滅して外法となれば、皆自然に歸す

るかど疑ふ、然るに又教化と云ふ、佛の教に限らず、孔子の道教化専らなり、悪人を教へて善人となさしめは自然とは云はれず、己か修因に依りて悪人も善人となるなれば、人の仕業によりて皆移りやすければ、自然の道とも云はれず、教と云ふこと立たざれば聖人の法消えて跡なし、聖人の法なければ自然なり、如何となれば悪人は悪人のまゝ、偶ある善人も教なき世ならは唯自然の善人なり、然れば佛法あるときは自然の道消失す、世の孔聖の道も教化立つときは則ち自然とは云はれず聖道すたれたるとき世は皆自然の姿なり、然るを心得ざる人、佛法は因縁なりと云ひ二教は自然なりと云ふ、否我は三教ともに聖教絶えたるるとき自然に歸す、三教ともに教立つときは則ち自然にあらず、孔子は生知安行天の縦せる探聖なりと云へども、これは外より嘆美して云へる言なり、孔子自ら云へるは十有五にして學に志し、三十にして立つ、四十にして惑はず、五十にして天命を知る六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に従へども矩を越へずとなり、然れば孔子も修因にして成れる聖人なり、自然の聖人にはあらず、如何にして物ごとを自然とは云へるそや、鷲の白きも鷲と云ふもの、其始めの始を求めしらは、彼か心に白からん故ありて白きにや有らん、鴉の黒きも其始めの始めを求めしらは、彼か心に黒からん故ありて黒きにや有らん、無始の無明と云ふことを知らず、人はかゝる委しきことは知るまじきなり、鷲鴉も無始無明より成り來れるなり。

一法はるれ鬪くへからず、鬪くへきは法にあらす、法はそれ断すへからず、断すへきは法に非ず、遠
 磨大師の曰く、我法三千年の後未だ曾て一絲毫も移易せずと、これ此意なり、法は其人を得るとき
 は則ち顯はれ、人を得るときは則ち隠る、かくるゝときは日の如く、顯はるゝも亦日のことし、大
 師の二祖を得るときは則ち鬪に似たり、若し二祖を得るときは則ち断するに似て鬪と言ふへから
 ず、又断すと言ふへからず、只言ふこと未だ曾て一絲毫も移易せざるなり。

一法は無始より無終なり、断續無し、只佛出て給ふときは則ち法顯る、迦葉佛の後釋迦出て給ふとき
 法顯る、五百年を以て正法とす、佛世を去ること久しきなり、正法今如何を行はれんや、或人問ふ
 て曰く、六時の行道これ佛法の行にあらすや、曰くこれ事法なり理致にあらす、又問ふ、事理碍な
 きときは則ち事法即ち理致にあらす乎、曰く、これ上等なり中下の言に非ず、又問ふ、念佛念法こ
 れ佛法の行ひにあらす乎、曰く、これ結縁の一得のみ眞の行と謂はす、又問ふ、論義法問これ佛法
 にあらす乎、曰く、これ言説のみ、又問ふ、參禪學道これ佛法にあらす乎、曰く、參禪學道は古人
 の一問一答其語の通せざる所、これを知らんと欲す、又これ眞の禪にあらす、又問ふ、祖師の語録
 を以て之を讀むこと縦横自在に之を沙汰す、これ禪禪の人に非ず乎、曰く、これ辨舌利口の人なり
 善星比丘、よく三乘十二分教を讀むと雖も地獄に入ることを免かれず、心法を知らざるためなり、こ

れに依りて言ふ、佛世をさること久しきなり、正法如何を行はれん乎、譬へば法は一口の洪鐘のこ
 とし、人を得て扣き聲とさば則ち鳴る、人を得ずしては聲なし、巡りて扣くときは則ち聲なき所な
 し、法も亦然り、人を得るときは則ち法顯る、人を得るときは則ち法なきに似たり、塵々刹々顯
 々物々として法に具はらずと云ふことなし、觸背共に皆法なり、鐘を巡り扣くときは則ち所として
 皆な鳴らざるなきか如きなり。

一正像末のことは人にありて時にはあらざる歟、佛在世と雖も放逸漸の者もあり、飲酒又は非時乞
 食の者あり、時に佛之を制し之を止めしむるも戒といひ律といふ、況んや又法華會上いたりて五千
 の退席あり衆中の糟糠なり、退きぬるも又よしとの佛言あり、これ像末の人なり、佛滅後五々百年
 の間は言ふにをよばず、今時と雖も能信の人は或從經卷或從知識して純一無雜勇猛精進して、辨道
 工夫し無上の妙道を修證するあり、是正法の人に非ずや、今時は教のみありて行證なしと退心し日
 ら糟粕とると勿れ、至勝々々。

一佛祖通載に曰く、周孔の未だ之を言はざる、物蠢々として窮りなし、詩書これを載せざる事証々ど
 して何を限らん、信なるかな、書は言を盡さず、言は意をつくさず、何ぞ六經の局致に拘はりて三
 乗の逆旨にそむくことを得ん哉と云々。

一百尺竿頭歩を進むと、此輩人の分明に説くを、山谷詩に曰く、百尺の竿頭歩行を放し、更に脚
 跟に向つて一節を參せよと、百尺竿頭歩を進むと言ふ心は、百尺の竿頭は上に向ふ至極の處なり、百
 尺竿頭に到らんと欲せば第一節を參せよ、もし一句に參せば百尺竿頭も亦自由を得べきなり、百尺
 竿頭は青雲に獨歩するなり、青雲に獨歩せんと欲せば一句を參すべきなり、脚跟下の第一節と云ふは
 百尺の竿頭にも第一節のあるものぞ、第一節を心得たらば節々百尺にいたりても亦異なる節あるこ
 となきなり、又招賢大師の偈に曰く、百尺竿頭不動の人、然も得入すと雖も未だ真となさず、百尺
 竿頭須らく歩を進むへし、十方世界これ全身と云々。

一學をする人は必ず惡惠を生ず、其故如何となれば人を超んと欲して才ある人を壓す、しかも又不才
 のものを笑ふ、我に順ふて一字と雖も之を問ふときは則ち欣ひ、我に違ふて千人に問へば之ををね
 むこと敵の如くす、眼を高くして人を直下に見る、此等は其惡惠の一二なり、無學の人は諍ふ所な
 し、これ學力無き故我本然の心を存するなり、學をする人は曲節多く、學なき人は直心なり、學を
 する人は人を疑ひ、學なき人は人を信す、信はそれ萬行の始終なり、只學をなして惡惠を求めんよ
 りは寧ろ無學にして自己を存せよ、彼の學をする人は自己を失ひ惡惠を生ずるあり。

一往昔は學ひて道を用ひ身を直くし心を清くす、今は學ひて惡智を長す、これ時なり、聖人も亦時に

勝つことあたはず、故に孔子も時に遇はざるなり。

一順つて禮するとは、頂肩手腰膝足皆禮あり、佛入滅のとき迦葉、寶闍闍山に在り、正定に入るとき大
 地震動す、これ佛入滅なることを知り疾く行く、七日の滿つるときに至る、その時悲哀して頂肩
 手腰膝禮をなす、如來の足見へす、その時願心を發し、禮せんことを請ふ、時に佛千輻輪の相を現
 して楯より双趺を出してこれを示す、此事を參する人道理を知らず、只佛の双足を以て這个のもの
 とする而已、千輻輪の相一足皆理あるなり。

一頭面攝足禮とは、禮拜のとき佛の頭面を見たてまつり、見下して佛の足を手に承けることと、頭面
 より足に至りて攝して禮するを。

一履俗韻會に曰く、從は尾なり、後に從を從と曰ふ、跋從は猶強梁のことしと云々、跋と云ふは如何に
 も強く健かに人をも何とも思はず、凶横自恣にして人を凌ぐの貌と云々。

一幽歩跡なく、妙動たつねかたし。正宗記下

一我に弟子空侍者と云ふものあり、父母なく兄弟なし、氏族を究め知らず、生縁も言ひかたし、初め
 來ると云ふこともなければ歸り去らんと思ふこともなし、我渠を智罵すれとも憚れる色もなし、疾
 病の患なければ醫藥の術を頼まず、幸ひに我弟子には一分の相應なりと思へり、渠時々我に問ふ、我

答ふ、又我心に浮ふこと棄かたりに脱ぎ、果て開きす、昔年のこと返すこれと云ひ。

澤庵和尚玲瓏隨筆大尾

不動智神妙錄

無明住地煩惱

無明とは、明になしと申す文字にて候、迷を申し候、住地とは、止る位と申す文字にて候、佛法修行に五十二位と申す事の候、その五十二位の内に物毎に心の止る所を住地と申し候、住は止ると申す義理にて候、止ると申すは、何事に付ても其事に心を止るを申し候、貴殿の兵法にて申し候は、向ふより切太刀を一目見て其處にそこにて合はんと思へば、向ふの太刀に其處に心が止りて手前の働か抜け候て、向ふの人にさられ候、是れを止ると申し候、打太刀を見る事は見れどもそこに心をとめず、向ふの打太刀の拍子合せて、打たうとも思はず思案分別を残さず、振上ぐる太刀を見るや否や心を卒度止めず、其まゝ付入て向ふの太刀にとりつかば、我をさらんとする刀を我が方へもぎとりて、却つて向ふを切る刀となるべく候、禪宗には是れを還把_ニ鎗頭_ニ倒_ニ刺_ニ人_ニ來ると申し候、鎗はほこにて候、人の持ちたる刀を我が方へもぎ取りて還つて相手を切るを申す心に候、貴殿の無刀

と仰せられ候事にて候、向ふから打つとも吾から討つとも、打つ人にも打つ太刀にも、程にも拍子にも、卒度も心を止めれば手前の働は皆抜候て、人にさられ可申候、敵に我身を置けば敵に心をとられ候間、我身にも心を置くべからず、我が身に心を引きしめて置くも初心の間習入り候時の事あるべし、太刀に心をとられ候、拍子合に心を置けば拍子合に心をとられ候、我太刀に心を置けば我太刀に心をとられ候、これ皆心のとまりて手前抜殺になり申し候、貴殿御覺え可有候、佛法と引當て申すにて候、佛法には此止る心を迷と申し候、故に無明住地煩惱と申すことにて候

諸佛不動智

と申す事は、不動とはうごかずといふ文字にて候、智は智慧の智にて候、不動と申し候ても、石か木かのやうに無性なる義理にてはなく候、向ふへも左へも右へも、十方八方へ心は動き度きやうに動きながら、卒度も止らぬ心を不動智と申し候、不動明王と申して右の手に剣を握り、左の手に繩を取りて、齒を喰出し、目を怒かし、佛法を妨げん悪魔を降伏せんといふ立て居られ候姿もあの様なるが、何國の世界にもかくれて居られ候てはなし、容とは佛法守護の形はつくり、體とはこの不動智を體として衆生に見せたるにて候、一向の凡夫は怖れをなして佛法に仇をなさんと思ひ、悟に近き人は不動智を表したる所を悟りて一切の迷を晴らし、即ち不動智を明らかにて此身則ち不動明王

程に此心法をよく執行したる人は、悪魔もいやまゝと知らせん爲めの不動明王にて候、然れば不動明王と申すも人の一心の動かぬ所を申し候、亦身を動轉せぬことにて候、動轉せぬとは物毎に留らぬ事にて候、物一見見て其心を止めぬを不動と申し候、なせなれば物に心が止り候へば、いろいろの分別か胸に候間胸のうちいろいろに動き候、止れば止る心は動きても動かぬにて候。譬へば十人して一太刀つゝ我へ太刀を入るゝも、一太刀を受流して跡に心を止めず、跡を捨て跡を拾ひ候は、十人ながらへ働を動かさぬにて候、十人十度心は働けとも一人にも心を止めずば、次第に取合ひて働は抜け申間敷候、若し又一人の前に心が止り候は、一人の打太刀をは打流すべけれども二人めの時は手前の働抜け可申候、千手観音とて手が千御入り候は、弓を取る手に心か止らば九百九十九の手は皆用に立ち申す間敷候、一所に心を止めぬにより手か皆用に立つなり、觀音とて身一つに千の手か何しに可有候、不動智か開け候へば身に手か千有りても皆用に立つと云ふ事を人に示さんが爲めに作りたる容にて候、假令一本の木に向ふて其内の赤き葉一つを見て居れば、残りの葉は見へぬなり、葉ひとつに目をかけずして一本の木に何心もなく打向ひ候へば、數多の葉残らず目に見え候、葉一つに心をとられ候は、残りの葉は見えず、一つに心を止めねば、百千の葉みな見えず申し候。是れを得心したる人は、即ち千手千眼の觀音にて候、然るを一向の凡夫は、唯一筋に身

一つに千の千の眼が御座して難有と信ト候、又なまものヒリなる人は、身一つに千の眼か何しに
あるらん虚言よと破り譏る也、今少し能く知れば、凡夫の信するにてもなく破るにてもなく道理の
上にて尊信し、佛法はよく一物にして其理を顯はす事にて候、諸道ともに斯様のものにて候、神道
は別して其道と見及び候、有の儘に思ふも凡夫、又打破れば猶惡し、其内に道理有る事にて候、此
道彼道さまざまに候へども、極所は落着候、扱初心の地より修行して不動智の位を至れば、立歸つ
て住地の初心の位へ落つべき千細御入り候。貴殿の兵法にて可申候、初心は身に持つ太刀の構も何
も知らぬものなれば身に心の止る事もなし、人が打ち候へはつひ取合ふばかりにて何の心もな、然
る處にさまざまの事を習ひ、身に持つ太刀の取様、心の置所、いろくの事を教へぬれば色々處
に心か止り、人を打たんとすれば鬼や角して殊の外不自由なる事、日を重ね年月をかさね稽古する
に従ひ、後は身の構も太刀の取様も、背心になくなりて唯最初い何か知らぬ何々なき様の様也、是
れ初と終と同トやうになる心持にて、一から十までかぞへまはせば、一と十と隣りなり申し候、調
子なども一の初の下さ一をかぞへて上無と申す高き調子へ行き候へば、一の下と一の上とは隣りに
なり申し候。

- 一 登越。
- 二 斷念。
- 三 平調。
- 四 勝絶。
- 五 下無。
- 六 雙調。
- 七 月鏡。
- 八 つくせき。

- 十 盤涉。
- 十一 神仙。
- 十二 上無。

つと高きとつと低きは似たるものになり申し候、佛法もつとたけ候へは佛とも法とも知らぬ
人のやうに、人の見なす程に飾も何もなくなるものにて候、故に初の住地の無明と煩惱と後の不動
智とが一つに成りて、智慧の分は失せて無心無念の位お落着申し候。愚痴の凡夫は一向に智慧が
なき程お出ぬ也、又つとたけ至りたる智慧は早かへ處入によりて一切出ぬなり、なま物知りな
るによつて智慧が頭へ出で申し候てをかしく候。今時分の出家の作法ども嘘をかしく可思召候、御
耻かしく候。理の修行、事の修行と申す事の候。理とは右に申し上げ候如く、至りては何も取あは
ず唯一心の捨やうにて候、段々右に寄付け候如くも候、然れども事の修行を不仕候まは、道理は
かり胸に有りて身も手も不働候、事の修行と申し候は、貴殿の兵法にてまれば身構の五箇に一字の
さまざまの習事もて候、理を知りても事の自由に働かねばならず候、身に持つ太刀の取まはし能く
候ても理の極り候所の聞く候ては相成間敷候、事理の二つは車の輪の如くなるべく候。

問 不容髮

と申す事候、貴殿の兵法にたとへて可申候、問とは物を二つかさね合ふたる問へは、髮筋も入ら
ぬと申す義にて候、たとへば手をハタと打つに其儘ハツツと聲が出で候、打つ手の間へ髮筋の入る

程の間もなく聲が出で候、手を打つて後に聲が思案して間を置いて出で申すにては無く候、打つと其儘聲が出で候、人の打ち申したる太刀に心が止り候えば、間が出来候、其間に手前の働が抜け候向ふの打つ太刀と我働との間へは、髪筋も入らず候程あらば、人の太刀は我太刀たるべく候、神の問答には此心ある事にて候、佛法にては此止りて物に心の残ることを嫌ひ申し候、故に止るを煩悩と申し候、たてまつたる早川へも玉を流す様に乗つてドット流れて少しも止る心なきを尊ひ候。

石火之機

と申す事の候、是れも前の心持にて候、石をハタと打つや否や光が出で、打つと其のまゝ出る火なれば間も透問もなき事にて候、是れも心の止るべき間のなき事を申し候、早き事とはかり心得候へば悪敷候、心を物に止め問敷と云ふが詮にて候。早きにも心の止まらぬ所を詮に申し候、心が止まれば我心を人にとられ申し候、早くせんと思ひ設けて早くせば、思ひ設ける心に又心を奪はれ候、西行の歌に「世をいとふ人とし聞けはかりの宿に心止めちと思ふはかりそ」と申す歌に、江口の遊女の讀みし歌なり、歌を我と心得られ候て可然候はんか、心止めなと思ふはかりぞ心得所と可存候、又是れにて御合點可有候、禪宗にて如何是佛、問ひ候は、拳をさしわぐべし、如何か佛法の極意と問は、其弊未だ絶たざるに一枝の梅花となりとも庭前の柏樹子となりとも云ふべし、云ふ事の吉凶

を撰ぶにてはなし止らぬ心を尊ぶあり、止まらぬ心は色にも香にも移らぬ也、此移らぬ心の體を神とも祝ひ、佛とも尊び、禪心とて、極意とも申候へども、思案して後に云ひ出し候へば、金言妙句にて住地煩惱にて候、石火の機と申すもピカリとする稻光のばやきを申し候、例へば右衛門とよひかくるとアツと答ふるを不動智と申し候、右衛門と呼びかけられて何の用にてか有る可きなど、思案して、跡に何の用か採いふ心は住地煩惱にて候、止りて物に動かされ迷はざる心は所住煩惱とて凡夫にて候、又右衛門と呼ばれてオツと答ふるは諸佛智なり、佛と衆生と二つ無く、神と人と二つ無く候、此心の如くなるを神とも佛とも申し候、神道、歌道、儒道とて道多く候へども、皆この一心の明なる所を申し候、言葉にて心を講釋したふんにてはこの一心人と我身にあたりて、晝夜善事悪事とも業により家を離れ國を亡し其身の程々にしたがひ、善し悪しとも心の業にて候へども、此心を如何やうなるものぞと悟り明ひる人なく候て、背心に惑され候、世の中に心を知らぬ人は可有候、能く明め候人は稀にも有りがたく見及び候、たましく明め知る事もまた行ひ候事成り難く、此一心を能く説くとて心を明めたるにてはあまじく候、水の事を講釋致し候とても口はぬれ不申候火を能く説くとも口は熱からず、鐵の水賊の火に觸れてならでは知れぬもの也。書を講釋したるまでにては知れ不申候、食物をよく説くとてもひたるさ事は直り不申候、説く人の分にては知れ申す

間候、世の中に佛道も儒道も心を説き候得共、其説く如く其人の身持なく候心は明に知らぬ物にて候、人々我身にあり一心本来を篤と極め悟り候はねは不明候、又參學をいたる人の心が明かならぬは、參學する人も多く候へどもそれにもよらず候、參學したる人心持皆々惡敷候、此一心の明めやうは深く工夫の上より出で可申候。

心の置所

心を何處に置かうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり、敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり、敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるゝなり、人の構に心を置けば、人の構に心を取らるゝなり、兎角心の置所はないと言ふ、或人問ふ、我心を兎角餘所へやれば、心行く所に志を取止めて敵に負けるほどに、我心を臍の下に押込めて餘所にやらすして、敵の働により轉化せよと云ふ、尤も左もあるべき事なり、然れども佛法の向上の段より見れば、臍の下に押込めて餘所へやらぬと云ふは、段が卑きし向上にあらず、修行積古の時の位なり、敵の字の位なり、又は孟子の放心を求めよと云ひたる位なり、上りたる向上の段にてはなし、敵の字の心持なり、放心の事は刑書に記し進

と可有御覽候、臍の下に押込んで餘所へやるまじきとすれば、やるまじと思ふ心に心を取られて先の用かけ殊の外不自由になるあり、或人問ふて云ふは、心を臍の下に押込んで働かぬも不自由にして用が缺けば、我身の内にして何處にか心を置可そや、答へて曰く、右の手に置けば右の手に取られて身の用缺けるなり、心を眼に置けば眼に取られて身の用缺け申し候、右の足に心を置けば右の足に心を取られて身の用缺けるなり、何處なりとも一所に心を置けば餘の方の用は皆缺けるなり、然らば則ち心を何處に置くべきや、我答へて曰く、何處にも置かぬば我身に一ばいに行きわたるなり、全體に延ひひろごりある程に、手の入る時は手の用を叶へ、足の入る時は足の用を叶へ、目の入る時は目の用を叶へ、其入る所々に行きわたる程に、其入る所々の用を叶ふるなり、萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くべきなり、思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも殘さず、心をは總身に捨て置き、所々止めずして其所々に在て用をば外さず叶ふべし、心を一所に置けば偏に落つると云ふなり、偏とは一方に片付きたる事を云ふなり、正とは何處へも行き渡つたる事なり、正心とは總身へ心を伸べて一方へ付かぬと言ふなり、心の一處に片付きて一方缺けるを偏心と申すなり、偏を嫌ひ申し候、萬事に堅つたるは偏に落つるとて道に離れ申す事なり、何處に置かうとて思ひなければ、心は全體に伸びひろがりて行き渡りて有るものな

り、心をば何處にも置かずして、敵の動によりて常位々々心を其所々にて可_レ用心_一歟、總身に渡つてあれば、手の入る時には手にある心を遣ふべし、足の入る時には足にある心を遣ふべし、一所に定めて置きたらば、其置きたる所より引出し遣らんとする程に、其處に止りて用が抜け申し候、心を繋ぎ猫のやうにして餘處にやるまいとて、我身に引止めて置けば、我身に心を取らるゝなり、身の内に捨て置けば餘處へは行かぬものなり、唯一所に止めぬ工夫是れ皆修行なり、心をばどつこにも止めぬが眼なり肝要なり、どつこにも置かねばどつこにもあるぞ、心を外へやりたる時も、心を一方に置けば九方は缺けるなり、心を一方に置かざれば十方にあるぞ。

本心妄心

と申す事の候、本心と申すは一所に留らず、全身全體に延び廣がりたる心にて候、妄心は何ぞ思ひつめて一所に固り候心よて、本心が一所に固り集りて妄心と申すものに成り申し候、本心は失ひ候と所々の用か缺ける程に、失はぬ様にするが本心なり、たとへば本心は水の如く一所に留らず、妄心は氷の如くにて、氷にては手も頭も洗はれ不_レ申候、氷を解かして水と爲し何所へも流れるやうにして、手足をも何をも洗ふべし心一所に固り一事に留り候へば、氷固りて自由に使はれ申し候、氷にて手足の洗はれぬ如くにて候、心を溶かして總身へ水の延びるやうに用ひ、其所に遣りたきまゝ

に遣りて使ひ候、是れを本心と申し候、

有心之心無心之心

と申す事の候、有心の心と申すは妄心と同じ事にて、有心とはアルコ、ロと讀む文字にて、何事にても一方へ思ひ詰る所なり、心に思ふ事ありて分別思案が生ずる程に、有心の心と申し候、無心の心と申すは右の本心と同じ事にて、固り定りたる事なく分別も思案も何も無き時の心、總身に廣がりて全體に行渡る心を無心と申す也、どつこにも置かね心なり、石か木かのやうにてはなし、留る所なきを無心と申す也、留れば心に物かあり留る所なければ心に何も無し、心に何もなきを無心の心と申し、又は無心無念とも申し候、此無心が心に能くなりぬれば一事に止らず一事に缺かず、道に水の湛えたるやうにして此身に在りて用の向ふ時出て叶ふなり、一所に定り留りたる心は自由に働かねなり、車の輪も堅からぬにより廻るなり、一所につまりたらば廻るまじきなり、心も一時に定むれば働かねものなり、心中に何ぞ思ふ事あれば人の云ふ事とも聞きながら聞えざるあり、思ふ事に心が止るゆゑなり、心が其思ふ事に在りて一方へかたより、一方へかたよれば物を聞けども聞えず、見れども見えざるなり、是れ心に物ある故なり、あるとは思ふ事があるなり、此有る物を去りぬれば、心無心にして唯用の時ばかり働きて其用に當る、此心にある物を去らんと思ふ心が又心

中の有る物になる、思はざれば獨り去りて自ら無心となるなり、常にかくすれば何時となく後ば獨り其位へ行くなり、急にやらんとすれば行かぬものなり、古歌に「思はしと思ふも物と思ふなり思はしとだに思はしやまみ」。

水上打胡盧子、捺着即轉

胡盧子を捺着するとは手を以て押すなり、瓢を水へ投げて押せばロコト脇へ退き、何としてもし所に止らぬものなり、至りたる人の心は卒度、物に止らぬ事なり、水の上の瓢を押すが如くなり。

應無所住而生其心

此文を讀み候へば、オウムシヨシウマシヤウエンと讀み候、萬の業をするにせうと思ふ心が生ずれば、其する事に心が止るなり、然る間止る所なくして心を生ずべしとなり、心の生ずる所に生ぜざれば手も行かず、行けばそこに止る心を生じて其事をしながら止る事なきと、諸道の名人と申すなり、此の止る心から執着の心起り、輪廻も是れより起り、此止る心生死のまづなと成り申し候、花紅葉を見て花紅葉を見る心は生トながら、其所に止らぬを詮と致し候、慈圓の歌に「柴の戸に匂はん花もさあわらばぬなめけりな恨めしの世や」。花は無心に匂ひぬるを我は心を花にとめてなめけるよと、身の是れにぞみたる心が恨めしと也、見るとも聞くともし所に心を止めぬを至極

とする事にて候、敬の字を主一無適と致す程も、心を一所に定めて餘所へ心をやらす、後にいいて切るとも切る方へ心をやらぬが肝要の事にて候、殊に主君杯に御意を承る事、敬の字の心眠たるべし、佛法にも敬の字の心有り、敬白鐘を鳴らすとて鐘を三つ鳴して手を合せ敬白す、先づ佛と唱へ上げる此敬白の心、主一無適、一心不亂、同ト義にて候、然れども佛法にては敬の字の心は至極の所にては無く候、我心を捉へて亂さぬやうにとて習ひ入る修行稽古の法にて候、此稽古年月つもりぬれば心を何方へ追放しやりても、自由なる位に行く事にて候、右の應無所住の位は向上至極の位にて候、敬の字の心は心の餘所へ行くを引留めて遣るまい、遣れば亂ると思ひて卒度も油断なく心を引きつめて置、位にて候、是れは常座心を散らさぬ一旦の事なり、常に如是ありては不自由なる義なり、譬へば菴の子を捕へられ候て、猫の繩を常に引きつめて居ては馴れぬ位にて、我心を猫をつれたるやうにして不自由にしては、用が心のまゝに成る間敷候、猫によく仕付をして置いて綱を追放して行度き方へ遣り候て、菴と一つ居ても捕へぬやうにするが、應無所住而生其心の文の心にて候、我心を放捨、猫のやうに打捨て、行度き方へ行きても心の止らぬやうに心を用ひ候、貴殿の兵法に當り申し候は、太刀を打つ手に心を止めず、一切打つ手を忘れて打つて人を切れ、人に心を置くな、人も空、我も空、打つ手も打つ太刀も空と心得、空に心を取られまひど、餘念の無

學禪師、大唐の亂に捕へられて切らるゝ時に、電光影裏斬春風といふ偈を作りたれば、太刀をい捨て、走りたると也、無學の心は太刀をひらりと振上げたるとは、稻光の如く電光のびかりとする間何の心も何の念もないぞ、打つ刀も心はなし、切る人も心はなし、切らるゝ我も心はなし、切る人も空、太刀も空、打たるゝ我も空なれば、打つ人も人にあらず、打つ太刀も太刀にあらず、打たるゝ我も稻光のびかりとする内に、春の空を吹く風を切る如くなり、一切止らぬ心なり、風を切つたのは太刀に覺ぬもあるまいぞ、かやうに心を忘れ切つて萬の事をするが上手の位なり、舞を舞へば手に扇を取り足を踏む、其手足を能くせむ舞を能く舞はむと思ひて、忘れさらば上手とは申されず候、未だ手足に心止らば業は皆面白かるまじ、悉皆心を捨てさらすしてする所作は皆惡敷候。

不見放心

と申すは、孟子が申したるにて候、離れたる心を尋ね求めて我身へ返せと申す心にて候、譬へば犬猫鶏など放れて餘所へ行けば、尋ね求めて我家へ返す如くに心は身の主なるを、惡敷道へ行く心が逃げるを何とて求めて返さぬぞと也、尤も斯くあるべき義なり、然るに又邵康節と云ひしは心要放と申し候、はらりと替り申し候、斯く申したる心持は、心を執つめて欲いては勢れ猫のやうにて身が働かれれば、物に心が止らず染ぬやうに能く使ひなして、捨置いて何所へなりとも退放せと云

ふ義なり、物に心が染み止るによつて染すな止らすな、我身へ求め返せと云ふは、初心稽古の位なり、逆の泥に染ぬが如くなれ、泥にありても苦しからず、よく磨きたる水晶の玉は泥の内に入つても染ぬやうに心をなして、行き度き所にやれ、心を引きつめては不自由なるぞ、心を引きしめて置くも、初心の時の事よ、一期其分では、上段は終に取られずして下段にて果つるなり、稽古の時は孟子が謂ふ不見放心と申す心持能く候、至極の時は邵康節が必要放と申すにて候、中峯和尚の語に見放心とあり、此意は即ち邵康節が心をば放さんことを要せよと云ひたること一つにて、放心を求めよ引きとやめて一所に置くなど申す義にて候、又具不退轉と云ふ、是れも中峯和尚の言葉なり、退轉せず替はらぬ心を持ってと云ふ義なり、人たゞ一度二度は能く行けども、又つなかれて常に無い裡に退轉せぬやうなるを心持てと申す事にて候。

急水上打毬子念々不停留

と申す事の候、急にたきつて流るゝ水の上へ手毬を投せば、浪にのつてばつばと止らぬ事を申す義なり。

前後際斷

と申す事の候、前の心をすて又今の心を跡へ殘すか無敷候なり、前と今との間をば、きつてのけ

よと云ふ心なり、是れを前後の際を切つて放せと云ふ義なり、心をど、め口義なり。

内々存寄候事、御諫可申入候由、愚案如何に存候得共、折節幸と存じ及見候處おらまし書付
進し申候、

貴殿事、兵法に於て今古無雙の達人故、當時官位俸祿世の間をも美々敷候、此大厚恩を蒙ても覺ても忘るゝことなく、且夕恩を報し忠を盡さんことをのみ思ひたまふべし、忠を盡くすといふは、先づ我心を正くし身を治め、毛頭君に二心なく、人を恨み咎めず、日々出仕怠らず、一家に於ては父母に能く孝を盡し、夫婦の間少しも猥になく、禮義正しく妻婦を愛せず、色の道を絶、父母の間おごそかに道を以てし、下を使ふに私のへだてなく、善人を用お近付け、我足らざる所を諫め、御國の政を正敷し、不善人を遠ざくる様にするときは、善人は日々に進み、不善人もおのづから主人の善を好む所に化せられ、惡を去り善に遷るなり、如此君臣上下善人にして、欲薄く奢を止むる時は、國に資満ちて民も豊ふ治り、子の親をしたしみ、手足の上を救ふが如くならば、國は自ら平に成るべし、是れ忠の初なり、この金銀の二心なき兵を、以上様々の御時御用に立てたらば、千萬人を遣ふとも心のまゝなるべし、則ら先きに云ふ所の千手觀音の一心正しければ、千の手皆用に立つか如く、貴殿の兵術の心正しければ、一心の働自在にして數千人の敵をも一劍に隨へるが如し、是

れ大忠にあらずや、其心正しき時は、外より人の知る事あらず、一念發る所に善と惡との二つあり、其善惡二つの本を考へて、善をなし惡をせざれば、心自ら正直なり。惡と知り止めざるは我好む所の痛みあるゆゑなり、或は色を好むか、奢氣隨にするか、いかさま心に好む所の働きある故に善人ありとも我氣に合はされば善事を用ひず、無智なれども一旦我氣に合へば登し用ひ好むゆゑも善人はありても用ひざれば無きが如し、然れば幾千人ありとても、自然の時、主人の用に立つ物は一人も不可有之、彼の一旦氣に入りたる無智若輩の惡人は、元より心正しからざる者故、事に臨んで一命を捨んと思ふ事、勢々不可有、心正しからざるもの、主の用に立ちたる事は、往昔より不承及とてころなり、貴殿の弟子を御取立て被成にも、箇様の事有之由、若々敷存ト候、是れ皆一片の數奇好む所より其病にひかれ、惡に落入るを知らざるなり、人は知らぬと思へども、微より明かなるおしとて、我心に知れば、天地鬼神萬民も知るなり、如是して國を保つ、賊に危き事にあらずや、然らば大不忠ありとこそ存ト候へ、たとへば我一人いかに矢猛に主人に忠を盡さんと思ふとも、一家の人和せず、柳生谷一郷(但馬守の領所)の民背きなば、何れも皆相違仕るべし、總て人の善し惡しきを知らんと思はば、其愛し用おらるゝ臣下、又は親み交る友連を以て知ると云へり、主人善なれば其近臣皆善人なり、主人正しからざれば臣下友連皆正しからず、然らば隣人みななみし

隣國是れを侮るなり、善なるときは、諸人親むとは此等の事なり、國は善人を以て實とすと云へり
 よく御體認なさるべし、人の知る所に於て、私の不義を去り小人を遠け賢を好む事を急に成さ
 れ候は、いよ國の政正しく、御忠臣第一たるべく候、就中御賢息御行跡の事、親の身正一か
 らずして、子の悪しさを責むること逆なり、先づ貴殿の身を正しく成され、其上にて御賢見も成さ
 れ候は、自ら正しくな、御舍弟内膳殿も兄の行跡ならひ正しかるべければ、父子ともに善人
 となり、目出度かるべし、取ると捨つるとは義を以てすると云へり、唯今寵臣たるにより、諸大名
 より賄を厚くし、欲に義を忘れ候事、努々不可有候、貴殿亂舞を好み、自身の能に奢り、諸大名
 衆へ押て參られ、能を勤められ候事、偏に病と存候なり、上の唱は猿樂の様に申し候由、また換
 抄のよき大名をば、御前に於てもつよく御取成しなされる由、重ねて能く御思案可然歎、歌に
 「心こそ心迷はす心なれ心に心心ゆるすな」。

不動智神妙錄終

15/4/40

明治三十三年三月廿五日印刷
 全 年四月一日發行

編輯者
兼發行者

東京市日本橋區本石町二丁目十六番地

田平義三郎

印刷者

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

竹川吉太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

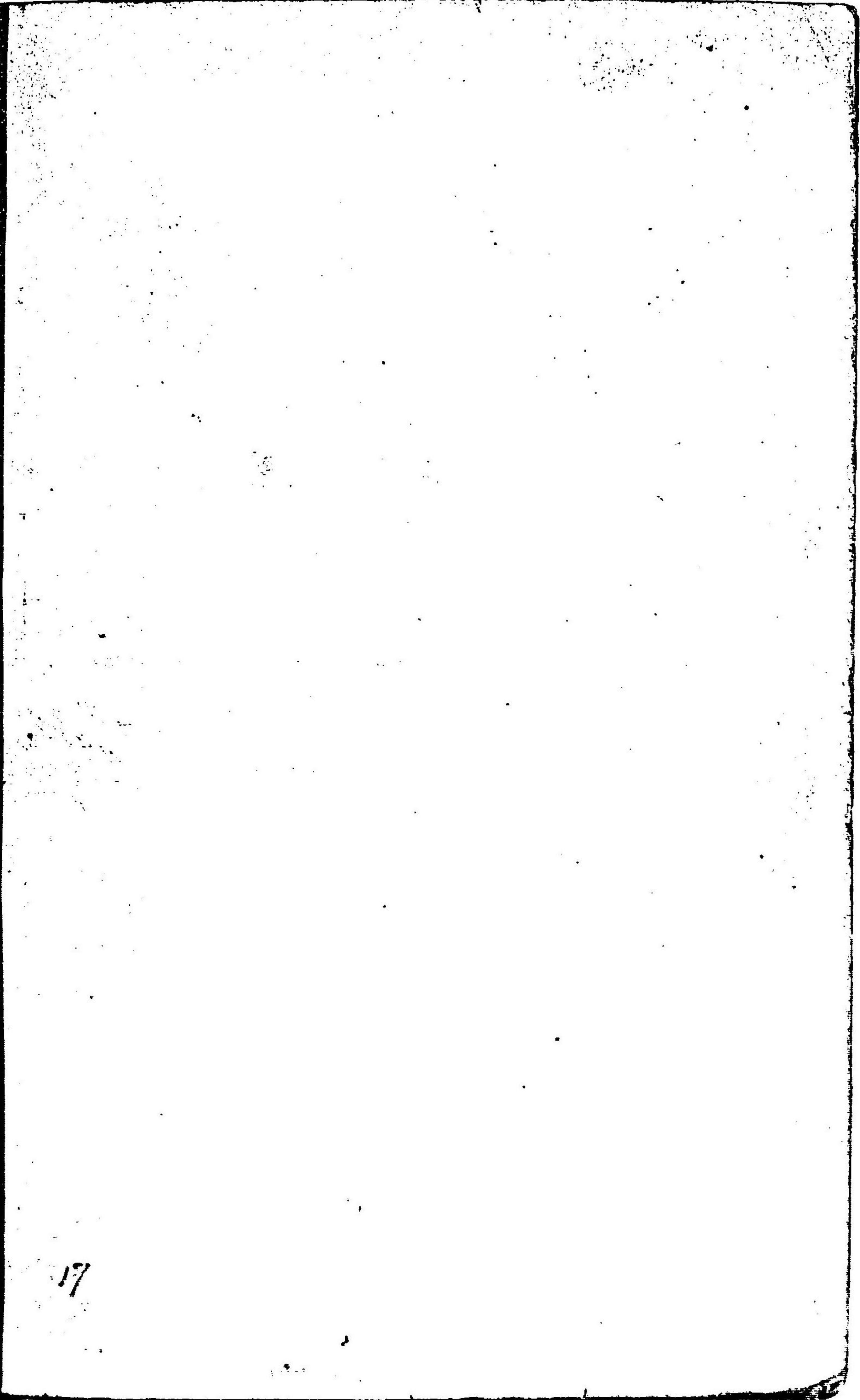
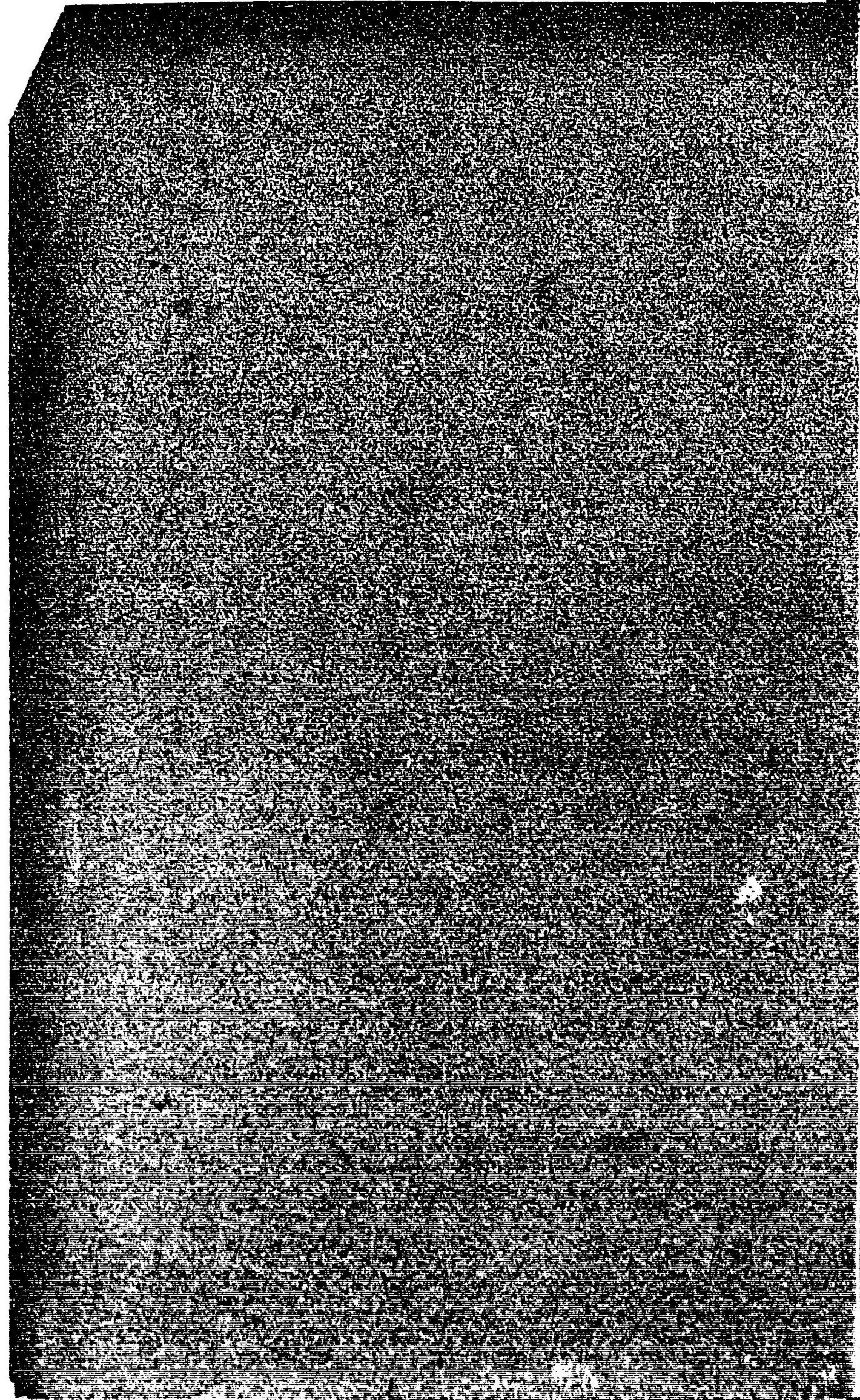
上田屋印刷所

發行所

東京市日本橋區本石町二丁目十六番地

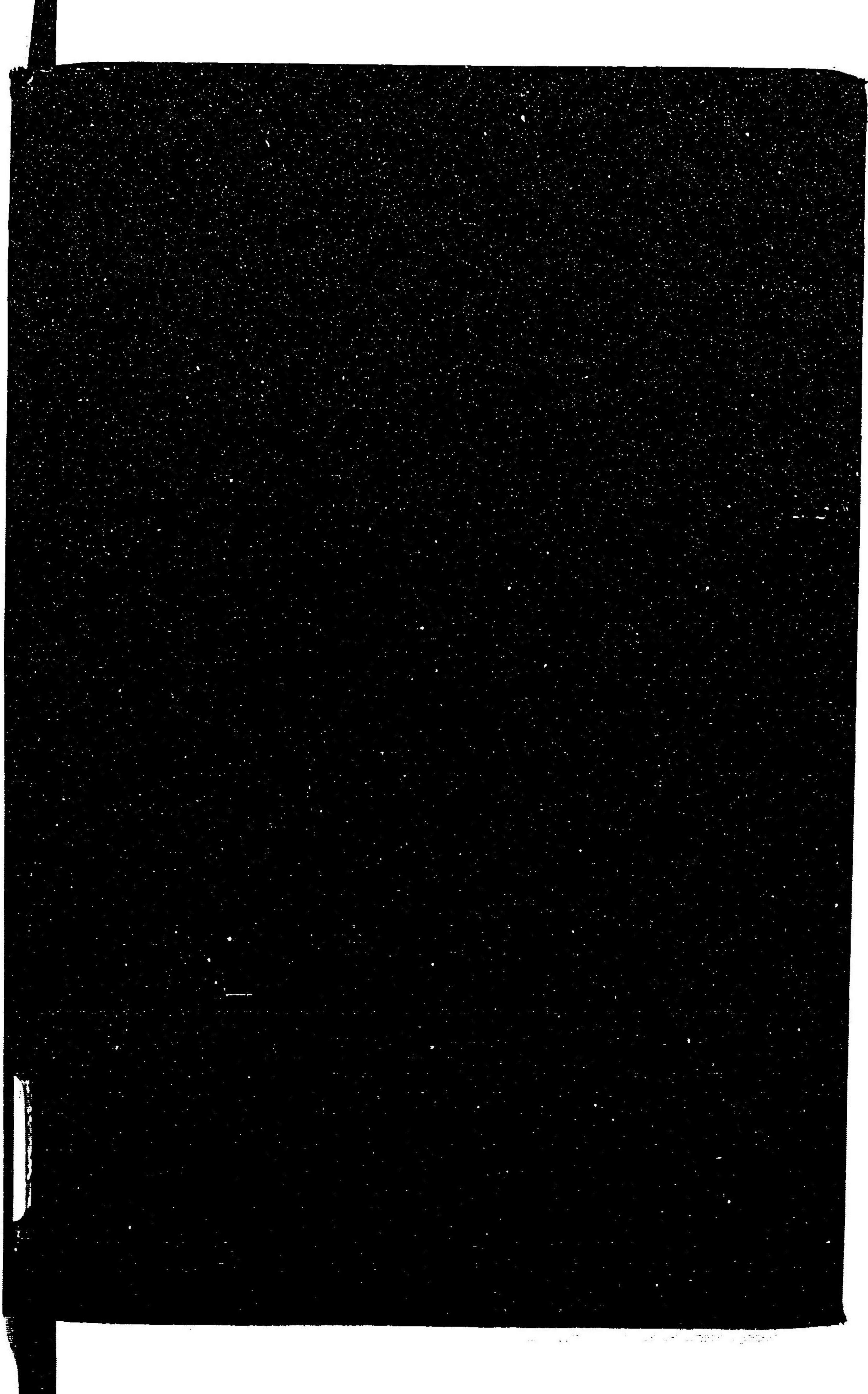
上田屋書店

86
160



17

86
160



019883-000-2

86-160

玲瓏隨筆・不動智神妙錄

釈 沢庵／著

M33.4

ABG-0715



